

総社市埋蔵文化財調査年報 27

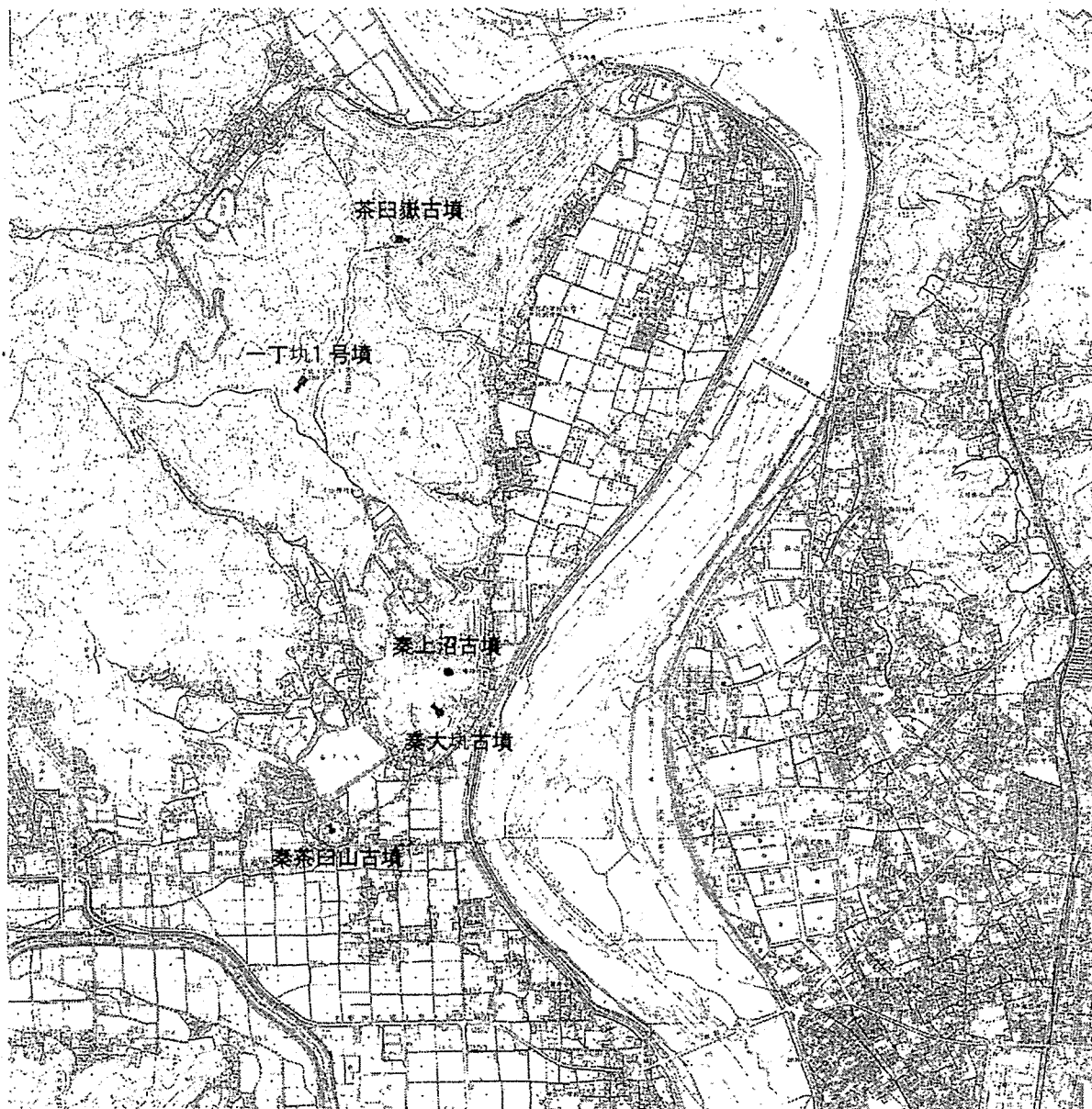
(平成28年度)

2018年3月

岡山県総社市教育委員会

『総社市埋蔵文化財調査年報』27 正誤表

頁	行	誤	正
例言	4	村田 晋	村田 晋 (現広島県立歴史民俗資料館)
例言	6	編集は高橋が行い、文化課で校閲・構成した	編集は高橋が行った。
目次	7	平成28年度	2016 (平成28) 年度
1	25	秦原廃寺	秦 (秦原) 廃寺
1	28	作製	作成
2	8	随庵古墳	随庵古墳
3	20(番号18)	就実大学総合学科	就実大学総合歴史学科
4	15(番号47)	一丁ぐろ	一丁埵
4	26(番号58)	まちかど	まちづくり
4	31(番号63)	まちかど	まちづくり
4	35(番号67)	まちかど	まちづくり
5	6	調査種類欄	試掘調査
5	21	柱穴間出	柱穴検出
6	4	安倍前	阿倍前
6	40	窪木時大文字	窪木字大文字
6	81	安倍前	阿倍前
20	6	岡山県古代吉備文化センター	岡山県古代吉備文化財センター
37	28	最終年度において	最終年度において
37	29(註1)	2007～2010年	2006～2010年
37	32(註4)	2016年	2017年
39	6	墳頂約116m	墳長約116m
51	13(註1)	『総社市埋蔵文化財調査報告書13』	『総社市埋蔵文化財調査年報13』
51	14(註2)	『総社市埋蔵文化財調査報告書21』	『総社市埋蔵文化財調査年報21』
51	15(註3)	『総社市埋蔵文化財調査報告書24』	『総社市埋蔵文化財調査年報23』
52	14	火葬骨臓器	火葬骨蔵器
52	16	真壁遺跡	諸上遺跡
57	4	東西	南北
58	8	後円部	口縁部



第60図 秦茶臼山古墳位置図と周辺の首長墳 (S=1/25,000)

序

総社市は、瀬戸内の温暖な気候のもと、肥沃な平野と豊かな水に恵まれ、水田水稲耕作のいちはやい導入を原動力とし、古代吉備国の中枢地として栄えてきました。地理的環境としては北部九州と畿内をつなぐ瀬戸内海交通の要として、現在でも道路網・鉄道網とも九州・四国・山陰・近畿の各地方を結ぶ拠点となり、重要な位置を占めています。

こうした歴史的・地理的環境を背景として、総社市内には、全国第10番目の大きさを誇る巨大な作山古墳、古代の動乱を伝える古代山城の鬼ノ城、鎮護国家のために建立された備中国分僧・尼寺をはじめとした数多くの文化財が残されています。これらの歴史遺産は、過去の歴史を窺い見るだけでなく、これからの未来を知るための重要な指標であります。

総社市は、昭和29年3月31日に人口36,968人で市制が発足し、平成16年には市制施行50周年を迎え、平成17年3月22日の合併により人口67,733人の新総社市になりました。平成20年3月末の68,065人をピークに景気の減速等によって減少傾向にありましたが、平成23年3月11日の東日本大震災を契機として自然災害の少ないことが注目され再び人口増加に転じ、平成29年12月末には人口過去最大である68,579人となっています。

このように総社市は県南広域圏におけるホームタウンとして、また内陸工業地帯として発展しています。こうした発展に伴う開発によって実施された発掘調査の成果をいちはやく公開することを目的に、この発掘調査年報を発行しています。

最後になりましたが、本市教育委員会の文化財行政に御指導・御協力いただいた関係諸機関及び関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成30年3月

総社市教育委員会

教育長 山中 榮 輔

例 言

1. 本書は、総社市教育委員会が、2016（平成28）年度に実施した埋蔵文化財発掘調査及び立会・試掘・確認調査等について、その概要をまとめたものである。
2. 本書の執筆は、各調査の担当者である前角和夫・高橋進一・村田 晋（総社市教育委員会文化課）及び平井典子（総社市埋蔵文化財学習の館）が分担して行い、文末に執筆者を記した。編集は高橋が行い、文化課で校閲・校正した。
3. 遺物整理にあたっては、田中富子、犬飼眞弓、和田かほり、岡野佑香（総社市埋蔵文化財学習の館）の協力を得た。
4. 本書に関する出土遺物、写真、図面等は、総社市埋蔵文化財学習の館（総社市南溝手265-3）で保管している。

凡 例

1. 本書の高度値は海拔高と任意高で、方位は国土座標系の座標北と磁北で示した。
2. 本書掲載の挿図のうち、位置図等の地形図には、総社市発行の都市計画図25,000分の1及び2,500分の1を基に作成したもの、『おかやま全県統合型GIS』より転載したものがあり、後者についてのみ出典を標記した。
3. 本書で用いた遺構・遺物の実測図等の縮尺率については、各図面に示した。



総社市位置図

目 次

序 文 例 言 凡 例 目 次

1.	総社市埋蔵文化財行政の概要	
	平成28年度埋蔵文化財行政の概要	1
2.	立会・試掘・確認調査の概要	
1	三輪遺跡群内の確認・確認・発掘調査	7
2	個人住宅の建築にともなう金井戸天原遺跡の立会調査	12
3	ソーラーパネル用地造成に伴う試掘調査	15
4	コンビニエンスストア建設に伴う試掘調査	16
5	上林地内の個人住宅建設に伴う立会調査	18
6	分譲住宅宅地造成に伴う確認調査	20
7	福山城跡での記念植樹にともなう発掘調査	22
8	社務所増築に伴う総社跡の確認調査2	24
9	保育園新築にともなう延遺跡地内の確認・立会調査	26
10	マンション建設に伴う確認調査	31
11	国府川改修にともなう確認調査	32
12	藤原北古墳群試掘調査	38
13	個人住宅建設に伴う宿寺山古墳の確認調査	39
14	大文字遺跡地内の個人住宅造成にともなう立会調査	42
15	事務所併用住宅建設に伴う荒神ヶ市遺跡の確認調査	44
3.	発掘調査の概要	
16	集合住宅建設に伴う発掘調査	45
17	土砂採取事業に伴う狩谷遺跡群の発掘調査2	47
18	総社小学校新校舎建設に伴う発掘調査	52
4.	史跡整備事業の概要	
19	2016（平成28）年度鬼城山環境整備事業	53
5.	付載	
20	秦茶臼山古墳採集の埴輪について	57

図 目 次

第1図 調査地位置図 (S=1/100,000) …………… 2	第32図 トレンチ2 平・断面図 …………… 27
第2図 調査地周辺の遺跡分布図 (S=1/10,000) …… 7	第33図 トレンチ3 平・断面図 …………… 28
第3図 ② 調査区配置図 (S=1/1,000) …………… 8	第34図 トレンチ4 平・断面図 …………… 28
第4図 ② 左:T-1 右:T-2 平・断面図 …………… 8	第35図 トレンチ5 平・断面図 …………… 28
第5図 ② 6月3日の立会 平面模式図…………… 9	第36図 立会調査時の土層模式図 (建物北部) …… 29
第6図 ② 6月3日の立会 土層模式図…………… 9	第37図 立会調査時の土層模式図 (建物南部) …… 30
第7図 ② 7月25日の立会 平面模式図と土層模式図…………… 10	第38図 調査地位置図 (S=1/5,000) …………… 31
第8図 ⑦ 土層模式図…………… 11	第39図 調査地周辺の遺跡分布図 (S=1/10,000) …… 32
第9図 ⑦ トレンチ配置図 (S=1/500) …………… 11	第40図 トレンチ配置図 (S=1/1,000) …………… 33
第10図 調査地周辺の遺跡分布図 (S=1/10,000) …… 12	第41図 トレンチ1 平・断面図 …………… 33
第11図 調査地位置図 (S=1/2,500) …………… 12	第42図 トレンチ2 平・断面図 …………… 34
第12図 調査地点位置図 (S=1/500) …………… 13	第43図 トレンチ3 平・断面図 …………… 34
第13図 断面1の断面図 …………… 13	第44図 トレンチ4 平・断面図 …………… 35
第14図 断面2の断面図 …………… 14	第45図 トレンチ5 平・断面図 …………… 36
第15図 計画地位置図 (S=1/2,500) …………… 16	第46図 調査地位置図 (S=1/5,000) …………… 38
第16図 トレンチ位置図 (S=1/1,000) …………… 16	第47図 調査地位置図 (S=1/200) …………… 40
第17図 トレンチ実測図 (S=1/40) …………… 17	第48図 周溝推定図 (S=1/600) …………… 41
第18図 調査地周辺の遺跡分布図 (S=1/10,000) …… 18	第49図 トレンチ実測図 (S=1/40) …………… 41
第19図 土層模式図 …………… 18	第50図 調査地位置図 (S=1/5,000) …………… 42
第20図 土層模式図 …………… 19	第51図 土層模式図 …………… 42
第21図 トレンチ配地図 (S=1/1,000) …………… 20	第52図 調査地位置図 (S=1/400) …………… 42
第22図 調査地位置図 (S=1/2,500) …………… 21	第53図 調査地位置図 (S=1/5,000) …………… 45
第23図 トレンチ実測図 (S=1/40) …………… 21	第54図 遺構配置図 (S=1/300) …………… 46
第24図 福山城跡と植樹地点 (S=1/2,000) …… 22	第55図 調査地位置図 (S=1/10,000) …………… 47
第25図 トレンチ配置図 …………… 23	第56図 5・6号墳 地形測量図 (S=1/1,000) …… 49
第26図 各トレンチ 平・断面図 …………… 23	第57図 調査地位置図 (S=1/5,000) …………… 52
第27図 前回のトレンチ平・断面図 …………… 24	第58図 地域野外博物館構想図 …………… 55
第28図 トレンチ 平・断面図 …………… 24	第59図 第3期環境整備事業図 …………… 55
第29図 調査地周辺の遺跡分布図 (S=1/10,000) …… 26	第60図 秦茶臼山古墳位置図と周辺の首長墳 (S=1/25,000) …………… 57
第30図 トレンチ配置図 …………… 26	第61図 秦茶臼山古墳 表面採集埴輪 (S=1/4) …… 58
第31図 トレンチ1 平・断面図 …………… 27	

図 版 目 次

第1図版 ② 左:T-1 右:T-2 (南から)…………… 8	第8図版 調査地近景…………… 17
第2図版 ② 調査状況 (東から) …………… 9	第9図版 T-1 近景…………… 17
第3図版 ② 左:東端の土層断面 (南から) 右:礫層面の遺構 (南から) …………… 9	第10図版 T-1 北壁 …………… 17
第4図版 ② 7月25日の立会 左上:西端ライン (北から) 左下:溝 (東から) 右上:A断面 右下:B断面…………… 10	第11図版 T-2 近景 …………… 17
第5図版 ⑦ 土層断面 (南から) …………… 11	第12図版 断面2 (東から) …………… 18
第6図版 東西大溝の出土遺物…………… 14	第13図版 断面3 (南から) …………… 18
第7図版 調査地遠景…………… 15	第14図版 溝 (北から) …………… 19
	第15図版 断面 (西から) …………… 19
	第16図版 調査地近景 (北西から) …………… 23
	第17図版 トレンチ1 (南から) …………… 23
	第18図版 トレンチ2 (東から) …………… 23

第19図版	出土遺物	23	右：土層断面2（南から）	43	
第20図版	増築箇所	24	第45図版	調査前（北から）	46
第21図版	トレンチと出土遺物	25	第46図版	遺構完掘状況（北から）	46
第22図版	トレンチ1（南から）	27	第47図版	住居址完掘状況（南から）	46
第23図版	トレンチ2（南から）	27	第48図版	焼土壙（製炭窯）完掘（西から）	46
第24図版	トレンチ3（南から）	28	第49図版	調査地近景（南から）	47
第25図版	トレンチ4（西から）	28	第50図版	4号墳調査前（東から）	48
第26図版	トレンチ5（南から）	28	第51図版	4号墳の石室（南から）	48
第27図版	トレンチ5出土遺物	29	第52図版	5号墳調査前	
第28図版	南東隅土坑出土遺物	30		左：（南から）	
第29図版	北東隅の東壁（西から）	30		右：（東から）	48
第30図版	南東隅の西壁の土坑（東から）	30	第53図版	5号墳調査後（南から）	48
第31図版	調査地全景（西から）	31	第54図版	5号墳主体部（西から）	
第32図版	土層堆積状況（西から）	31		左：蓋石状況	
第33図版	トレンチ1（南東から）	33		中：石棺内の状況	
第34図版	出土遺物（左：8層，右：2層）	34		右：蓋石除去後	49
第35図版	トレンチ2（南東から）	34	第55図版	出土鏡	49
第36図版	トレンチ3（南東から）	35	第56図版	6号墳 掘り上がり（東から）	49
第37図版	出土遺物（12・13層）	35	第57図版	6号墳 人骨（南から）	50
第38図版	トレンチ4（南東より）	36	第58図版	狩谷遺跡 土壙墓群	
第39図版	出土遺物	36		左：（西から）	
第40図版	トレンチ5（左：北より，右：東より）	36		右：土層断面（南から）	50
第41図版	1 宿寺山古墳と調査地 全景	40	第59図版	狩谷遺跡 表採遺物	51
第42図版	2 トレンチ掘削状況	40	第60図版	火葬墓検出状況	52
第43図版	左：調査状況（南から）		第61図版	鉄刀出土状況	52
	右：土層断面1（南から）	43	第62図版	遺構完掘状況	52
第44図版	左：調査状況（東から）				

表 目 次

第1表	講座等実施一覧（平成28年度）	3
第2表	発掘・確認・試掘・立会調査一覧	5
第3表	平成28年度埋蔵文化財発掘の届出・通知一覧	6

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

2016（平成28）年度埋蔵文化財行政の概要

本市における文化財行政は、教育委員会文化課文化財係が担当しており、埋蔵文化財をはじめとした文化財全般の調査・記録・保護・啓発を主たる業務としている。現地調査は専門職員3人で対応しており、出先機関として埋蔵文化財学習の館・鬼城山ビジターセンターがあり、普及啓発活動に努めている。

[組織]

教育長	山中 榮輔	[埋蔵文化財学習の館]
教育次長	服部 浩二	館長 平井 典子
課長	河原 隆	臨時職員 田中 富子
主幹	平田 壮太郎	臨時職員 犬飼 眞弓
主査	前角 和夫	[鬼城山ビジターセンター]
主査	高橋 進一	指導員 荒木 泰行
主任	笹田 健一	指導員 横田 彰
主任	村間 紀子	
主事	村田 晋	

[埋蔵文化財の調査]

2016（平成28）年度に実施した発掘調査は4件であり、公共事業に伴うものが1件、民間開発によるものが2件、史跡整備に伴うものが1件であった。

公共事業関連は小学校校舎建設に伴うものであり、民間事業関連では、採土事業と集合住宅建設が契機となっている。史跡整備に伴うものは一丁坊15号墳の確認調査であり、これは昨年度から調査が継続されており、昨年度の年報に概要を報告している。

[文化財保護・普及啓発]

2016（平成28）年度では、平成27年度の埋蔵文化財行政についてまとめた『総社市埋蔵文化財調査年報』26が刊行されている。

史跡の下草刈り清掃については例年どおり、作山古墳、鬼城山、宮山古墳群、江崎古墳、秦原廃寺等で実施し、保護・活用に努めた。

2001（平成13）年度から続く鬼ノ城の整備は、「史跡鬼城山（鬼ノ城）環境整備第2次基本計画書（案）」を作製し、平成28年12月26日と平成29年3月23日に開催された第42回鬼城山整備委員会と第43回鬼城山整備委員会で検討を加えた。あわせて、鬼城山ビジターセンターガイダンス施設の展示内容の変更等と、城壁の保護・補修についての説明をした。

岡山県立大学の依頼で実施している博物館実習は、今年度も20余名の県立大学生を対象として鬼ノ城や埋蔵文化財学習の館の見学・古代吉備の歴史と文化についての講義・ガラス玉作りのワークショップを実施した。

資料の調査依頼・掲載許可・写真撮影許可は合計17件あり、大半が写真掲載の許可であった。

資料等の展示に伴う貸し出しは2件あり、下記のとおりであった。

・岡山シティミュージアム 2016（平成28）年9月16日～10月16日

平成28年度企画展『超巨大古墳の時代—吉備の至宝・千足古墳，榊山古墳出土品の里帰り展—』

宮山遺跡出土 特殊器台（レプリカ）・作山古墳出土円筒埴輪・隋庵古墳甲冑と首飾り（勾

玉・ガラス玉）・窪木遺跡出土鉄鋌・砂子遺跡出土子持勾玉・大文字遺跡出土子持勾玉

・岡山県古代吉備文化財センター 2016（平成28）年8月19日～2017（平成29）年1月9日

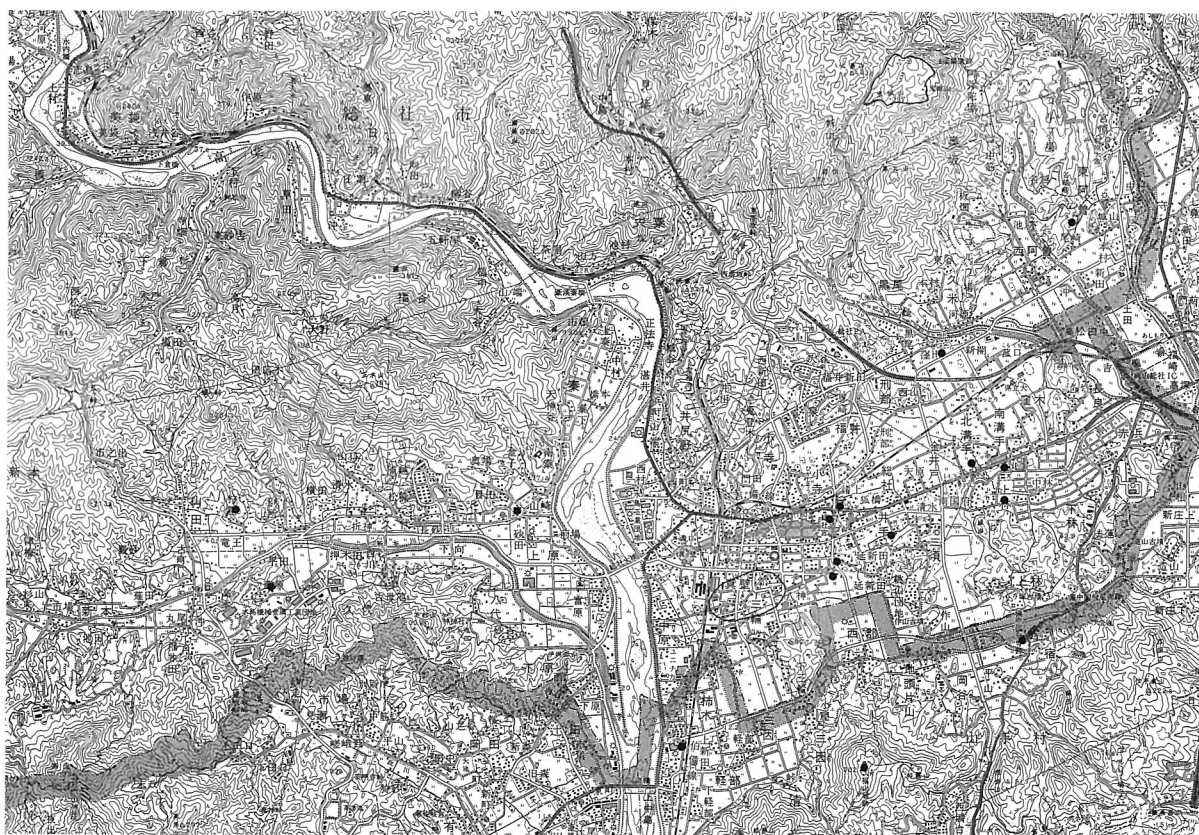
平成28年度企画展2「吉備路の巨石墳 —こうもり塚古墳」

こうもり塚古墳出土遺物16点・江崎古墳出土遺物36点

また、資料の見学依頼が6件あった。

以上、2016（平成28）年度の文化財行政の概要を記した。

（高橋 進一）



第1図 調査地位置図 (S=1/100,000)

第1表 講座等実施一覧（平成28年度）

番号	年月日	依頼元	担当	内容	対象者
1	4月5日	東公民館自主講座の会	平井	館展示室説明	市内
2	4月9日	山陽カルチャーマウンテンクラブ	平井	古代吉備と鬼ノ城	市内 市外
3	4月15日	備前ボランティアガイド	平井	館展示説明	市外
4	4月17日	荒木山古墳を検証する会	平井	北房町の古墳について	市外
5	4月28日	福寿学級	前角	鬼ノ城について	市内
6	5月2日	秦小遠足	高橋 村田 平井	一丁塚古墳 外	市内
7	5月12日	備中倉敷学	平井	講演「ここまでわかった！秦の古墳群」	市外
8	5月13日	総社市	平井	総社市職員新任研修「鬼ノ城」	市内
9	5月12日	清音公民館	前角	ふるさと歴史講座1	市内
10	5月20日	商工観光課	平井	ボンネットバス案内	市外
11	5月21日	吉備学会歴史研究部会	平井	吉備の国の成立と繁栄	市内
12	5月22日	秦歴史遺産保存協議会	高橋 村田	一丁塚古墳群について	市内
13	5月24日	新町ホットな会	平井	埋蔵文化財学習の館展示説明	市内
14	5月26日	備中倉敷学	村田 平井	一丁塚案内・講座 埋文の館見学	市外
15	5月27日	山手公民館 女性学級	平井	埋蔵文化財学習の館展示説明	市内
16	5月29日	総社市教委主催	高橋 村田 河原 平田 前角 笹田	一丁塚15号墳現地説明会	市内 市外
17	6月4日	まちづくり出前講座	村田	赤米について	市内
18	6月11日	就実大学総合学科	平井	鬼ノ城案内・説明	市外
19	6月30日	県博を誘致する会	村田	赤米について	市内
20	7月5日	造山古墳蘇生会	平井	埋蔵文化財学習の館展示説明	市外
21	7月5日	吉備国際大学（博物館実習）	平井	埋蔵文化財学習の館展示説明	市外
22	7月8日	山手小学校	前角	古墳めぐり	市内
23	7月9日	考古学研究会	村田	茶臼嶽古墳の調査成果	市内
24	7月17日	学術団体 日本振興会	平井	講演「吉備の国の成立と繁栄」	市外
25	7月17日	出前講座	前角	昭和地区の歴史について	市内
26	7月26日	夏休み自由研究（中2）	平井	埋蔵文化財学習の館展示説明 吉備の国の歴史について	市外
27	7月29日	東小学校生徒	平井	埋蔵文化財学習の館展示説明	市内
28	8月1日	夏休み自由研究（小6）	平井	館見学と古代史について	市外
29	8月2日	夏休み自由研究（小6）	平井	館見学と吉備の古墳について	市外
30	8月5日	教職員新任研修	平井	史跡・施設回り	市内
31	8月6日	まちづくり出前講座	高橋	10：00～12：00 サンワーク「総社市郷土史研究会」 「一丁塚15号墳発掘調査報告」	市内
32	8月10日	総社小学校	高橋 村田	総社小学校現場見学会	市内
33	8月26日	総社観光大学	平井	古代キビについて	市内 市外

番号	年月日	依頼元	担当	内容	対象者
34	8月26日	総社観光大学	谷山	国分寺について	市内 市外
35	8月26日	総社観光大学	高橋	ガラス玉講座	市内 市外
36	8月27日	総社観光大学	平井 高橋	古代食体験	市内 市外
37	9月5日	三須桃山団地（出前講座）	村田	赤米について	市内
38	9月8日	常陽芸文センター	高橋	鬼ノ城案内	市外
39	9月10日	まちかど郷土館	前角	歴史体験	市内
40	9月27日	農業委員会	平井	埋蔵文化財学習の館展示説明	市外
41	9月30日	常盤集会所	平井	三輪丘陵の墳丘墓と古墳	市内
42	10月8日	妹尾公民館	平井	埋蔵文化財学習の館展示説明	市外
43	10月14日	真庭市公民館	平井	秦の古墳群、楯築遺跡、造山古墳	市外
44	10月18日	吉備路伝説を語る会	平井	秦の古墳群について	市内
45	10月23日	昭和公民館講座	平井	三輪丘陵・吉備中山の首長墳案内	市内
46	10月25日	三須さくら団地（出前講座）	前角	中世以降の古跡について	市内
47	10月30日	秦歴史遺産保存協議会	平井	秦スタンプラリー （一丁ぐる古墳群と茶臼嶽古墳の説明）	市内 市外
48	11月1日	東公民館	平井	宮山墳墓群案内	市内
49	11月11日	総社市図書館 野外講座	平井	楯築遺跡・造山古墳とその周辺	市内
50	11月16日	まきび支援学校	平井	埋蔵文化財学習の館展示説明	市外
51	11月16日	西公民館	平井	故郷を知る会 座談会	市内
52	11月19日	商工観光課	平井	ボンネットバス内総社の歴史案内	市外
53	11月19日	池田小学校	高橋	ガラス玉講座	市内
54	11月24日	東公民館	平井	鬼ノ城案内	市内
55	11月25日	全国社会福祉事業団協議会 中国・四国ブロック会議	平井	鬼ノ城案内・説明	市外
56	12月3日	石川県小松市	高橋 平井	ガラス玉講座	市外
57	12月4日	石川県小松市	高橋 平井	ガラス玉講座	市外
58	1月7日	まちかど出前講座	村田	文化財と考古学	市内
59	1月12日	成羽郷土の歴史を語る会	平井	国分寺案内	市外
60	1月18日	東公民館	平井	秦の古墳群案内	市内
61	1月30日	服部幼稚園（年長組）	平井	学習の館展示説明	市内
62	2月2日	山陽学園大学	平井	鬼ノ城外史跡案内 埋蔵文化財学習の館での実習	市外
63	2月4日	まちかど出前講座	高橋	吉備の終末期古墳講座	市内
64	2月7日	阿曾小学校	前角	午前中：山手郷土館見学（阿曾小）	市内
65	2月17日	全史協兵庫県支部	平井	作山古墳、こうもり塚	市外
66	3月3日	県史協	前角 村田	一丁塚古墳群周辺の案内	市外
67	3月4日	まちかど出前講座	高橋	吉備の終末期古墳案内	市内
68	3月6日	三須老人クラブふたば会	平井	三輪山遺跡案内	市内
69	3月7日	東公民館	平井	緑山古墳群案内	市内

第2表 発掘・確認・試掘・立会調査一覧

調査契機	地番	調査種類	調査日	内容	担当	文書番号	遺跡名
史跡整備	秦2191-1 他	確認調査	1月19日～6月28日	一丁坑古墳群確認調査 年報26に概要報告	高橋		一丁坑15号墳
個人住宅	三輪・真壁・中央	立会・確認・発掘	4月5日～2月28日	記録保存	前角		三輪遺跡群
個人住宅		立会調査	4月11日	大溝検出・土器片出土	前角		御所遺跡
ソーラーパネル 用地造成	東阿曾字織り立844, 東阿曾字呉服庵 846・847-1・847-2・849	株式会社アート コーポレーション 代表取締役 金丸政計 ミル設計事務所 086-255-0330	4月14日	着工に合わせ、現地の重機を借りて 試掘調査実施。 試掘調査報告提出予定。	村田	第19号	包蔵地確認されず
土砂採取事業	久代2219ほか	発掘調査	4月18日～1月20日	古墳3基・土墳墓群	前角		狩谷古墳群・狩谷遺跡
店舗建設	黒尾字木塚240-1他	試掘調査	5月12日	遺構確認されず	村田	第39号	包蔵地確認されず
個人住宅	上林字佳美林57-6・-7・-8	立会調査	5月24日・8月4日	溝・水田畦畔確認	前角		
分譲宅地	清音上中島161番2 他	確認調査	7月1日	遺構・遺物確認されず	村田	第74号	名称未定
記念植樹		発掘調査	7月19日	中世土師器出土	前角	第76号	福山城跡
社務所建設	総社二-18-1	確認調査	7月19～20日	遺構確認されず	前角	第102号	総社跡
保育園建設	井手438番 ほか	確認調査	7月21～22日	遺構確認されず	前角	第173号	延遺跡
小学校 校舎建設	総社三丁目13-1	発掘調査	7月21日～8月24日	発掘調査実施	高橋	第95号	諸上遺跡
老人福祉施設	三輪1334番3～5	確認調査	9月12日	既掘削地	高橋		宮山墳墓群
個人住宅	窪木911	立会調査	9月20日	柱状改良	高橋	第153号	窪木遺跡
個人住宅	井手500-1	立会調査	9月21日	基礎掘削立会	高橋	第129号	延遺跡
集合住宅	真壁127-4, 178-6, 127-6	確認調査	9月23日	発掘調査実施	高橋	第174号	真壁遺跡
個人住宅	三輪11街区6-2ロット	立会調査	10月7日	柱状改良	高橋	第128号	窪木遺跡
個人住宅	西郡1484	立会調査	10月12日	擁壁掘削	高橋	第41号	西郡新池東遺跡
河川改修	金井戸地内	確認調査	10月25・26日	水田層・畦畔・柱穴間出 土器片出土	前角	第152号	総社・金井戸遺跡
個人住宅	中央四丁目16番109	確認調査	10月26日	落ち込み確認	高橋	第223号	真壁遺跡
個人住宅	井手356-10	立会調査	11月24日	砂礫層で遺構・遺物なし	高橋	第147号	延遺跡
土取り	久代藤原北	確認調査	1月25～26日	古墳群確認できず 遺構・遺物なし	高橋		藤原北古墳群
個人住宅	宿594-1	確認調査	1月30日	周濠埋土の可能性あり	村田	第257号	宿寺山古墳
集合住宅	中央五丁目11-103	確認調査	2月3日	微高地上 要発掘	高橋	第266号	真壁遺跡
電柱建設	三須800	立会調査	2月4日	削平済み 花崗岩パイラン土	高橋	第235号	天満遺跡
個人住宅	南溝手字高木446番10, 446番11	立会調査	2月13・15日	弥生土器片出土	高橋	第240号	大文字遺跡
事務所併用住宅	駅前二丁目16-104	確認調査	2月28日	土器細片	村田	第285号	荒神ヶ市遺跡
集合住宅	中央五丁目11-103	発掘調査	3月1日～3月10日	発掘調査実施(第266号)	高橋	第297号	真壁遺跡

第3表 平成28年度埋蔵文化財発掘の届出・通知一覧

提出日	主要用途	地番	調査日	対応	担当	文書番号	遺跡名
4月1日	アパート建設	真壁540-7		立会	村田	第1号	三輪遺跡群
4月5日	個人住宅	福井字安部前56番10号		立会	前角	第3号	神明遺跡
4月7日	個人住宅	福井字里坊185-10	5月23日	立会	村田	第7号	神明遺跡
4月13日	宅地造成	金井戸字南国府東367番3	6月29日	立会	前角	第15号	金井戸天原遺跡
4月19日	個人住宅	駅前二丁目12-102.12-103.12-127		慎重工事	前角	第25号	園ノ木遺跡
5月2日	個人住宅	三輪1058番1, 1058番7		立会	村田	第31号	三輪遺跡群
5月13日	個人住宅	三輪1056番3, 1058番10		立会	前角	第36号	三輪遺跡群
5月30日	個人住宅	三輪1054番10		立会	前角	第47号	三輪遺跡群
6月7日	その他建物	三輪字川田1019-3		立会	前角	第52号	三輪遺跡群
6月8日	宅地造成	清音上中島向原161番1, 161番2, 161番3		立会	村田	第53号	名称未定
6月10日	個人住宅	岡谷字西角力取山220番5		立会	村田	第55号	角力取山遺跡
6月14日	個人住宅	三輪字牛神下830番3		立会	前角	第58号	三輪遺跡群
6月23日	個人住宅	三輪字牛神上762番9		立会	村田	第62号	三輪遺跡群
6月24日	個人住宅	三輪1666番3		立会	村田	第64号	三輪遺跡群
6月11日	個人住宅	駅前二丁目13-103		慎重工事	村田	第70号	園ノ木遺跡
6月13日	個人住宅(事務所付)	中央四丁目10番102		立会	前角	第57号	中村遺跡
6月30日	記念植樹	西郡1761		発掘	前角	第76号	福山城跡
7月5日	社寺建物の増築	総社二丁目18-1		立会	前角	第79号	総社跡
6月22日	個人住宅	総社字宮ノ後859番15		立会	村田	第84号	宮後遺跡
6月26日	個人住宅	三輪字牛神上762番6		立会	村田	第85号	三輪遺跡群
7月25日	個人住宅	下林字中林272-1		立会	前角	第93号	中林遺跡
7月25日	倉庫	井尻野700番10		立会	前角	第91号	井尻野西川遺跡
8月3日	個人住宅	福井字里坊185番12		立会	前角	第106号	神明遺跡
7月15日	個人住宅	総社字宮ノ後859番13		慎重工事	前角	第107号	宮後遺跡
8月9日	個人住宅	三輪1099-11		立会	村田	第110号	三輪遺跡群
8月4日	個人住宅	西阿曾字西屋敷1170番1, 1170番6, 1170番10		立会	前角	第116号	西金屋跡
8月17日	個人住宅	金井戸字南国府東386番5		立会	村田	第117号	金井戸天原遺跡
8月22日	電柱建設	窪木469-1番地先		立会	村田	第120号	西溝手遺跡
8月22日	電柱建設	真壁362-1～365-1番地先		立会	村田	第121号	真壁遺跡
8月26日	個人住宅	福井字里坊173番1		立会	村田	第127号	神明遺跡
8月26日	個人住宅	三輪 第11街区保留地番号第6-2号		立会	村田	第128号	三輪遺跡群
8月26日	個人住宅	井手字延西500番1		立会	村田	第129号	延遺跡
9月2日	保育園	井手延ノ東438番 他6筆		立会	前角	第130号	延遺跡
9月1日	個人住宅	井手字延後468番1		立会	村田	第134号	延遺跡
9月1日	個人住宅	井尻野字一ノ口282番1		立会	前角	第145号	井尻野西村遺跡
9月5日	宅地造成	井手字延西356番10		立会	高橋	第147号	延遺跡
9月12日	河川改修	金井戸地内		立会・発掘	前角	第152号	総社遺跡・金井戸遺跡
9月12日	店舗併用住宅	窪木時大文字911番1・911番4		立会	村田	第153号	窪木遺跡・窪木宮後遺跡
9月13日	宅地造成	井手字延西500番2・500番4		立会	村田	第156号	延遺跡
9月12日	個人住宅	井手字延後468番16		立会	前角	第151号	延遺跡
9月26日	個人住宅	小寺1968番1		立会	前角	第169号	小寺遺跡
9月20日	集合住宅	真壁127-4, 178-6, 127-6		確認調査実施	高橋	第163号	真壁遺跡
9月21日	個人住宅	宿字前池尻1027番5, 1028番3		立会	前角	第166号	名称未定
9月26日	個人住宅	福井字里坊185番11		立会	前角	第170号	神明遺跡
9月26日	自己兼用住宅	中央六丁目21番105		立会	前角	第171号	三輪遺跡群
10月3日	個人住宅	井尻野205番3, 208番5		立会	高橋	第176号	井尻野西村遺跡
10月3日	個人住宅	井尻野205番3		立会	村田	第177号	井尻野西村遺跡
10月25日	個人住宅	中央四丁目16番109		試掘調査実施	高橋	第189号	真壁遺跡
10月25日	個人住宅	金井戸字御所309番地3		立会	村田	第190号	伝備中国府
10月31日	宅地造成	井手字烏帽子形889番4, 889番6		立会	村田	第194号	井手延延遺跡・井手村後遺跡
11月1日	個人住宅	井手字延西500番1		立会	前角	第196号	延遺跡
11月24日	宅地造成	宿字前池尻1022番地1		立会	村田	第210号	名称未定
11月25日	宅地造成	清音軽部字八幡後852番1		立会	村田	第212号	軽部遺跡
11月28日	個人住宅	地頭片山字兼近190番2		立会	高橋	第214号	明治池周辺遺跡
11月28日	宅地造成	三須字天満813番6, 814番5, 815番7, 816番2		慎重工事	前角	第215号	天満遺跡
11月28日	宅地造成	三須字天満813番4, 814番3, 815番5		慎重工事	前角	第216号	天満遺跡
12月1日	個人住宅	福井字里坊185番7		立会	村田	第217号	神明遺跡
12月5日	個人住宅	門田1231番1		立会	高橋	第222号	小寺遺跡
12月13日	個人住宅	井手字延西356番10		立会	村田	第224号	延遺跡
12月19日	個人住宅	井尻野字一ノ口1312-1の一部, 308-1		立会	高橋	第229号	井尻野西村遺跡
12月19日	校舎建設	三輪926番地		立会	村田	第230号	三輪遺跡群
12月22日	個人住宅	井手字延後468番7, 468番9		慎重工事	村田	第231号	延遺跡
12月28日	電柱建設	三須820-1, 822-1, 822-4, 823-9番他		立会	高橋	第235号	天満遺跡
1月5日	宅地造成	南溝手字高木446番10, 446番11		立会	高橋	第240号	大文字遺跡
1月10日	個人住宅	三輪1054番11, 1056番5		立会	村田	第241号	三輪遺跡群
1月13日	宅地造成	清音軽部字東町224番3		立会	村田	第246号	軽部遺跡
1月17日	個人住宅	総社字高畑1219番7		立会	前角	第248号	宮後遺跡
2月4日	個人住宅	福井字里坊173番1		立会	前角	第263号	神明遺跡
2月6日	個人住宅	宿字前池尻1022番1		立会	村田	第264号	名称未定
2月6日	集合住宅	中央五丁目11番103		発掘調査	高橋	第266号	真壁遺跡
2月13日	分譲住宅	真壁字石原前540-1		立会	前角	第269号	三輪遺跡群
2月14日	店舗	井手967-3, 967-1, 966-1の一部, 965-3の一部		立会	前角	第270号	井手村後遺跡
2月20日	集合住宅	駅前二丁目16番104		立会	村田	第277号	荒神ヶ市遺跡
2月20日	戸建貸家	三輪 総社駅南区画整理地内14街区8ロット		立会	高橋	第278号	三輪遺跡群
2月20日	戸建貸家	三輪 総社駅南区画整理地内14街区8ロット		立会	高橋	第279号	三輪遺跡群
3月3日	個人住宅	三輪字石原西1099番12		立会	前角	第290号	三輪遺跡群
3月6日	宅地造成	地頭片山字兼近190番1		立会	高橋	第292号	明治池周辺遺跡
3月6日	宅地造成	井手字延西343番7		立会	村田	第293号	延遺跡
3月7日	個人住宅	福井字安部前59番2, 60番1, 59番1地先道		立会	前角	第294号	神明遺跡
3月13日	個人住宅	宿字順出594-1		立会	村田	第298号	宿寺山古墳
3月14日	宅地造成	上原字福田215番3		立会	高橋	第300号	上原遺跡
3月15日	個人住宅	上林字片辺1423番1, 1424番2		立会	高橋	第302号	名称未定
3月17日	電柱設備	三須1059-1番地先		慎重工事	前角	第316号	三須遺跡群
3月17日	電柱設備	三須826-1番地先		慎重工事	前角	第317号	美濃田遺跡
3月31日	個人住宅	地頭片山字宮ノ西84番2		立会	前角	第318号	明治池周辺遺跡

2. 立会・試掘・確認調査の概要

三輪遺跡群内の立会・確認・発掘調査

調査地 総社市三輪・真壁・中央

調査日 ①平成28(2016)年4月5日(三輪666-1) ②4月11～15日, 6月3日, 7月25日(真壁644ほか), ③6月10日(三輪1056-3), ④6月20日(三輪1054-10), ⑤7月2日(三輪1019-3), ⑥10月7日(中央6-21-105), ⑦平成29(2017)年2月28日(真壁540-1)

調査面積 ①17.2㎡(発掘調査), ⑦約2㎡

調査概要

三輪遺跡群は、市街地の南西部に位置している。東西約1km, 南北約0.6kmの約54万㎡が遺跡分布範囲である。

昭和38年にはじまった総社駅前地区区画整理事業(～55年), 中央地区区画整理事業(50年～平成6年)に引き続いて実施された駅南地区区画整理事業(平成3年～施行中)にともなって発見された遺跡群である。遺跡群を構成する遺跡は三軒屋・東楨前遺跡, 西三軒屋遺跡, 鷹尾手遺跡, 黒相遺跡, 中通遺跡, 屋毛手遺跡, 上三本松遺跡, 惣善寺遺跡であるが, 小字を用いたことから各遺跡の内容と性格による区別ができないため, 再編成すべきものと考えている。



第2図 調査地周辺の遺跡分布図(S=1/10,000)
(『おかやま全県統合型GIS』より転載)

平成2年に確認調査を実施し, 平成6年より発掘調査が開始され, 現在も継続調査中である。長期にわたり, 調査面積も広大であることから遺跡群の全体像が明らかとなってきた。遺跡群は, 現時点で東側に想定範囲外を残しているが, A区～D区とした微高地を想定し, 縄文時代～室町時代の集落遺跡であるとともに, 環濠や鍛冶集落, 官衙関連遺跡も見つかっている(註1)。

区画の基本である道路整備は, 主要な道路部分において完了している。

そのため, 最近では区画整理事業よりも, 区画内における個別開発への対応が主となってきている。

① 昨年度提出された93条, 個人住宅新築の立会調査である。

柱状改良の立会調査で, 上がってくる土はなかった。

② 昨年度末に実施した商業店舗の確認調査(註2)に引き続いた発掘調査と, 擁壁および地中梁にともなう立会調査である。

発掘調査は, 建物基礎部分のみを対象とし, 確認調査結果より微高地に該当するか所を中心に実施した。21か所のうちの15か所である。

基礎は一辺1.2m角, 1.0m角, 0.8m角があり, T-1～5が1.2m角, T-6～15が1.0m角である。

遺構は, T-1～3・5・7・14で溝・畦畔・柱穴・水田層を, T-8・9・15で水田層・畦畔を検出した。

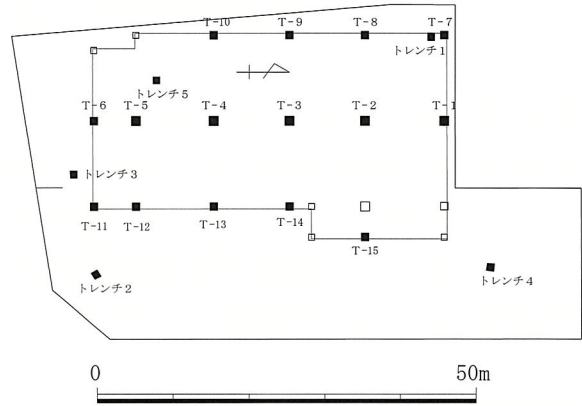
T-1では, 2aの畦畔と4の水田層がセットで検出され, その後に溝が2条掘られた。いずれも北

東から南西方向で一致している。また畦畔の北側では水田層が残らず2bとなることから一段高い地形になる。

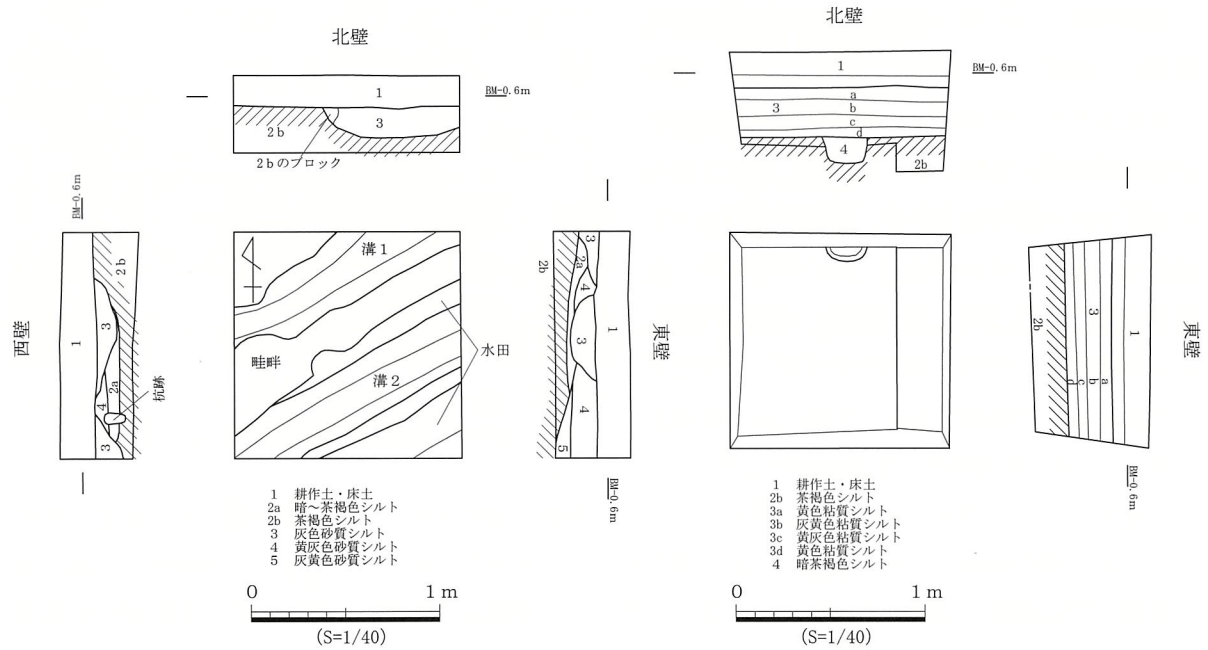
T-7では、確認調査のトレンチ1で確認した遺構を再確認し、竪穴住居の覆土と判断した。

T-2・8・15の水田層は耕土と床土が重層的になっており、継続的な水田層を形成している。

T-9・10では円礫層となっており、敷地の南西端から西側が低位部となり、東側が后背湿地となる。



第3図 ② 調査区配置図 (S=1/1,000)



第4図 ② 左：T-1 右：T-2 平・断面図



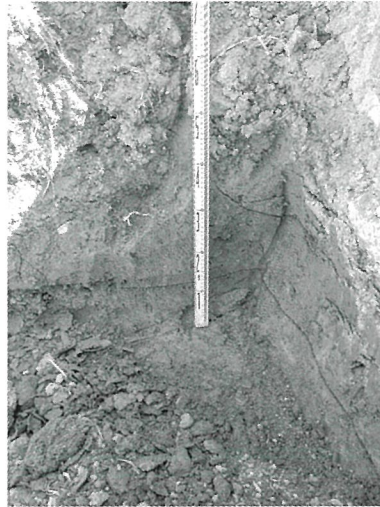
第1図版 ② 左：T-1 右：T-2 (南から)

遺物は、T- 1～5・8～14で須恵器・土師器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・鉄滓が出土しているが、いずれも小片である。円礫の直上から古墳時代後期の須恵器杯蓋が出土し、水田層などにも奈良時代の高台付杯が混入している。周辺において古墳時代以降の集落や鍛冶工房が営まれていたものと思われる。

6月3日には、敷地北東部の擁壁工事にともなって立会調査を実施した。

擁壁の掘削は1m幅で20m長、深さは東側の道路面より約1mである。

掘削底面では、東の0m点から西へ5mまでが4層の茶褐色シルトで、それ



第3図版 ② 左：東端の土層断面（南から）

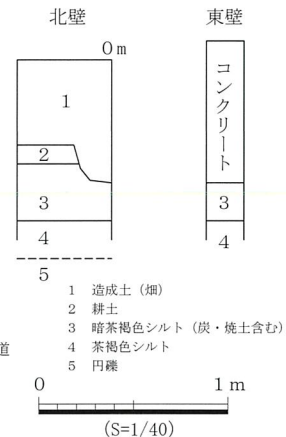


第2図版 ② 調査状況（東から）

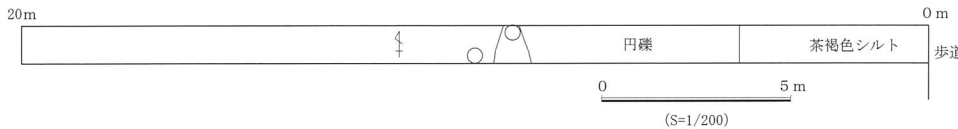


右：礫層面の遺構（南から）

西は5層の円礫であった。東端では茶褐色シルトの上に堆積する焼土や炭を含む3層の暗茶褐色シルトが確認され、住居跡の埋土と考えている。板状の鉄製品と土師器が出土した。また、11～12m地点の円礫面で直径40cmほどが赤く焼けている範囲とそれを囲むように暗茶褐色シルトの分布、さらに西側で直径40cmの柱穴を検出した。住居跡のかまど跡と判断した。



第6図 ② 6月3日の立会土層模式図



第5図 ② 6月3日の立会平面模式図

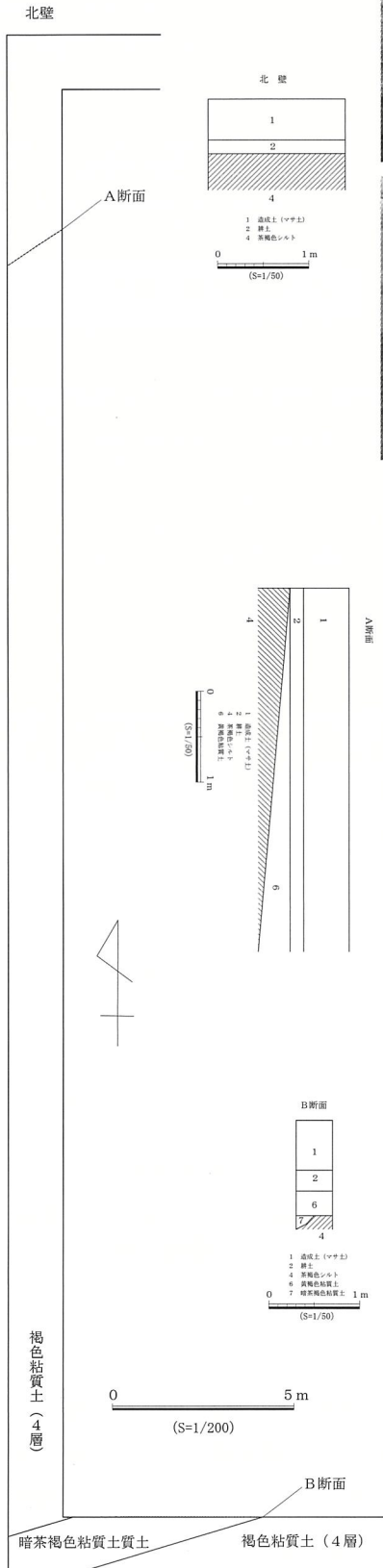
7月25日には、地中梁の掘削に対して立会調査を実施した。

T- 7～10の西端ラインから東へ折れる幅1.5m、深さ1mの掘削である。

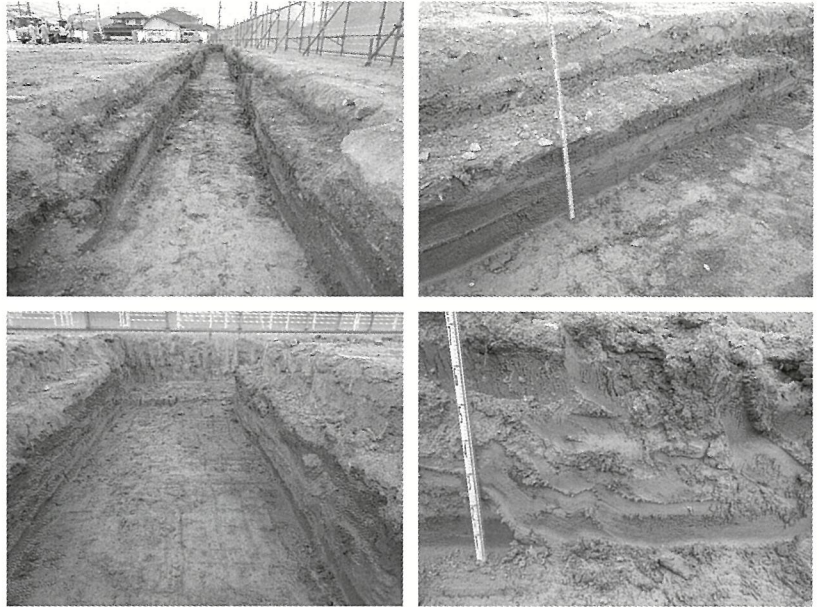
土層断面より土層の違い（A断面）と溝（B断面）を検出した。A断面では4層の基盤層が南に下降し、6層の水田層が形成されている。B断面では4層の基盤層で幅1.5mの溝を検出した。6層の水田層が形成される以前であり、古墳時代のもものと推測でき、低位部に直交することから排水路と判断した。

遺物の出土はまったくなかった。

③ 昨年度実施した分譲地開発の確認調査^(註3)における個人住宅新築にともなう立会調査である。



第7図 ② 7月25日の立会
平面模式図と土層模式図



第4図版 ② 7月25日の立会
左上：西端ライン（北から） 右上：A断面
左下：溝（東から） 右下：B断面

鋼管杭施工時の立会調査であり、上がってくる土は造成のマサ土と表土であった。

④ ③と同じく個人住宅新築の立会調査である。

鋼管杭施工時の立会調査で、上がってくる土は造成のマサ土と表土、それに床土とその下の明黄色粘質土であった。なお、GL-約3mで礫層と思われる。

⑤ 個人住宅新築の立会調査である。工事開始の連絡が遅れたことから、柱状改良工事での立会調査は実施できず、基礎掘削後の碎石が敷かれた段階での対応となった。基礎掘削は盛土内であった。

今後、受動的な連絡システムでなく、確認等のできる新システムを構築する必要がある。

⑥ 三輪遺跡群の東端で実施した店舗付個人住宅改築の立会調査である。

柱状改良工事の立会調査で、上がってくる土は造成のマサ土と水田耕土、淡灰色粘土である。グライ化している耕土であることから低位部に該当するものと判断される。

⑦ 建売住宅の新築にともなう確認調査である。

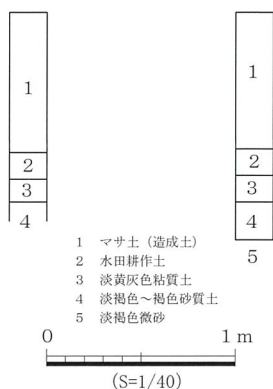
平成26年度に集合住宅新築にともなって確認調査を実施した地点の南側に位置している。先の調査では、耕土の下に1層を挟んだ2層上面で柱穴を検出した。また、

西側の道路を挟んだ地点でも土坑を検出している(註4)。区画整理事業にともなう既存調査は北西側に集中しており、弥生時代から中世の住居を含む遺構群が分布する。このことから、北西～西側に微高地の中心があり、東・南東側へは下降するものと判断した。

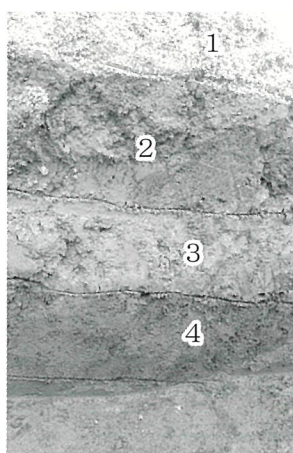
建物は2棟で、それぞれに1か所ずつトレンチを設定した。

南トレンチは、幅0.6～0.8m、長さ1.5mの規模で、深さ1.2mまで掘削した。土層模式図を作成した。1層はマサ土の造成土で60cm、造成前の水田耕土、粘質土、砂質土、そして5層の微砂となる。掘削底面以下もしまった微砂と推測される。

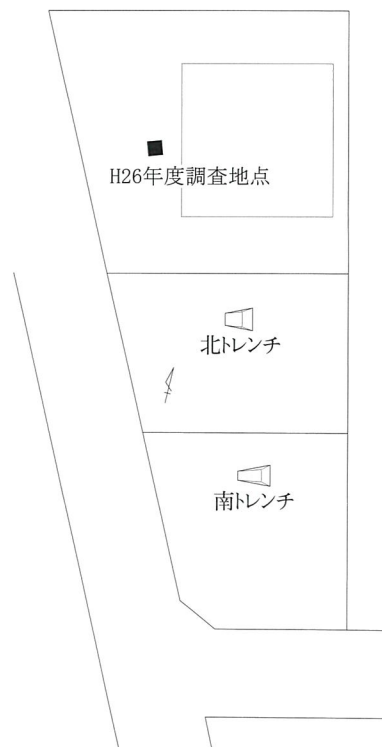
北トレンチ 南トレンチ



第8図 ⑦ 土層模式図



第5図版 ⑦ 土層断面(南から)



第9図 ⑦ トレンチ配置図 (S=1/500)

北トレンチも、幅0.8～1m、長さ1m、深さ1.1mである。土層は南トレンチと同じである。4層が南トレンチに比べ土色が濃く、マンガンの沈殿も多かった。

遺構も遺物も確認できなかった。

南東に向かって地形は下降しており、古墳時代以降より微高地化していったものと思われる。

(前角)

註1 『発掘! 総社駅南地区』2011年

「駅南区画整理事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』5～25, 1995～2016年

「総社駅南地区土地区画整理事業に伴う三輪遺跡群の発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』26, 2017年

註2 「店舗用地造成に伴う三輪遺跡群の確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』26, 2017年

註3 「分譲宅地造成に伴う三輪遺跡群の確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』26, 2017年

註4 「三輪遺跡群地内における立会・確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』25, 2016年

個人住宅の建築にともなう金井戸天原遺跡の立会調査

所在地 総社市金井戸字御所311-1・-5

調査期間 平成28（2016）年4月11日

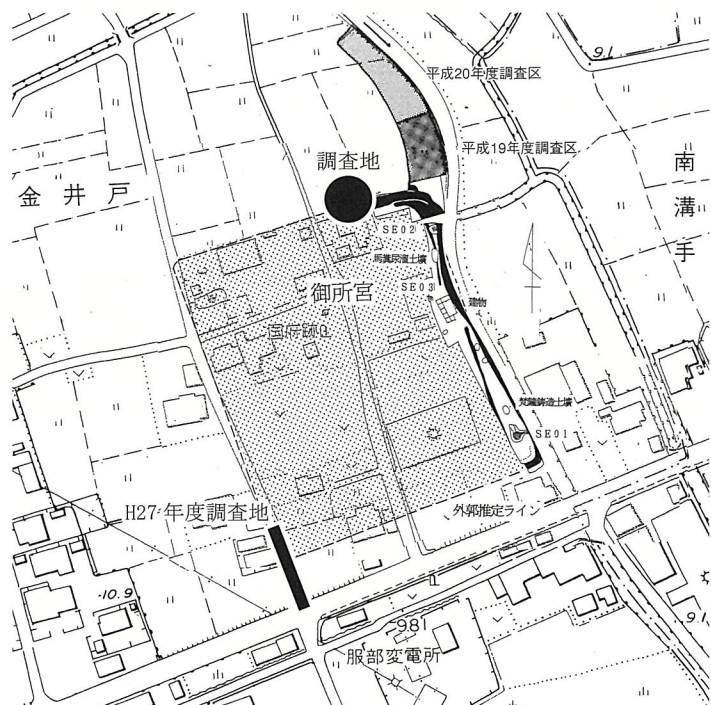
調査にいたる経緯

総社平野内には十二箇郷用水をはじめとした多くの水路や溝、河川が東流している。現在の高梁川の主流は平野の西端を南流するが、平野を形成する段階には東流したため、多くの痕跡が残されている。それらの中でも総社平野を南北に2分する東流路がある。賀陽郡と窪屋郡の郡境とされる。この下流域左岸の自然堤防上に金井戸天原遺跡は立地する。北側は金井戸溝が総社遺跡と、東側は南流する国府川が合流して大文字遺跡との微高地を分けている。

金井戸天原遺跡の東端には、御所宮と称される場所がある。備中国府は、「在賀陽郡」とされ、総社市大字金井戸がその有力候補地として、御所宮一帯を総社市の史跡「伝備中国府跡」に指定している。これまでその所在をさぐるべく確認調査が実施され、また国府川の改修工事にあわせて発掘調査が行われてきた^(註1)。その結果、国府川に沿って南北方向の大溝が掘削され、その溝が伝備中国府跡の御所宮を囲むように北側と南側のコーナー部分を検出し、方形大溝に囲まれた居館の存在が想定された。およそ方一町と報告されている。また、居館の内部においては特殊な井戸遺構などが検出されており、備中国府跡の可能性も報告されたが、御所宮での確認調査で確認した礎石建物や掘立柱建物などは11世紀前半



第10図 調査地周辺の遺跡分布図 (S=1/10,000)
〔『おかやま全県統合型GIS』より転載〕



第11図 調査地位置図 (S=1/2,500)

から13世紀後半のものであり、和名抄に記載の備中国府とは異なるものである。

しかも、この方形大溝の南西コーナー部に想定される地点において、昨年度、市道の改良工事が行われた。掘削は深さ40cmと小規模であったが、これまでの状況をふまえて立会調査を実施し、工事掘削の東壁・西壁の土層断面図化と掘削底面での遺構検出を行っている。その結果、弥生時代の竪穴住居や大形の土坑、柱穴等が検出された。しかし、12世紀中頃に南辺部に土塁を築いて幅6mの濠に改変したとされる南辺大溝を検出することはできなかった。これについては基盤層の認識違いも想定されるが、大溝掘削以前の遺構が検出されていることからこの地点での大溝掘削はなかったものと断定した。陸橋としてさらに西に延びる可能性も想定したが、これまでの既存調査からでは明確にしえなかった^(註2)。さらに今回の調査結果と合わせ、既存調査の再検討を進めたが、図面等の精査に時間を要し、今回も調査結果のみの報告で、検討・まとめについては次年度以降、早急に対応したいと思う。

立会調査

東側の道路に面してU字側溝を設置するため、幅1m、深さ35~100cmの掘削が行われた。調査は土層断面の観察を中心にを行い、2か所の断面図を作成したほか、断面2では掘削面での遺構検出と一部掘り下げも行った。

断面1は、北端のN0m点より4.5~6m間の西壁である。土坑と柱穴が確認されたことから図化を行った。

表土の下に1層をはさんで、3・4層を埋土とする遺構を検出し、2層上面を遺構面と判断した。なお、2層以下で遺構面が存在するかどうかについては掘り下げを行っていないため不明である。

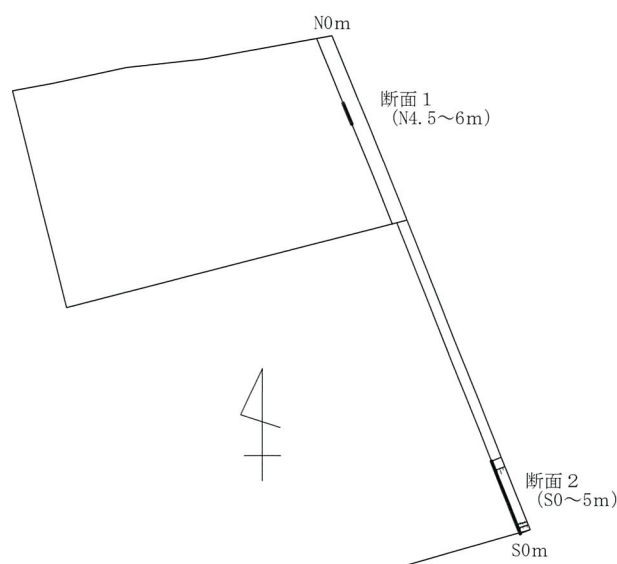
柱穴は断面で径16cm、深さ16cm以上となる。

土坑は断面で74cm、深さ21cmを測る。

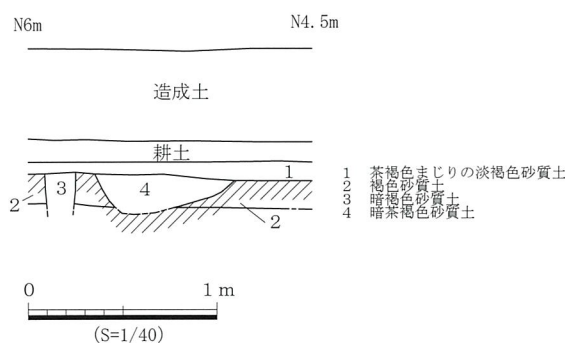
断面2は、南端のS0mから5mまでの西壁を図化した。2層上面を遺構面と判断したことから、2層を北から南に向かって追跡したところ、図化した範囲で2層の確認できない範囲が検出された。そこで平面的に遺構検出を行い、さらに西壁に沿ってサブトレンチを設定し、工事掘削面以下への土層堆積状況確認を行った。その結果、溝2条が検出された。

1つは、断面幅で約4.1m、深さ約0.8mと推定される東西大溝である。これについては、御所宮を囲む方形溝の一部に対応するものと考えられる。

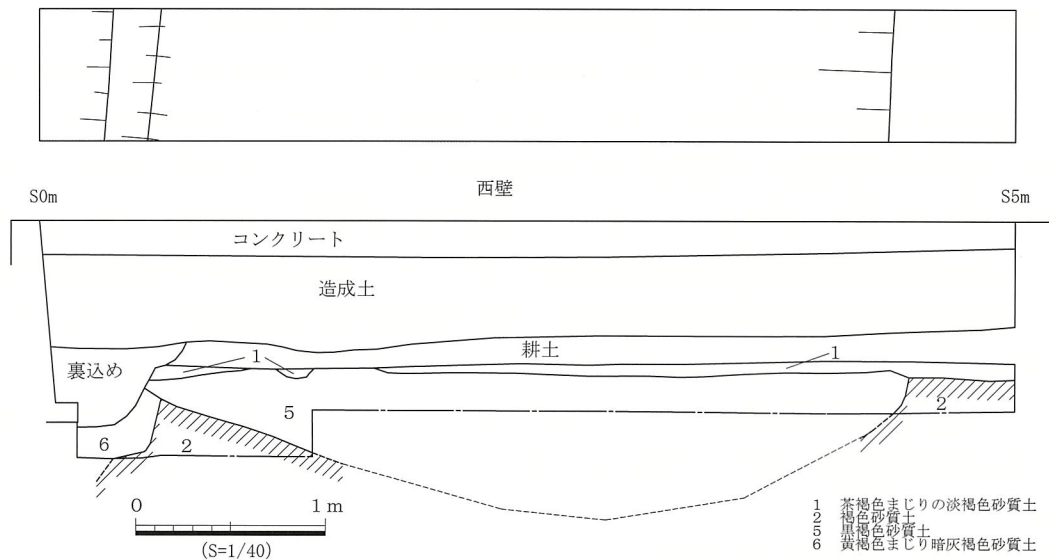
もう1つは、現水路の設置にともなう裏込め土の下位で検出された。現状で幅約0.5m、深さ約0.5mを測る。その位置関係から旧水路と考えたが、断面図の作成で大溝との先後関係において古いもの



第12図 調査地点位置図 (S=1/500)



第13図 断面1の断面図



第14図 断面2の断面図

と判断し、図化した。図化は断面のみであり、平面での確認を実施してないことから、先後関係が逆になる可能性もある。

遺物は、柱穴から弥生土器、大溝からは破碎されて細片となった土師質土器、ほかに土師器が表採された。

また、2層の厚みが0.4mとなるため、下層遺構面の存在はないものと判断した。

まとめ 今回の調査では、方形居館の北辺大溝と思われる遺構が確認された。すでに報告されている北東隅の遺構図に合わせてみると、ほぼ同一の位置にあたる。

また溝の規模等について記述されていないため、平面図から測定すると幅3～4.4m前後となり、今回の規模と合致するが、溝の深さでは比較ができない。

いずれにせよ、これまでの成果について、昨年度、今年度の成果を踏まえ、再検討を行う必要がある。また、周辺における開発についても留意する必要がある。(前角)



第6図版 東西大溝の出土遺物

- 註1 『備中国府跡緊急確認調査』総社市埋蔵文化財発掘調査報告7 1989年3月
「国府川改修工事に伴う発掘調査(1)」『総社市埋蔵文化財調査年報15』2006年3月
「国府川改修工事に伴う発掘調査(2)」『総社市埋蔵文化財調査年報16』2007年2月
「国府川改修工事に伴う発掘調査(3)」『総社市埋蔵文化財調査年報17』2008年3月
「御所遺跡確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報23』2014年10月
註2 「市道改良に伴う金井戸天原遺跡の立会調査」『総社市埋蔵文化財調査年報23』2014年3月

ソーラーパネル用地造成に伴う試掘調査

所在地 総社市東阿曾字轍り立844 外

調査期間 平成28年4月14日

調査経緯

総社市東部，東阿曾の丘陵斜面地において太陽光発電所の建設が計画されました。計画地の北に続く尾根上に尾崎古墳群が確認されている以外は，周辺で本格的調査は行われておらず，包蔵地の状況は不明でした。

計画地も下方に平野を見渡せる南向きのなだらかな斜面地であり，遺構が存在する可能性が考えられたため，太陽光発電装置（ソーラーパネル）設置の造成工事に先立って，試掘調査を行うこととしました。

調査概要

計画地の現況は，造成工事前の立木伐採のため重機が進入した後であり，丘陵地形は概ね現況を留めつつも，進入路部分は表土が削れ，断面が露出していました。そのため，試掘トレンチを入れる箇所を決める前に，現地を立ち入り踏査し，進入路部分については断面観察を行いながら，遺構の有無を検討しました。その結果，進入路上で土器微細片が少量採集されましたが，明確な遺構は確認されませんでした。

その後，比較的地形が改変されていない斜面上方にバケット幅のトレンチを4箇所設け，遺構の有無を確認しました。基本となる層序は，30cm程の表土，そしてその直下に地山層が確認されました。T-4については表土と地山層の間に灰色の中間層が確認されました。すべてのトレンチで，地山層を念入りに削り検討しましたが，遺構は確認されませんでした。

また，どのトレンチにおいても，表土を除去して地山を検出するまでの間に，ごみ，腐りかけの柿木の幹などが出土し，地山に達してからも掘り込まれた暗渠が見つかるなど，おそらく近代以降と思われる改変の痕跡が顕著でした。また，丘陵東側斜面は石垣が設けられるなど，畑作が行われたと考えられました。これにより，丘陵は当初の想定よりも大幅に改変を受けている可能性が高いといえます。

かつての姿はわかりませんが，少なくとも今回の調査で遺構や遺物を確認することはできず，この丘陵については埋蔵文化財包蔵地外と判断せざるを得ませんでした。

(村田)



第7図版 調査地遠景

コンビニエンスストア建設に伴う試掘調査

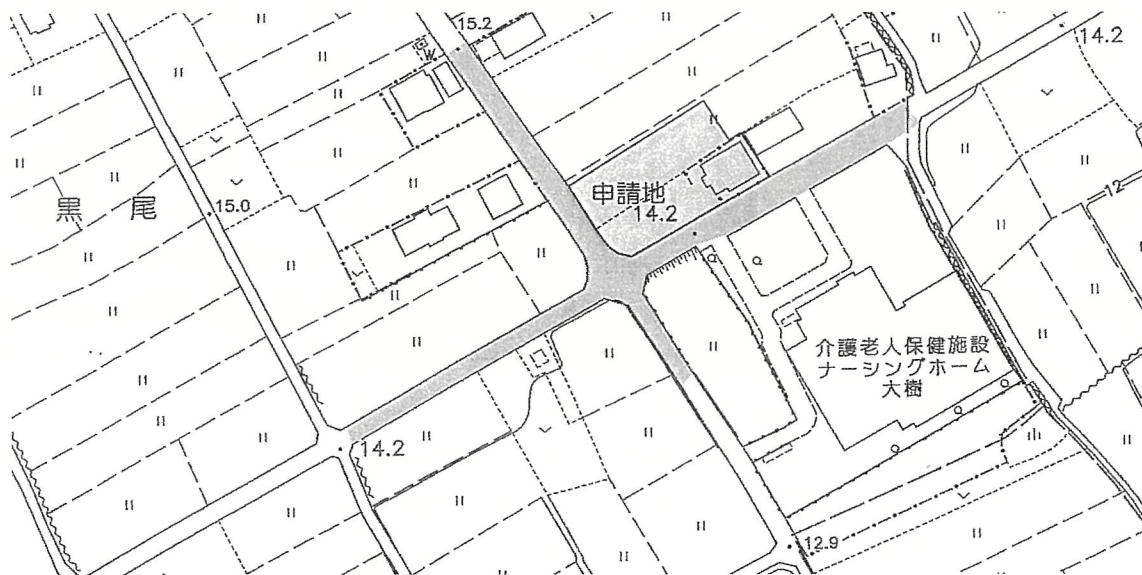
所在地 総社市黒尾字木塚240-1 外

調査期間 平成28年5月12日

調査経緯

総社市東部、黒尾地内の県道総社足守線沿いの田地においてコンビニエンスストアの建設が計画されました。計画地周辺においては、本格的な調査が行われておらず、包蔵地の有無が不明な状態でした。ただし、県道を挟んで南側では、特別養護老人施設建設に先立ち、試掘調査が実施されています^{註1}。

その調査の際には遺構は確認されず、調査地における「荒い流砂とグライ化した粘質土が随所に堆積する不安定な状況」が判明していますが、若干出土した土器片等については、「県道より北側の現集落に存在が予想される集落遺跡」から流れ込んだものと報告されています。今回の調査地も、予想された集落の縁辺にかかる可能性があったため、試掘調査を実施することとしました。

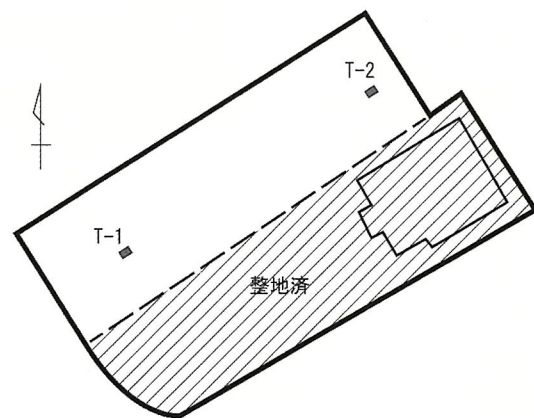


第15図 計画地位置図 (S=1/2,500)

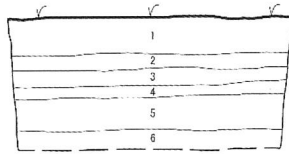
調査概要

計画地の現況は、南半が既に宅地化されており、北半が田地となっていました。そのため、田地部分に1.5m×1m規模のトレンチを2箇所設けて、人力掘削を行い土中の状況を確認しました。

T-1では、各層が水平堆積している状況であり、約70cm掘削したところで激しい湧水のある粗砂質土層（6層）に達しました。下方にある6層の影響により、上方に堆積する層もしまりが弱く不安定であり、遺構も確認されませんでした。耕作土中からは少量の弥生土器片が出



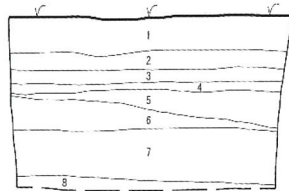
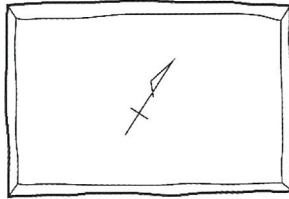
第16図 トレンチ位置図 (S=1/1,000)



T-1 実測図

1. 耕作土
2. 耕作土 弥生土器含む
3. 明褐灰 (7.5YR7/1) シルト質土層
上位に薄い鉄分の沈殿
4. 褐灰 (7.5YR6/1) シルト質土層
5. 褐灰 (7.5YR4/1) シルト質土層
6. 橙 (7.5YR7/6) 粗砂質土層

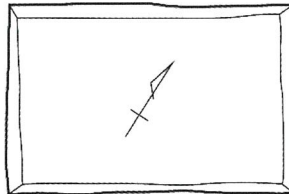
※地表面レベルを基準に実測



T-2 実測図

1. 耕作土
2. 耕作土
3. 明褐灰 (7.5YR7/1) シルト質土層
下位にマンガンの沈殿
4. 明褐灰 (7.5YR7/1) 砂質土層
5. 明褐灰 (7.5YR7/2) 粗砂質土層
6. にぶい黄褐 (10YR5/3) 細砂質土層
上位にマンガンの沈殿
7. 黒褐 (10YR3/1) 粘質土層 しまり弱
8. 黒褐 (10YR3/1) 細砂質土層 しまり弱

※地表面レベルを基準に実測



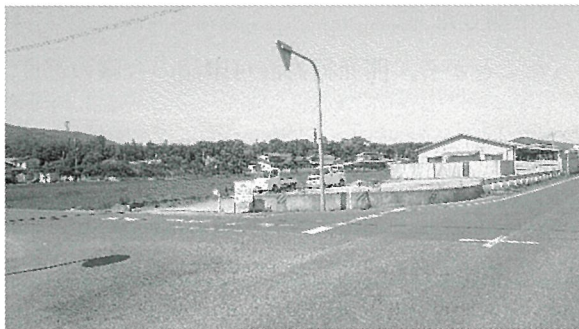
土しました。T-2では、5・6・8層がしまりが弱く湧水のある砂質土層にあたり、T-1同様に地盤は不安定な状況でした。遺構・遺物はありませんでした。T-2では、特にシルト・砂・粘土が薄く互層状に堆積しており、複数回にわたり土の流入があったものと考えられます。

まとめ

今回の調査では、T-1・T-2ともに、おそらく以前に南側の調査において確認されたような不安定な土層の堆積状況が認められました。遺構も確認されず、埋蔵文化財の包蔵地外と判断されました。ただし、今回も少量ではあるが弥生土器片が耕作土中に混入していたため、周辺、おそらくは調査地のさらに北側において、集落遺跡の存在する可能性が想定されました。(村田 晋)

第17図 トレンチ実測図 (S=1/40)

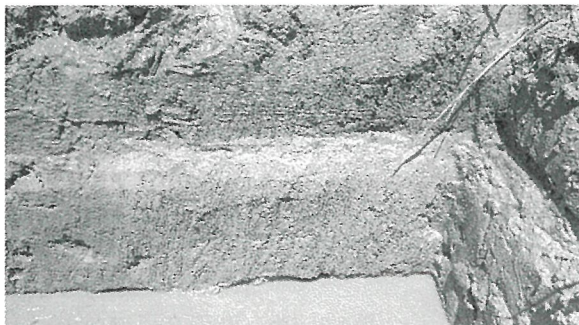
註1 「特別養護老人施設建設に伴う試掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』20 総社市教育委員会 2011年



第8図版 調査地近景



第9図版 T-1近景



第10図版 T-1北壁



第11図版 T-2近景

上林地内の個人住宅建設にともなう立会調査

所在地 総社市上林字佳美林57-6・-7・-8

調査期間 平成28(2016)年5月24日, 8月4日

調査概要

調査地とその西側は遺跡の空白地帯となっている。調査地の東側には中林遺跡・山屋敷遺跡が、南側の丘陵上には稻荷山古墳群・緑山古墳群が所在している。さらに西には前川が北流し、国府川と合流して流路を東に向けて流れる。その左岸には金井戸天原遺跡・金井戸鴻崎遺跡が、合流後もやや距離があるが大文字遺跡が所在する。

この空白地帯には山本神社が鎮座しており、また旧三須小学校・旧三須村役場が位置していたことから不安定な地形ではなかったことがうかがえよう。

そこで平成27年1月、個人住宅建設に先立ち、試掘調査を実施した。その結果、明瞭な遺構は検出できなかったものの、微高地の縁辺部にあたると判断し、西側に微高地の中心があるものと予測した^(註)。

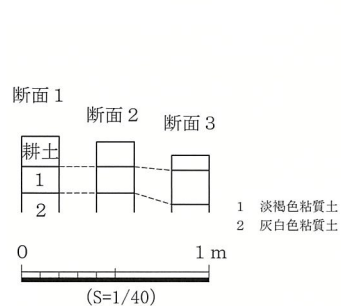
その後の周辺開発においても留意すべき必要があったことから、開発行為許可申請の合議の都度、立会調査を順次実施した。

5月24日の調査地点は、先の調査の東側に近接する区画である。その擁壁掘削時に立会調査を実施した。敷地の西と北側に擁壁を築くため、幅1.4m、深さ0.4mの掘削が行われた。土層断面図の作成は、西壁で南から断面1・2を、北壁の東端に断面3の3か所で行った。

耕土の下に2層の土層が確認できた。1層は淡褐色粘質土で、断面3においては2枚の黄褐色と淡



第18図 調査地周辺の遺跡分布図 (S=1/10,000)
(『おかやま全県統合型GIS』より転載)



第19図 土層模式図



第12図版 断面2 (東から)



第13図版 断面3 (南から)

灰褐色の互層が確認でき重層する水田耕作土となる。2層は灰白色粘質土で、1層との境目にマンガンを沈殿させている。

遺構は、西壁において、南側の道路端から北へ2 mの掘削底面で東西方向の溝が検出できた。幅0.6 mで、埋土は暗褐色シルトである。この溝のほか遺構の検出はなかった。

遺物は、2層中より中世土師器がわずかに出土したのみである。

また、8月4日の調査地点は、平成26年度調査の東と北側に接する区画である。その東擁壁で土層観察を中心に実施した。

耕土の下に4層の土層を確認した。1層と3層はともに灰橙色砂質シルト、2層は灰橙色砂質シルト、4層は灰白色砂質粘土である。4層の上面ではマンガンの沈殿が認められた。

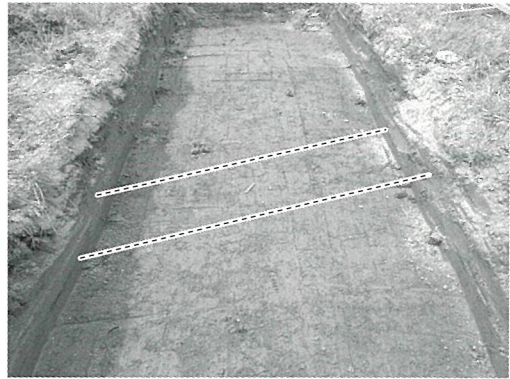
南側の道路端から北へ23 mの地点で、3・4層がやや盛り上がっている状況を確認した。幅20 cmほどの範囲で高さ5 cmほどの盛り上がりであり、水田畦畔と判断した。土層断面の図化を行い、畦畔の南側が一段低い水田区画となっていることが確認できた。

一昨年度の試掘調査に引き続いて、平成28年度においては2件の立会調査を実施することができた。いずれも隣接する地点であり、新たな見解を得ることはできなかったが、

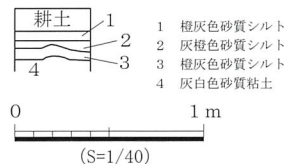
溝と水田畦畔の存在から一帯が生産領域であったことが追認された。とくに畦畔の南側が一段低くなっていることから、調査地の南側の古墳群が立地する丘陵裾を東流している水路に向かって地形が下がるものと考えられ、水路は中林遺跡の南端において確認される旧河道につながるものであろう。

今後も、西側の空白地帯における開発行為に留意する必要がある。

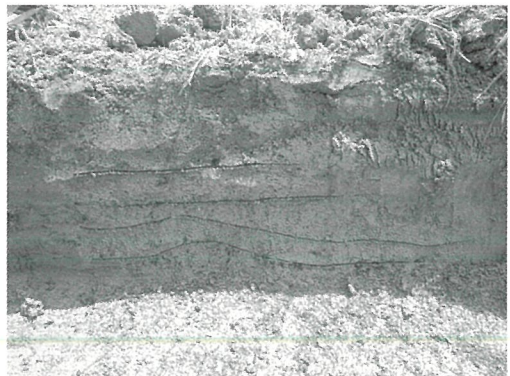
(前角)



第14図版 溝 (北から)



第20図 土層模式図



第15図版 断面 (西から)

註 「上林地区の個人住宅建設に伴う試掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報25』2016年 p63

分譲住宅地造成に伴う確認調査

所在地 総社市清音上中島161番2 外

調査期間 平成28年7月1日

調査経緯

総社市南部、清音駅北西の畑地を分譲住宅地化する計画が立ち上がりました。計画地となっている畑地では、岡山県古代吉備文化センターの分布調査において、須恵器や土師器、播鉢^{註1}などが採集された、遺物散布地として知られていました^{註1}。

近年行われた近隣における調査としては、JR伯備線清音駅北東側の進入路工事に伴う下軽部遺跡の発掘調査などがあげられ^{註2}、中近世の集落跡が見つかっています。計画地についても、比較的新しく形成された遺跡となる可能性が考えられたため、事前の確認調査を実施しました。

調査概要

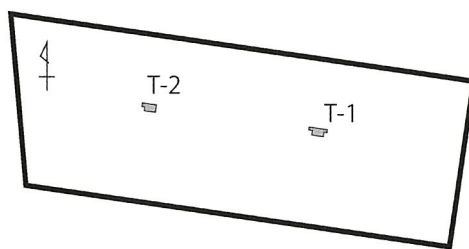
計画地の現況は東西に長い畑地であったため、東西の2箇所にトレンチを設け、人力による掘削を行いました。基本層序は、表面耕作土（1層）、暗褐色シルト土（3層）、暗褐色軟質シルト土（4層）、暗褐色粗砂質土（5層）となっており、T-2では耕作土直下に暗オリーブ褐色砂質土が薄く堆積していました。2層、3層はビニールや現代瓦が混じることから、客土と判断されました。4層は、T-2では水平堆積に近く厚く堆積するのに対して、T-1では薄くなっていました。5層も同様にT-2では水平堆積となっていました。T-1にかけて厚くなっていく様子でした。5層は、円礫や砂利を多く含み、特にT-1においては若干の湧水がある粗い砂質土となっており、高梁川に近いことから河川堆積作用により形成された可能性が想定されました。

遺物の採集情報に対して、今回の調査において遺物・遺構の検出はなく、新たな採集遺物もありませんでした。また、どの層も総じてしまりが弱く、集落が営まれるような安定した地盤ではないことから、現状では埋蔵文化財包蔵地とは判断できません。

今後の対応としては、造成工事に立会し、包蔵地外となることを確認する予定です。（村田 晋）

註1 『総社市統合型GIS』の記述より

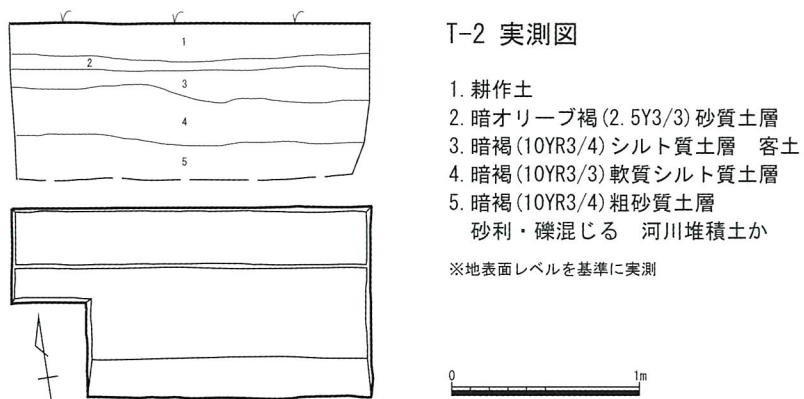
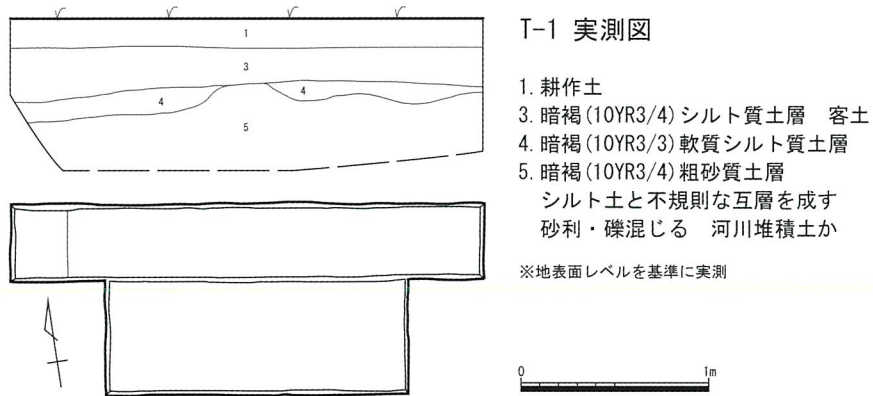
註2 「平成20年度 清音駅東地区整備事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』19 総社市教育委員会 2010年



第21図 トレンチ配置図 (S=1/1,000)



第22図 調査地位置図 (S=1/2,500)



第23図 トレンチ実測図 (S=1/40)

福山城跡での記念植樹にともなう発掘調査

調査地 総社市西郡1761

調査日 平成28（2016）年7月19日

調査面積 約2㎡

調査概要

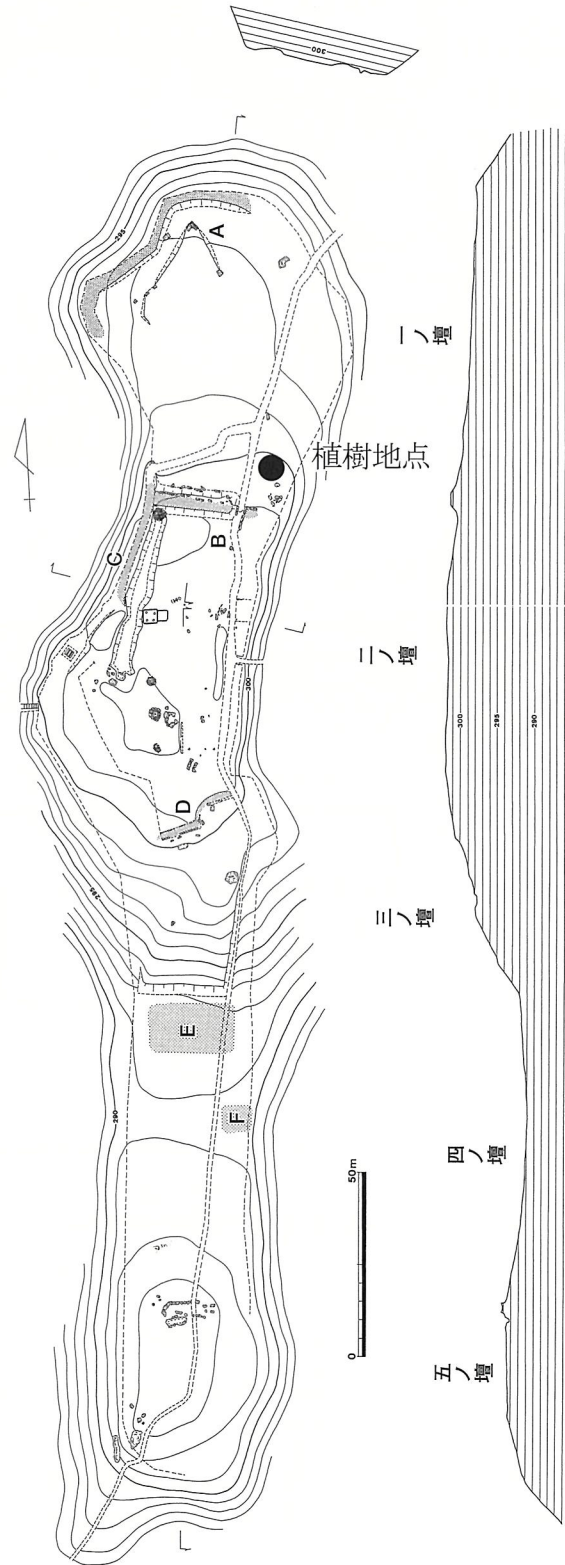
福山城は、北に総社平野、南に瀬戸内海を眺望できる標高302mの独立した山頂に築城されている。北の山裾では山陽道が東西に通じ、大河である高梁川は西の山裾に沿って南流したという、絶好の地の利となっている。

山頂には、平安時代より山岳仏教の聖地として「福山寺」が建立されており、鎌倉時代末ごろに真壁小六是久がこの寺院を改造して城を築いたと伝える。そして南北朝の内乱では、新田義貞軍の武将大井田氏経が城を占拠し、足利直義の軍との激しい攻防戦を行った。その様子は『太平記』に描かれている。

城は、南北で約350m、東西で約70mの規模で、5つの郭が南北方向に一直列で並んでいる。1番北の一ノ壇、主郭とみられる最高所の二ノ壇、二ノ壇から下る途中に三ノ壇、最低所の四ノ壇、そして南端の五ノ壇となる。一ノ壇には空堀や土塁が残り、二ノ壇にも土塁や空堀、「門跡」と呼ばれる石列、井戸がみとめられる。また、四ノ壇では基壇状の高まりや礎石が残され、瓦も出土するなど寺院としての痕跡も確認できる。

今回の記念植樹は、旧山手村が福山城主大井田氏とのつながりから新潟県十日町市との友好交流が始まり、その20周年記念事業として計画された。福山城跡ではこれまでも福山合戦にかかわる慰霊碑が建立されており、昭和61年には650年祭、平成9年には660年祭が執り行われ、それぞれの記念石碑があるほか、戦前に建立された石碑も残る。

植樹の場所は、当初、二ノ壇の慰霊碑付近としたが、国史跡としての指定範囲が二ノ壇を中心としたものであり、史跡現状変更の許可を得るだけ



第24図 福山城跡と植樹地点 (S=1/2,000)

の期間がとれなかったことなどから、史跡範囲外での地点を検討し、一ノ壇の記念碑付近に変更となった。

植樹範囲は約2㎡と小規模であったが、城が山頂にあることから、堆積土は少なく、掘削は遺構面に抵触するものと判断された。しかしながら石碑付近には転石も多く認められ、後世に何らかの改変を受けているものと判断できたことから、この地点に決定した。

植樹はそれぞれの市の木である「もみじ」（総社市）、「ブナ」（十日町市）で、ほかに記念の標柱を建てた。

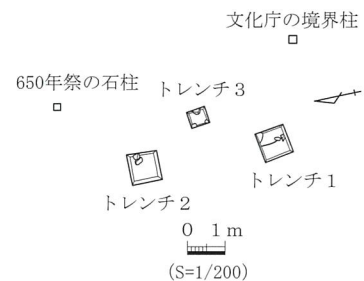
植樹範囲に対しては、事前の発掘調査を実施した。

トレンチ1～3は、いずれも1の表土と2の褐色粘質シルトの堆積で、基盤層は3の淡赤褐色粘質シルトか4の岩盤となる。

トレンチ1では基盤層が南側で10cmほど窪み、角礫が出土した。トレンチ2・3においても2層中に角礫を含む。また、トレンチ1・2の2層は山土に酷似するが、トレンチ3の2層はやや褐色の強い



第16図版 調査地近景（北西から）



第25図 トレンチ配置図



第17図版 トレンチ1（南から）



第18図版 トレンチ2（東から）

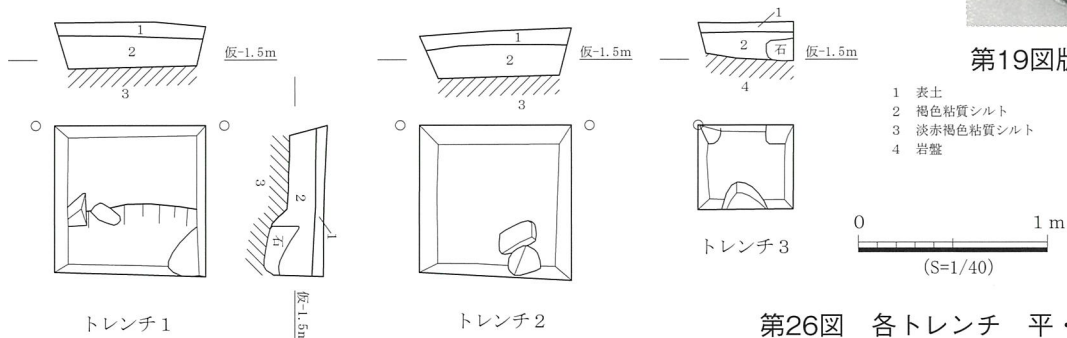
汚れた土層で、前者が整地層、後者が流土になろうか。

遺物は、トレンチ1の2層中より、中世土師器が1点出土した。外面にハケメを施し、煤が付着した煮沸系の鍋片である。

(前角)



第19図版 出土遺物



第26図 各トレンチ 平・断面図

社務所増築にともなう確認調査2

遺跡名 総社跡

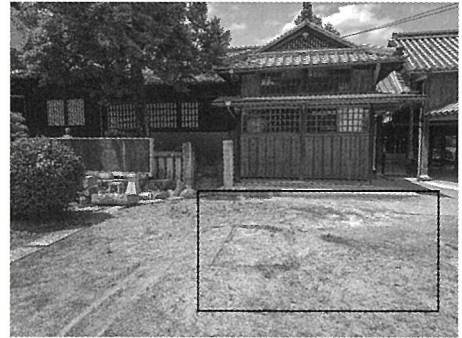
調査地 総社市総社2-18-1

調査日 平成28(2016)年7月19・20日

調査概要

調査地は総社跡の範囲内に該当し、国府関連遺跡の一つとして総社市の史跡に指定されている。

境内地での発掘調査はこれまで実施されたことがなく、周辺も古くより市街地化していたため、旧地形の復元も困難であった。その中で総社宮の南西に隣接する市立幼稚園の増築で発掘調査が実施されている(註1)。遺構の残存状況はあまり良くなかったものの、古代末～中世の遺構・遺物が確認された。また、昨年度の社務所の北側で実施した確認



第20図版 増築箇所

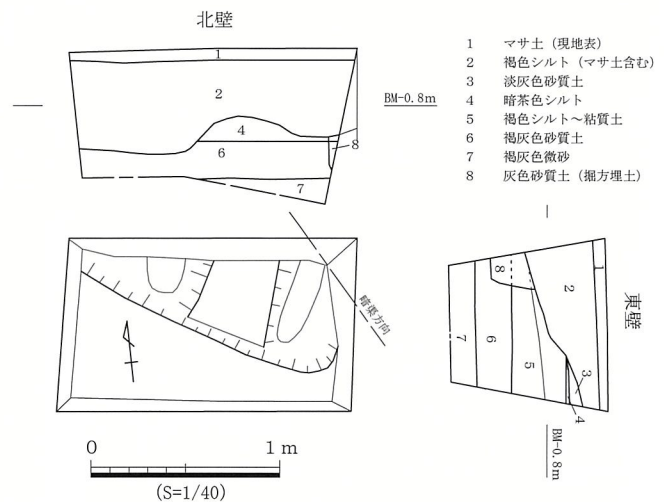
調査では低位部に当たることが確認できた(註2)。いずれも未報告で、詳細については不明である。

今回の社務所増築は、昨年度に引き続き2棟目となる。

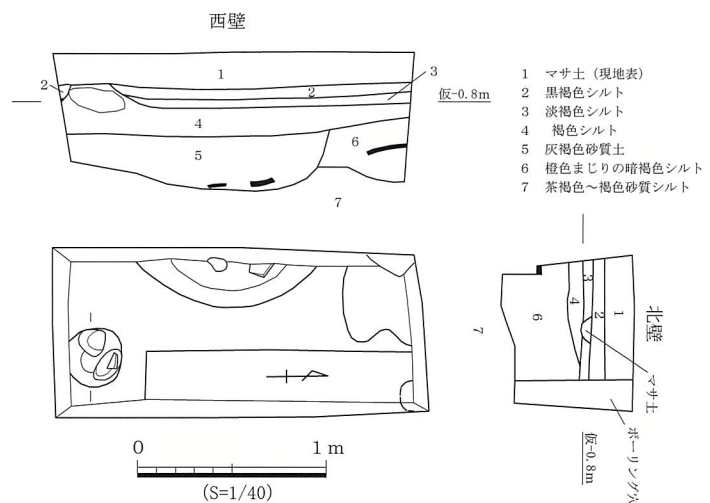
前回は社務所の北側、今回は南側と南北の位置関係になる。前回の調査では約2m×1mの範囲で実施し、1～8層の土層を確認した。3層の上面で、北に向かって低くなる2層の落ち込みを検出し、出土した遺物の時期幅が大きいことなどから地上げのために埋め込んだ造成土と判断した。また8層の暗渠痕跡を確認し、5層が水田域と微高地の境となる畔道の基部と推測したものの、遺物を多く含むことからこの層も造成土であった。2層が近代、5層が近世の造成土と判断した。

今回の増築は、基礎工事の掘削が外周で幅60cm、深さ80cmになるため、掘削深度が遺構面に抵触しないか確認するために実施した。

約2m×1mの範囲のトレンチを設定した。



第27図 前回のトレンチ 平・断面図



第28図 トレンチ 平・断面図

表土のマサ土を含めて、7層の土層が確認できた。

1層は、現況地表として、マサ土である。

2層は、黒褐色シルトで非常に硬くしまる。

3層は、淡褐色シルトで2層同様に硬くしまった土層。

4層は、褐色シルト。

5層は、灰褐色砂質土で焼土・炭・瓦が出土した。

6層は、橙色の粘質ブロックまじりの暗褐色シルトで瓦が出土した。

7層は、茶褐色～褐色砂質シルトで下位ほど淡くなり、微砂も多く含まれる。

これ以下もピンポールで30cm程度打ち込むことができ、洪水砂による自然堆積層と推測した。

遺構は、西壁で5層の落ち込みを、南端で径20cm・深さ20cmのピットを検出した。ピットには15cm程度の円礫を底に置いており、埋土は5層で瓦が出土した。柱の沈下防止とした配石と推測される。

出土した遺物は、瓦が主で、ほかに土師質土器・磁器等がわずかである。瓦は近世～近代の燠系の瓦である。

7層の自然堆積層が基盤層で、北西に高く、南東に向かって下降する。この南東方向には総社宮の池があり、低位部に向かっていくものと判断される。

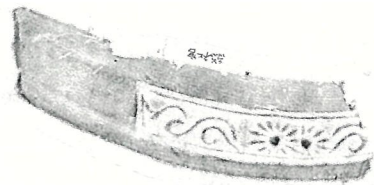
(前角)



左：トレンチ全体（東から）



右：北壁土層断面



第21図版 トレンチと出土遺物

保育園新築にともなう延遺跡地内の確認・立会調査

調査地 総社市井手438番ほか

調査日 平成28（2016）年7月21・22日（確認）、10月26日（立会）

調査概要

調査地は、延遺跡の範囲内に該当する。

これまで遺跡は弥生時代の集落遺跡とされていたが、平成14・15年度に実施した東総社中原本線改良事業にともなう発掘調査で古墳時代から中世の遺構・遺物も確認できた（註）。東西に長い路線内の調査であったため、延遺跡の西に位置する真壁遺跡に近い部分では弥生時代の集落が分布し、東に向かうほど礫層の露呈する部分と礫層が下降してシルト層になる部分とに分かれ、順次古墳時代から中世の集落へと居住域を拡げていったことが確認できた。さらに東端部では井手川に接し、河川氾濫原となっていた。

今回の調査地は、延遺跡の最東端に位置しており、北東の井手村後遺跡との間には旧河道が想定されることから集落の縁辺部に該当するものと判断された。

現況においては北側に小さな社が鎮座しているが、周囲はいずれも水田および畑地であり、居住地にはなっていない。しかし、開発面積が大きかったこともあり、事前の確認調査を実施したものである。

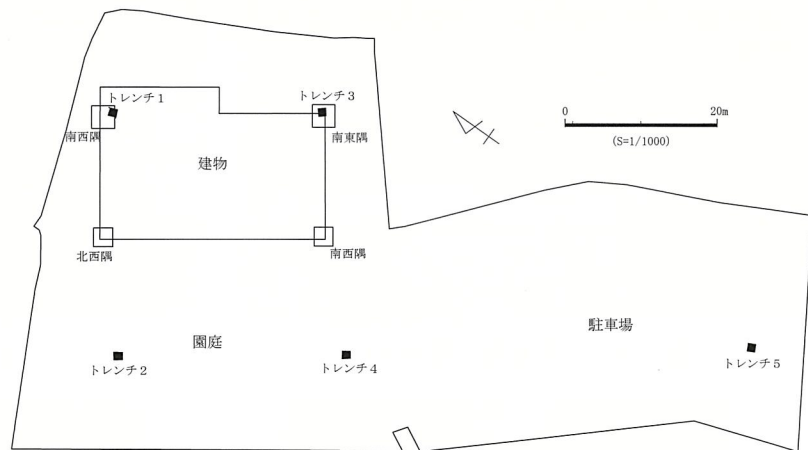
調査は、トレンチを5ヶ所に設定した。

トレンチ1は、園舎の北端に設定した。

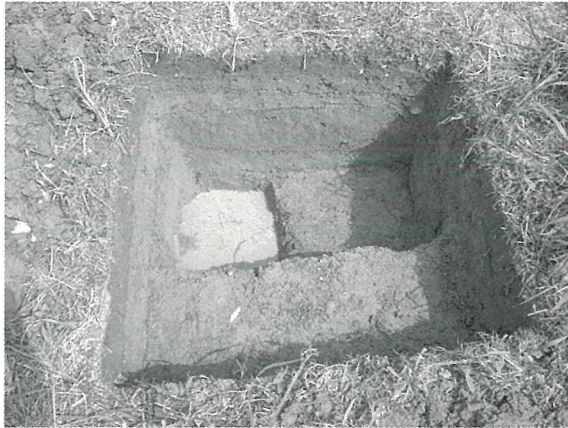
耕土・床土の下に4層の土層を確認し、トレンチ底面より0.9mで礫層となった。2層の円礫はトレンチの中ほどから南東に向かって下降し、3層も同方向で下降することから、この方向の先に井手川の低位最深部が該当するものと判断できた。2層が円礫、3層が砂質土、4層が微砂になることから、いずれも井手川の氾濫原として、とくに2層の円礫は洪水による痕跡と考えている。



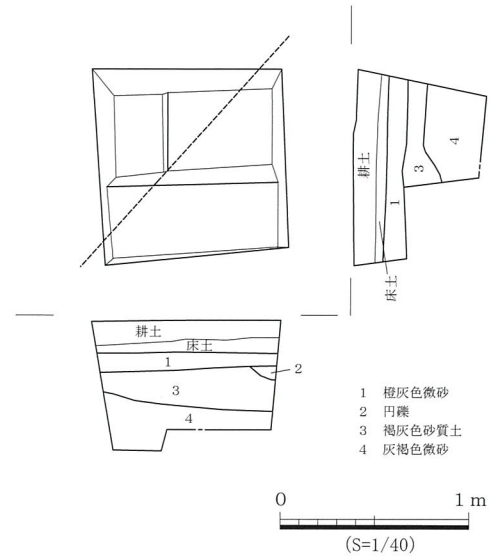
第29図 調査地周辺の遺跡分布図（S=1/10,000）
（『おかやま全県統合型GIS』より転載）



第30図 トレンチ配置図



第22図版 トレンチ1 (南から)



遺物は出土していない。

トレンチ2は、園庭の北端に設定した。

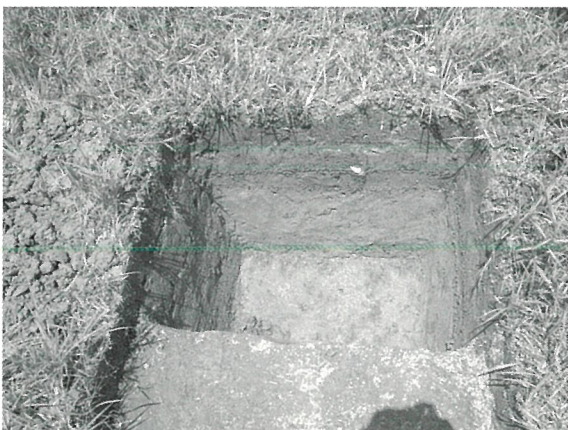
耕土の下に4層の土層を確認したが、床土が存在

せず、1層以外の3層もトレンチ1の2~4層とは異なっていた。さらにトレンチ底面より0.5m以上が粘土層と推測され、礫層は確認できなかった。

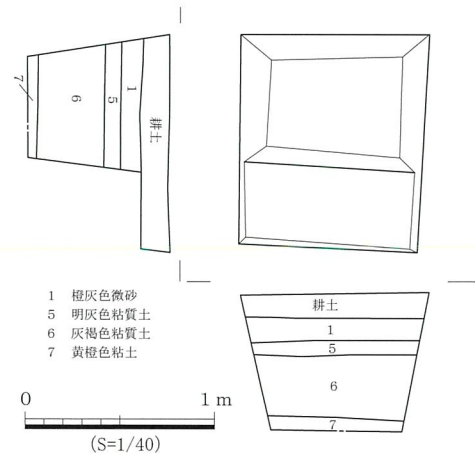
5層は旧耕作土とも考えられ、6・7層も粘質土となっている。湧水は認められなかった。

遺物は5層から土師器と思われる微片が2点のみである。

第31図 トレンチ1 平・断面図



第23図版 トレンチ2 (南から)



第32図 トレンチ2 平・断面図

トレンチ3は、建物の南東端に設定した。

耕土・床土の下に3層の土層を確認した。

3層はトレンチ1と同じ土層配列となるが、2層を確認することはできなかった。さらに、礫層はトレンチ底面で検出することができ、トレンチ1と比較して約0.9mの高低差が存在する。礫層は北西に向かって下降する状況である。

遺物は出土していない。

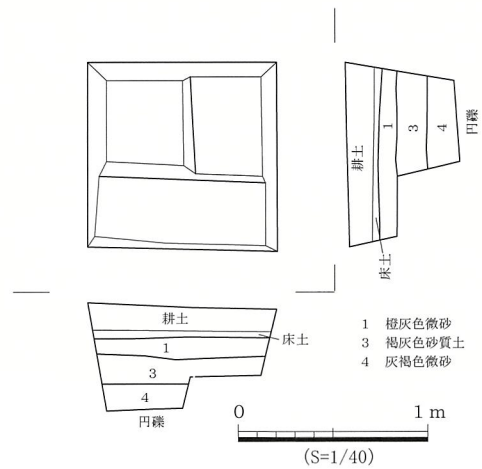
トレンチ4は、園庭の南端に設定した。

耕土の下に4層の土層を確認した。トレンチ2と同じ状況であるが、礫層がトレンチ底面より0.45mで確認され、トレンチ3に近い様相もうかがえた。また、6層をa・bに細分し、5層が旧耕作土、6a層が旧床土、6b層が旧耕作土と推測した。

遺物は、弥生土器の底部片が1点のみで、摩滅している。



第24図版 トレンチ3 (南から)



第33図 トレンチ3 平・断面図



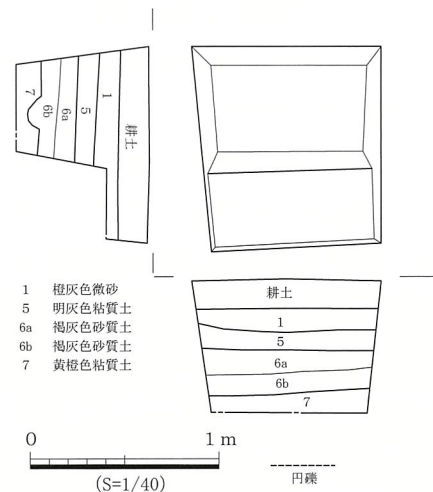
第25図版 トレンチ4 (西から)

トレンチ5は、駐車場の南端に設定した。

耕土の下に造成土と3層の土層を確認した。

造成土は床土、茶褐色、淡褐色の各ブロックと10

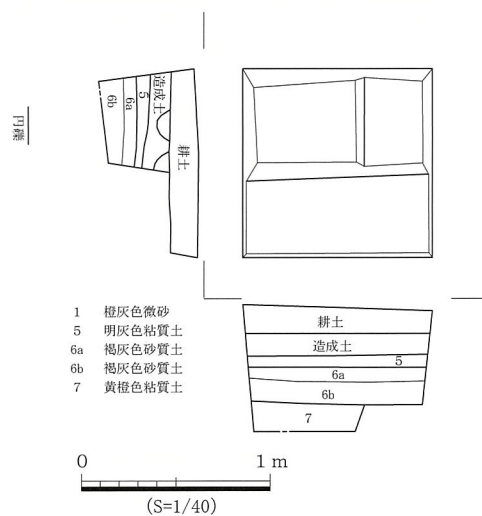
cm大以下の円礫が混入したもので、より高い位置にあった床土・1層などを地下げし、運び込んで地上げを行ったと判断した。造成土以下についてはトレンチ4と同じ状況であったが、いずれの土層にも礫が混じっており、より河川に近い状況がうかがえた。



第34図 トレンチ4 平・断面図



第26図版 トレンチ5 (南から)



第35図 トレンチ5 平・断面図

また、トレンチ底面から0.4mで礫層となる。
 遺物は、土錘1点、須恵器、土師質土器の細片である。
 調査の結果、遺構は検出されず、遺物も非常に少なく、当初の想定どおり周囲を含めて生活領域は存在しないものと判断された。



第27図版 トレンチ5出土遺物

5ヶ所のトレンチのなかで、トレンチ1・3とトレンチ2・4・5では、堆積土に明確な違いが認められた。前者は河川氾濫原となる微砂・砂質土・礫であり、後者は後背湿地となる粘土・粘質土である。トレンチ3の礫層が最も高く、トレンチ1とトレンチ4・5で低くなっていることから、南北方向に礫層の高まりが存在し、東と西側に向かってそれぞれ下降するものと判断された。さらにトレンチ1では2層の礫層が確認され、基盤層の円礫層以外にも河川の氾濫堆積があったものと推測される。

また、トレンチ2では礫層が確認できず、トレンチ4と同様に粘質土・粘土の堆積となり、水田層（旧耕土・旧床土）の存在も確認することができた。

礫層の高まりの西側では後背湿地上における生産領域が営まれ、東側では井手川の氾濫原として土地利用はなかったものと判断された。

トレンチ5では床土を含んだ造成土が認められることから、後世になって地上げ・地下げを行い、氾濫原を生産領域へと変えていったものと思われる。その活動は中世土師器の出土から中世以降となる。

立会調査は、10月26日に基礎掘削工事に対して実施した。

建物基礎の四隅で、土層断面観察を中心に行い、南東隅において土坑1基が確認できた。

基本層位は、1層のマサ土盛土の下に、現水田層の2層、その下に北西隅では3・4層、北東隅・南西隅・南東隅では5・7～8層となり、違いが認められた。これは確認調査時のトレンチ1・3とトレンチ2・4・5との違いに対応しており、礫層による自然堤防の氾濫原側と後背湿地側の違いと判断される。

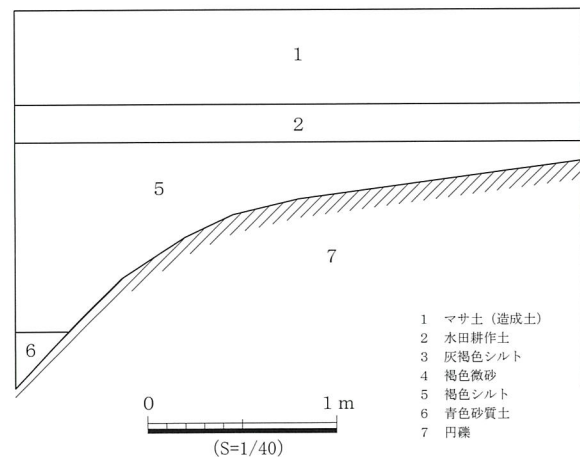
北東隅と南東隅で礫層が高位置より露出し、南西隅に下降している。とくに南東隅においては東壁で7層が確認されるが、南・西壁においては7層がなく、8層となっており、自然堤防の本体はさらに東側に位置するものとなる。

また、北東隅においてのみ、6層の青色砂質土が認められ、北に向かって

北西隅の東壁 (X1Y2交点)



北東隅の東壁 (X1Y4交点)

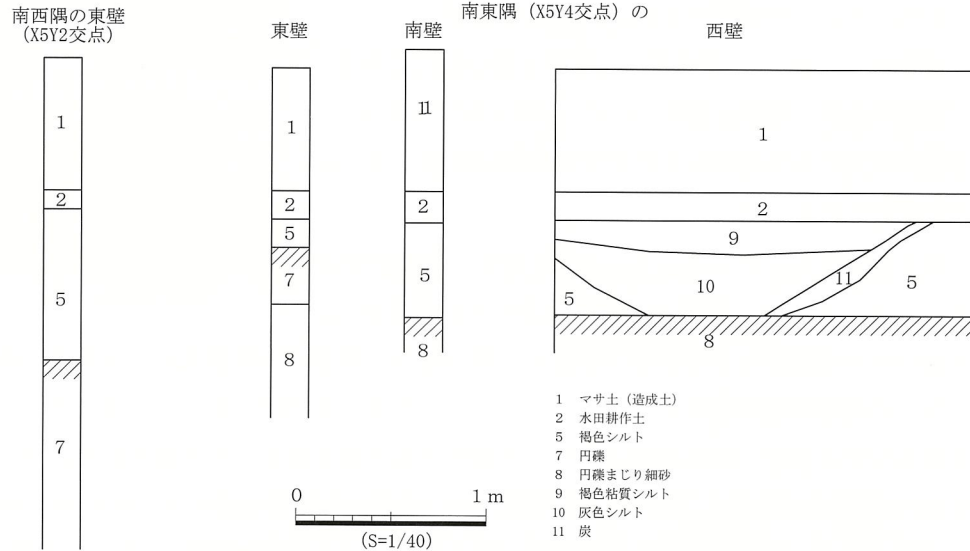


- 1 マサ土（造成土）
- 2 水田耕作土
- 3 灰褐色シルト
- 4 褐色微砂
- 5 褐色シルト
- 6 青色砂質土
- 7 円礫

第36図 立会調査時の土層模式図（建物北部）

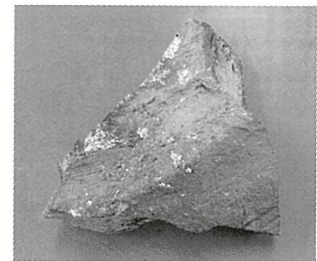
7層の礫層が下降することからも、東側以外に低位部が広がっているもので、この低位部が延遺跡と清水角遺跡・井手村後遺跡を分けている。

南東隅の西壁において、土坑が1基、断面観察で確認できた。



第37図 立会調査時の土層模式図 (建物南部)

5層上面から8層上面まで掘り込まれ、すり鉢状を呈し、深さは50cm、幅は断面で2.2mとなる。埋土は、11層の炭層が北側から底面まで10cmほどの厚みで堆積していた。9層は5層に近く、10層は炭の影響により灰色を呈していたが、焼土粒等は確認できなかった。焼けた面も認められないことから、火を焚いた土坑ではない。遺物は、備前焼の甕底部が1点出土した。5層上面が検出面で、2層の水田層の下層直下に近いことから、近世と判断した。



第28図版 南東隅土坑 出土遺物 (前角)



第29図版 北東隅の東壁 (西から)



第30図版 南東隅の西壁の土坑 (東から)

註 「平成14・15年度 東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報14』総社市教育委員会 2005年

マンション建設に伴う確認調査

遺跡名 真壁遺跡

所在地 総社市真壁127-4, 178-6, 127-6

調査期間 平成28年9月23日

調査概要

調査地に3階建て賃貸マンションの造成が計画されたため、確認調査を実施した。調査地の南約50mに位置する東総社～中原本線の発掘調査の結果から本調査地は、微高地と低湿地の境界付近に位置していることが推定されていた。

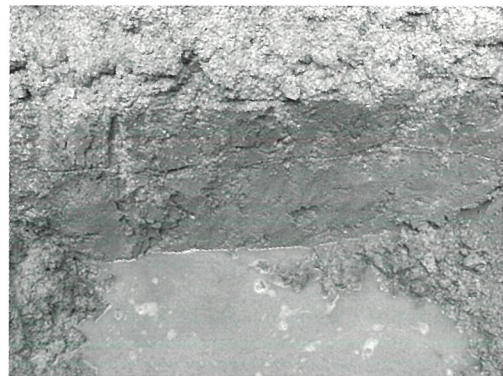
調査地の現状は建物を撤去した後の宅地で、重機によって確認トレンチを掘削した。その結果、真砂土の客土の下は灰黒色粘質土～灰青色粘質土の順に堆積していた。いずれの土層も粘質が強く、低湿地の堆積土であると判断された。遺構・遺物は認められなかった。

以上のことより、本調査地は低湿地内に位置していることが判明し、マンションの基礎掘削時の立会調査で対応することとした。

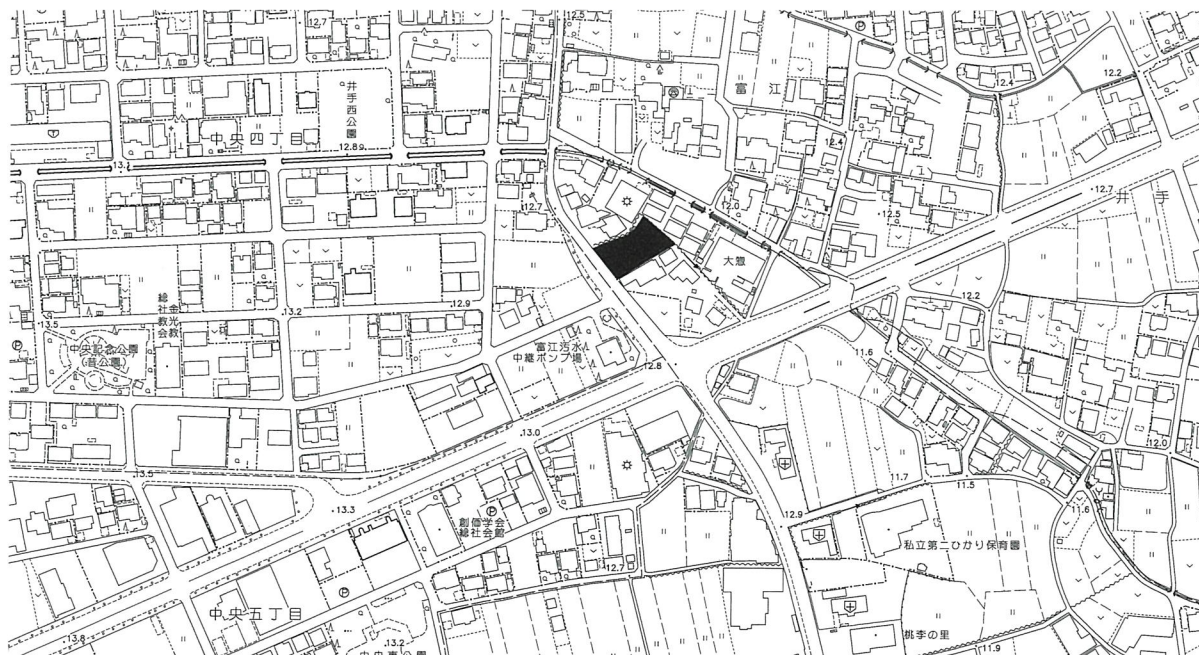
(高橋)



第31図版 調査地全景（西から）



第32図版 土層堆積状況（西から）



第38図 調査地位置図 (S=1/5,000)

国府川改修に伴う確認調査

遺跡名 総社遺跡・金井戸遺跡

所在地 総社市金井戸地内

調査期間 平成28（2016）年10月25・26日

調査面積 約32㎡

調査にいたる経緯

平成16～20年度にわたる国府川改修工事にともなう発掘調査は、金井戸天原遺跡の東端部とその北側の遺跡範囲外において実施された^(註1)。その結果、伝備中国府跡を囲む方形区画溝の存在が確認された。ほぼ一町四方の方形居館と推定されたことから、平成24年度には居館の中核域となる御所宮の境内地ほかで確認調査も行った^(註2)。

方形居館内には特殊な井戸や土坑、あるいは居館の中央域において焼失した礎石建物とその直後に再建された掘立柱建物などがあり、11世紀前半～13世紀後半がその存続期間と考えられている。また、方形居館の北側へも調査が進められ、方形居館と同時期の井戸などの存在から日常生活の場が居館北側にも広がっていたこと、さらにその北側で多数の畦畔を検出し、居館廃絶後に大規模な水田開発を行っていることなどもわかった。畦畔の存在は調査完了範囲以北の金井戸溝まで広がるものと推定されたが、金井戸溝を越えた植木橋までの間も含めて発掘調査は実施されていない。

そして、平成26年度には植木橋の上流域でも河川改修事業が計画された。遺跡範囲には含まれていなかったが、遺跡の存在する可能性もうかがえたことから試掘調査を実施することとした。これまで左岸側の状況については報告されておらず、まったく不明であったことから、左岸にもトレンチを設定した。調査の結果、左岸側は耕作土以下が青色粘土と砂になり、旧河道内の堆積層にあたと判断した。対して、右岸側は湿地状堆積であったが、基盤層上面で遺構が検出されたことから河川内で消滅する範囲について発掘調査を実施した。調査区の南部では大畦畔と小畦畔による水田層が層位的に確認され、北部では土坑や柱穴が認められ、北に向かうほど微高地化していることが判明した^(註3)。

平成27年度も同様に左岸側で試掘調査を実施し、前年度同様の状況が確認できた^(註4)。右岸側については前回の調査結果から遺構が北へ続くため試掘調査は行わず、発掘調査として実施した。その結果、畦畔や小溝群などの水田遺構が認められたほか、東西方向の大溝が検出された。総社遺跡では国道180号線バイパスにともなって中世の堀と土塁が検出されている^(註5)。大溝がそれらの最終排水路になったものと考えられる。

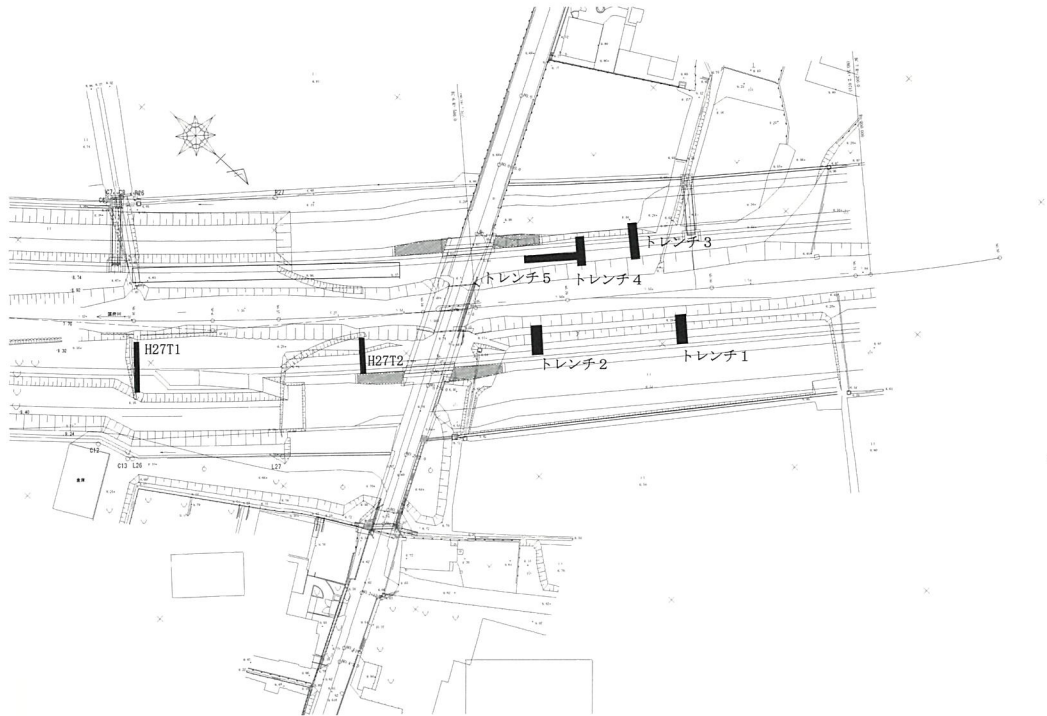
今年度はさらに上流域での事業となり、左岸は金井戸遺跡、右岸は総社遺跡の範囲内となった。そのため文化財保護法の通知にあわせて、事前の確認調査を実施し、遺構の状況によって発掘調査を实



第39図 調査地周辺の遺跡分布図 (S=1/10,000)
 (『おかやま全県統合型GIS』より転載)

施することとした。

調査は、左岸側で2か所、右岸側で3か所のトレンチを設定した。



第40図 トレンチ配置図 (S=1/1,000)

トレンチ1は、幅1.6m・長4mの規模で重機掘削し、深さ0.9mまで掘り下げたが、底面では長2m程度になる。

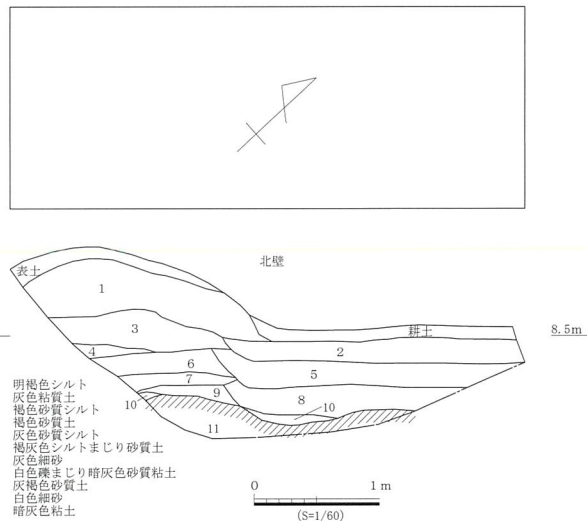
表土・耕土の下に11層の土層を確認した。

2・5層の水田耕作土と1・3・4層の堤防造成土がそれぞれ対応し、堤防を築きながら水田面を造成していったことが読み取れる。8層も7層が洪水砂で、9層が堤防造成土としての対応が可能であり、6層も堤防造成土として5と8層の間に5層で削られて消滅した水田面が存在していたと考えられる。現堤防は現耕土から66cmの高さがあるが、2層の耕土では25cmの高さとなり、これ以下も同様な低い堤防であったと考えられる。

遺物の出土はなかった。

トレンチ2は、幅1.6m・長4.7mの規模で、深さ0.8mまで掘り下げた。底面以下もピンポールで0.8m打ち込めたように軟弱な地盤であった。

土層は11層のほかに、堤防造成土としてさらに4層を確認した。



第41図 トレンチ1 平・断面図

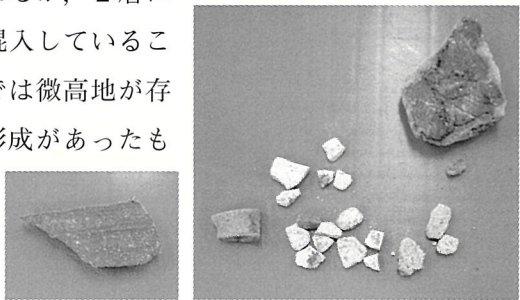


第33図版 トレンチ1 (南東から)

トレンチ1と同じように、2・5・8層の水田層と堤防の1・3・4・6・9層が確認できたほか、11層の基盤層直上で明灰色粘土・灰褐色粘土を確認した。おそらく堤防の最下層基礎として、8層の水田層によって削平された古い水田層があったものと考えられる。

水田層のほかに、トレンチの中ほどで直径10cmの杭痕跡が確認できた。堤防造成土の土留め杭と判断されるが、どの層に対応するかは不明である。

遺物は2層から燻し瓦・土師質土器・土師器が少量、8層から備前焼が1点出土している。水田層の形成は近世に入ってからと思われるが、2層に中世土師器が混入していることから、周辺では微高地が存在し、集落の形成があったものと判断でき、最下層の水田層が中世にさかのぼる



第34図版 出土遺物（左：8層，右：2層）



第35図版 トレンチ2（南東から）

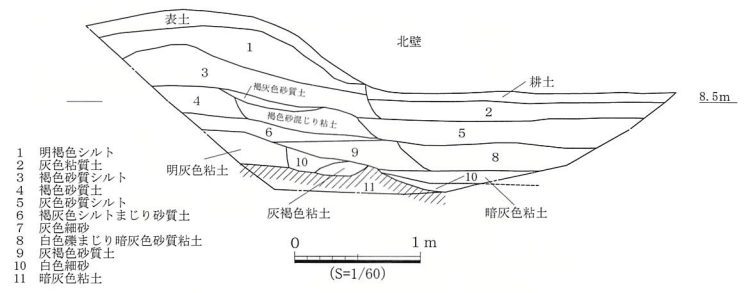
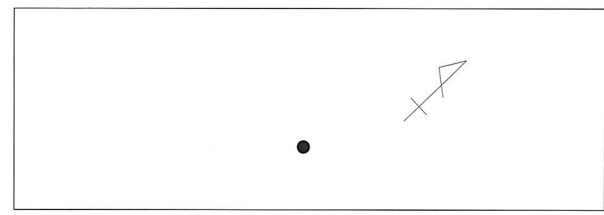
可能性もある。トレンチ3は、右岸側で今回の工事範囲の最も北端に設定した。幅1.2m・長さ5mの規模で、深さ1.9mまで掘り下げた。現代耕土以下に、13層の土層を確認した。

1層は旧耕土の床土で、2層は現代耕土と旧耕土に対応する堤防盛土である。

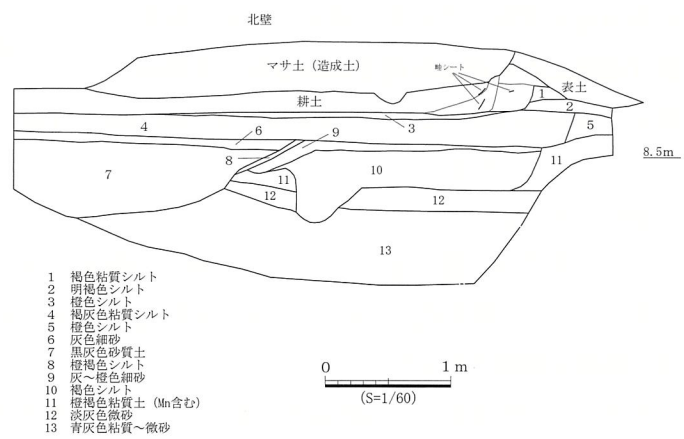
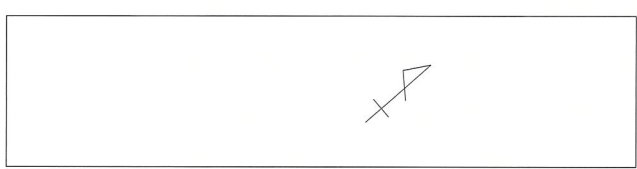
3層は床土と考えられ、トレンチ4から堤防盛土の2と5層の間に存在した堤防盛土に対応する耕作土ないし床土と推測される。

4層も旧水田層で、10層が対応する堤防盛土。

5層は旧床土で、対応する堤防盛土（畦畔）は耕土とともに4層の水田層拡大によって削平された。



第42図 トレンチ2 平・断面図



第43図 トレンチ3 平・断面図

6層は洪水砂で、層厚が50cmを測ることから大規模な水害であったと判断した。なお、南面の断面において6層が確認できないことから、洪水の方向はかなり西に振っている。

7・8層は洪水砂に削られ、また埋没されたものであるが、傾斜する堆積層になることから5層とほぼ同位置の水田区画で、耕土と床土が削られたものである。この点から8層は傾斜堆積部分と水平堆積部分を分別すべきものと判断されるが図化時点では同一層の認識であった。傾斜堆積部分が畦畔（堤防盛土）で、水平堆積部分がそれ以前の床土で、対応する堤防盛土は10層もしくは消滅、あるいは11層と推測される。

9層も洪水砂で、層厚30cm、一部ではさらに深さ30cmほどの溝状になる堆積が認められる。11層の堤防盛土を大きく削り込んでおり、これも小規模であったとは考えられない。

11層がトレンチ3で最も古い堤防盛土で、対応する水田層は6・9層の洪水砂で消滅している。

12・13層は微砂で、青色～灰色にグライ化しており、湿地状の堆積層である。

そして底面以下ではピンポールが1 m打ち込め、12・13層同様の微砂系と判断した。

遺物は、12・13層から土師質土器・土師器・瓦質土器・陶器が出土した。周辺では中世の集落が形成されており、堆積過程において流れ込んだものと判断される。この遺物出土層の上に11層の堤防盛土が積まれることから中世あるいはそれ以降の段階で堤防を築き、水田形成を進めたものと思われる。

しかし、左岸のトレンチ1・2のように重層的な水田面を形成したのではなく、4層のように大きく堤防堆積土を削り込んだ、あるいは堤防をより東に作り出すことで水田を形成している。これは9層によって堤防が削り込まれたことと、河道が東に移動して埋まったことにより堤防を移動して水田面を拡大したことによる復旧と判断した。

トレンチ4は、幅1.2・長4 mの規模で、深さ1.4 mまで掘り下げた。

トレンチ3とは近距離になるものの、6・9層の洪水砂が存在せず、ほかの土層も土色・土質がかなり異なっていたが、レベル的に対応させて土層番号を付けた。

3層は2層の堤防盛土の下で確認される床土で、10層の堤防盛土もしくは2と10層の間でより東側に存在した堤防盛土が対応する。

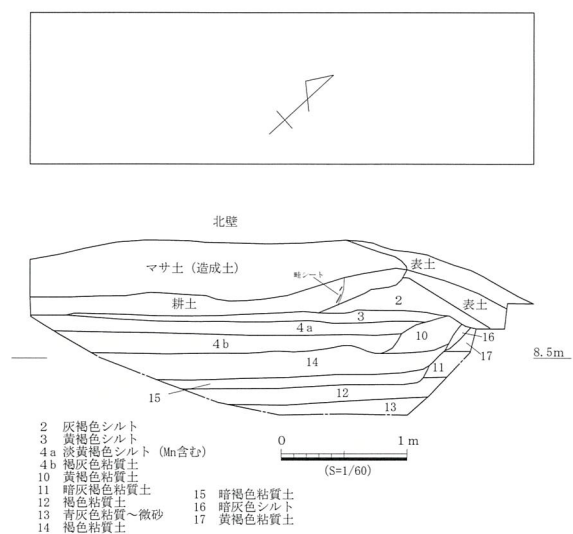
4層はaとb層に細分され、10層の堤防盛土が対応する。



第36図版 トレンチ3（南東から）



第37図版 出土遺物（12・13層）



第44図 トレンチ4 平・断面図

14層の水田は16・17層の堤防盛土に対応する。

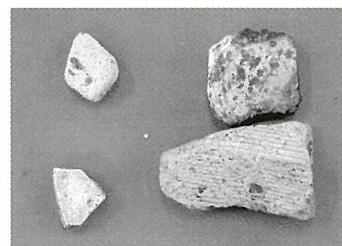
15層の水田は11層に対応する。

12・13層はシルトと微砂である。

トレンチ3では12層も微砂になることから12層が13層で、13層がそれ以下の土層とも考えられる。



第38図版 トレンチ4 (南東より)

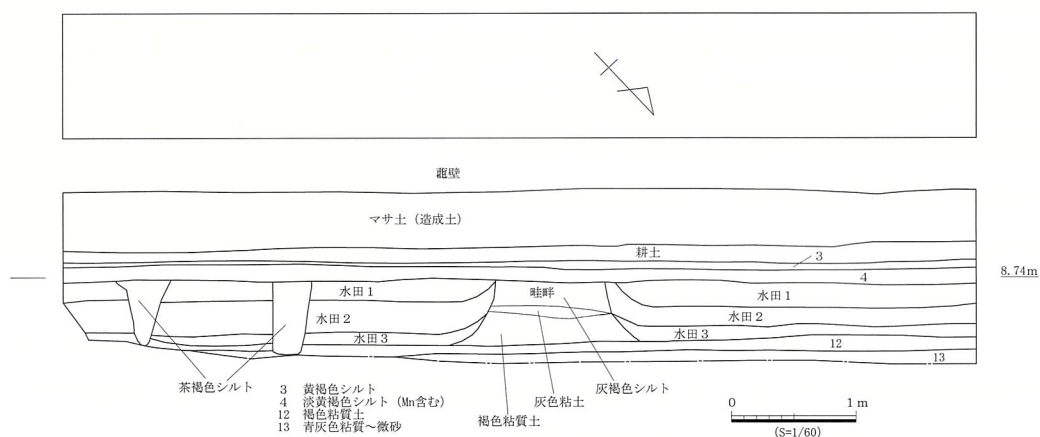


第39図版 出土遺物

出土した遺物は、土師器と土師質土器で、いずれも細片にすぎない。4b・14・15・12層からの出土である。

右岸のトレンチ3・4でも層位的に水田層が検出されているが、左岸のように重層的でなく、東西に移動した状況となっており、右岸の川岸が安定していなかったことが想定できよう。

トレンチ5は、トレンチ4の南壁から南に向かって設定した。トレンチ1～4の東西方向に対して、南北方向となる。



第45図 トレンチ5 平・断面図



第40図版 トレンチ5
(左：北より，右：東より)



造成土の 마사土, 現代耕土の下に, 3層の床土, 4層(4a層)が認められ, その下に畦畔を1条検出した。

畦畔は, 断面計測で, 上辺幅が0.865m, 下辺幅が1.53m, 高さ0.526mを測る。対面の東壁が堤防盛土になっており, トレンチ幅内で畦畔が終了したことから走行方向は確認できなかった。しかし, これまでの調査で検出した畦畔と同等の規模であり, ほかに断面計測で下辺幅3mの大畦畔も検出されていることから, 通常の畦畔となる。

畦畔は3層の土層で形成されており, 中層に粘土を使用している。

この畦畔にともなって, 3層の水田層を検出することができた。いずれも茶褐色化している。水田1は上部を削平されており, さらに畦畔の高まりがつづくものである。

また, 水田1の上面から掘り込まれた柱穴を2ヵ所で検出できた。柱穴は断面計測で幅0.3~0.4m前後, 深さ0.5~0.6m前後である。芯々間は約1.15mである。

畦畔の下層は12層の粘質土をはさみ, 13層の青灰色粘質~微砂となって, 湿地状態となる。遺物は出土しなかった。

まとめ 確認調査によって, 左岸側の金井戸遺跡, 右岸側の総社遺跡, とともに複数の水田層と堤防盛土が検出できた。とくにトレンチ5では畦畔と柱穴が検出された。

層的に確認された水田は, 左岸側では重層的に, 右岸側では堤防盛土が東西に動くことで水田もあわせて変動していることが確認できた。

さらに, トレンチ5の南北方向の断面観察によって, 東西方向の畦畔が1条検出され, この畦畔によって水田1~3の継続した水田形成が行われていたことが分かった。しかし, 4層において畦畔と水田1が削平されていること, 水田1上面で柱穴が検出されることから, 4層の形成段階で畦畔位置の継続は終了し, 大規模に畦畔区割りの変更が実施されたことを示している。

出土した遺物からは, 水田形成が中世にさかのぼる可能性が推測される。

今年度の工事では河川内になる範囲が現況の河川位置と大差がなく, 消滅する範囲がわずかであった。その大部分にトレンチ3~5を設定したことで発掘調査できる範囲はわずかであった。また, 調査の結果から, 水田層と畦畔, 柱穴, 出土した遺物も少量であることから, 発掘調査を実施する必要はないものと判断した。

次年度は橋梁の設置工事であるが, それ以降も事業継続されるため, 確認調査を予定している。最終年度において検討, 報告まとめて行いたい。(前角)

註1 「国府川改修工事に伴う発掘調査」(1)~(5)『総社市埋蔵文化財調査年報』15~19 総社市教育委員会 2007~2010年

註2 「御所遺跡確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報23』総社市教育委員会 2014年

註3 「国府川改修に伴う試掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報25』総社市教育委員会 2016年

註4 「国府川改修に伴う金井戸地内の試掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報26』総社市教育委員会 2016年

註5 『総社遺跡 金井戸遺跡 北溝手遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告209』岡山県教育委員会 2007年

藤原北古墳群試掘調査

遺跡名 藤原北古墳群

所在地 総社市久代藤原地内

調査期間 2017年1月25～26日

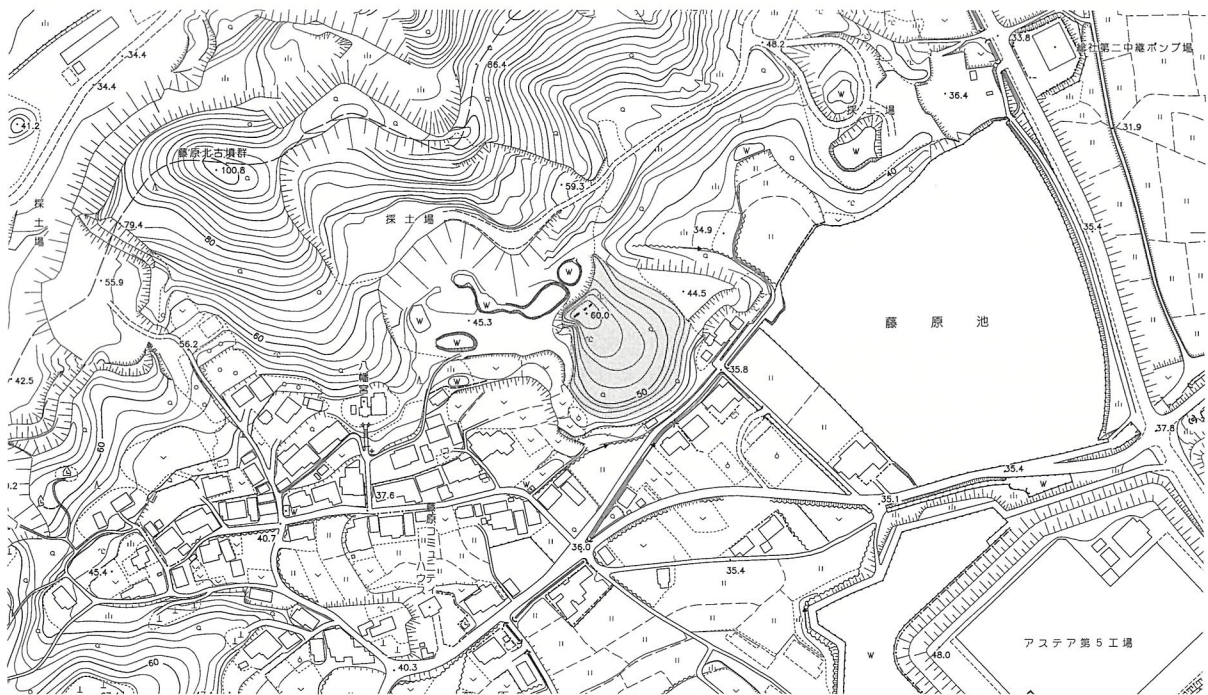
調査面積 約10㎡

調査概要

調査地は、総社市域西半の高梁川西岸の丘陵中にあり、高梁川の支流である新本川の南岸に位置する藤原北古墳群の所在する丘陵から南に派出する小丘陵である。藤原北古墳群では、1991年に採土事業に伴って1・2号墳の発掘調査が行われ、6世紀後半と7世紀中頃の横穴式石室が調査されている。また、調査地の南側では水島機械金属工業団地協同組合西団地の造成に伴って発掘調査が行われ、多くの古墳群・集落遺跡群・製鉄遺跡群の調査が行われている。ここで採土が計画されたため試掘調査を実施した。

調査地の山形は播鉢を伏せたような、上面が平坦になっていた。上面の平坦面には石柱や石灯籠が残されており、かつて金比羅様が祭られていたことがうかがわれた。確認調査は、小丘陵上の平坦面に手掘りで三ヶ所トレンチを掘削して行った。その結果、土層の堆積状況は、腐葉土層～表土層と堆積しており、その下の基盤層は花崗岩風化土層であった。この花崗岩風化土層は平坦面になっており、丘陵の頂部は削平が行われていることが判明した。おそらく金比羅様をお祭りした際に削平が行われたものと推定された。以前の遺跡の分布調査報告書では、調査地中央付近に古墳の分布が示されているが、確認できなかった。これらのことから本調査地に遺構が残存している可能性は低いと考えられた。

(高橋進一)



第46図 調査地位置図 (S=1/5,000)

個人住宅建設に伴う宿寺山古墳の確認調査

所在地 総社市宿594-1

調査期間 平成29年1月30日

調査経緯

総社市宿所在の宿寺山古墳に近接する宅地において個人住宅の建設が計画されました。宿寺山古墳は墳頂約116mの大型前方後円墳で、墳丘周辺の字や地形等から周濠をもつ可能性が指摘されています^{註1}。計画地はその周濠の推定範囲にあたる所です。周辺は古くから宅地化が進み、周濠に関する情報が無かったため、事前の確認調査を実施しました。

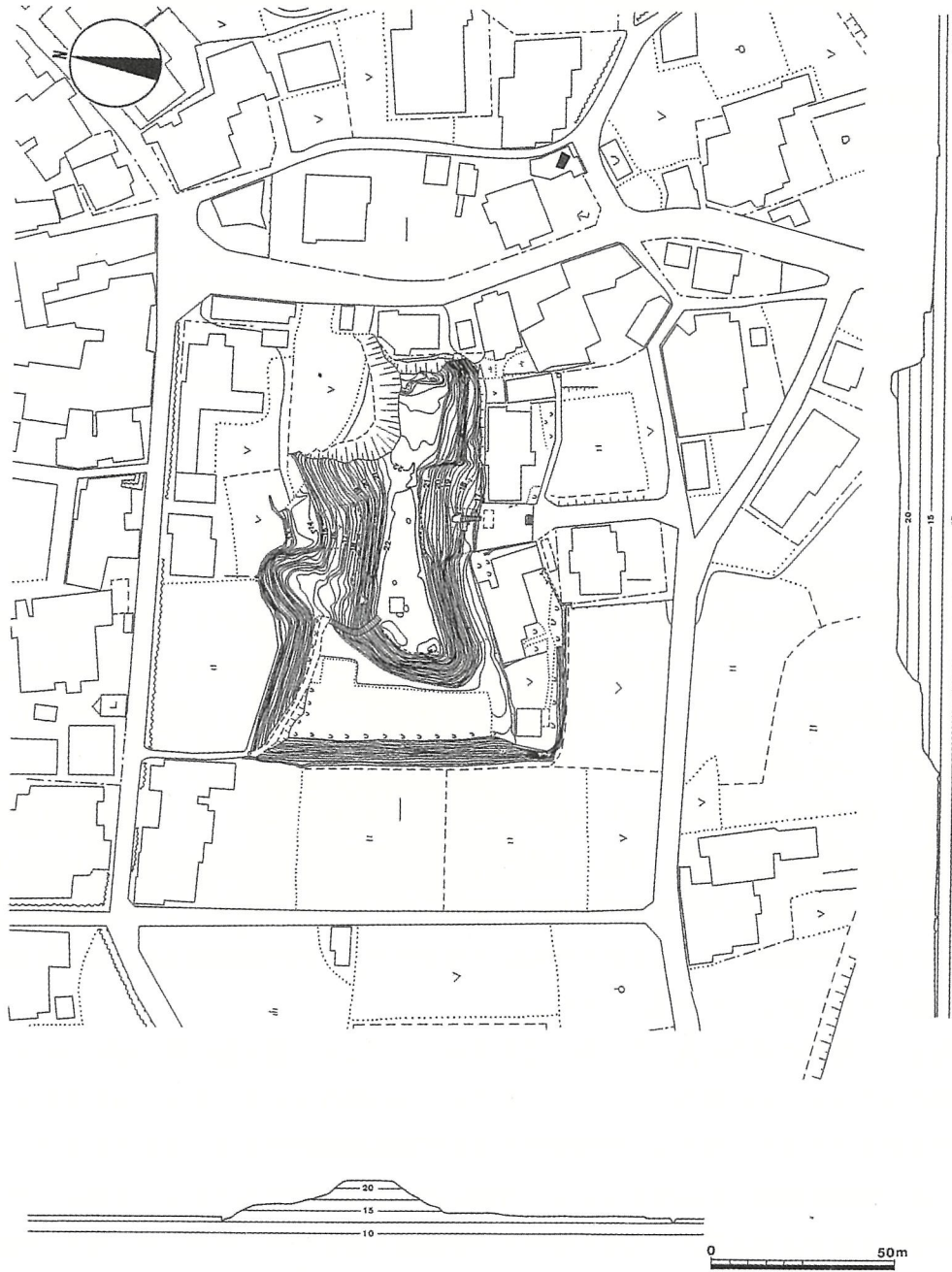
調査概要

計画地は宿寺山古墳の後円部南東側にあり、推定される盾形周濠が大きくカーブを描く部分にあたります。計画地の北西側を調査した場合、推定される周濠の深部を掘ることになり、確認調査の効果は薄いと考えられました。一方、計画地南東端部分を調査した場合、推定される周濠掘り形の肩や、底面レベルが上がってくる部分を検出できる可能性があり、小範囲でもより調査の効果が高いと考え、南東端部分にトレンチを設定しました。

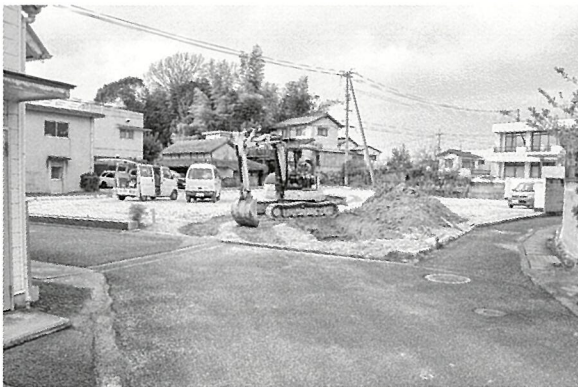
調査の結果、最上層には盛土が70cm以上にわたって厚く堆積しており、以下は暗渠による攪乱や客土の下位堆積層と考えられる砂層、青灰から灰色のグライ化した粘土の順で堆積していました。トレンチ北東側では、最下層の粘土から遺構が掘り込まれている状況が認められました。遺物が全く出土していないため、この遺構が掘り込まれた時期は不明ですが、市内で通常検出されるより遺構の基盤層がかなり深い位置にあることが確認できました。

今回目的とした周濠の傾斜や掘り形は検出できませんでしたが、最下層の粘土層について、①基盤層として利用されるレベルが相当に低いこと、②グライ化の進行から常に水分に満たされたような環境にあったと推定されること等から、周濠埋土である可能性も想定できると考えています。もしそうであるならば、周濠の肩は、計画地からさらに外側に広がる可能性があります。今回は、湧水や、その後住宅が建つことなどを考慮し、更なる掘り下げは断念しましたが、今後も周辺地での埋蔵文化財事前審査については、周濠の存在を意識した対応が必要になると考えられます。(村田)

註1 葛原克人「宿寺山古墳」『山手村史』史料編 2003年



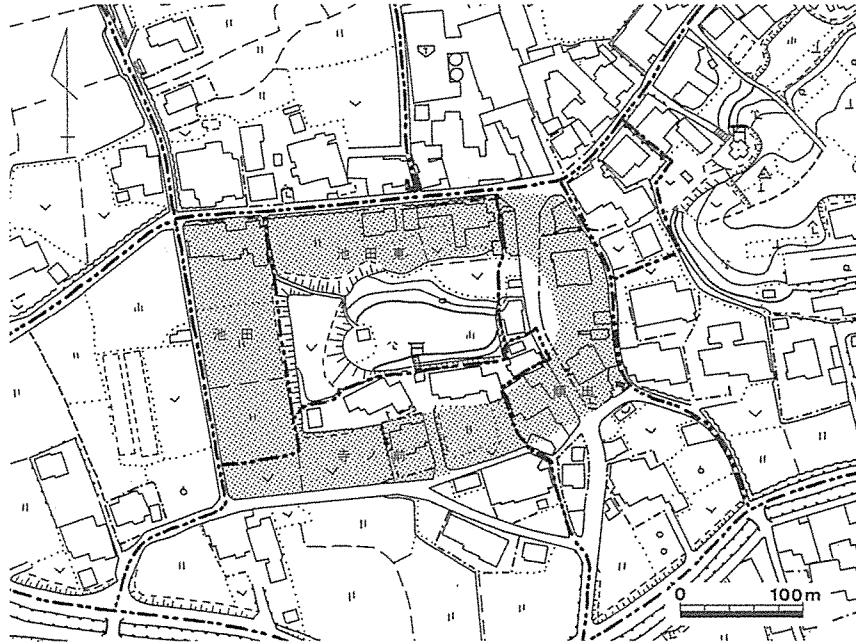
第47図 調査地位置図 (S=1/200)



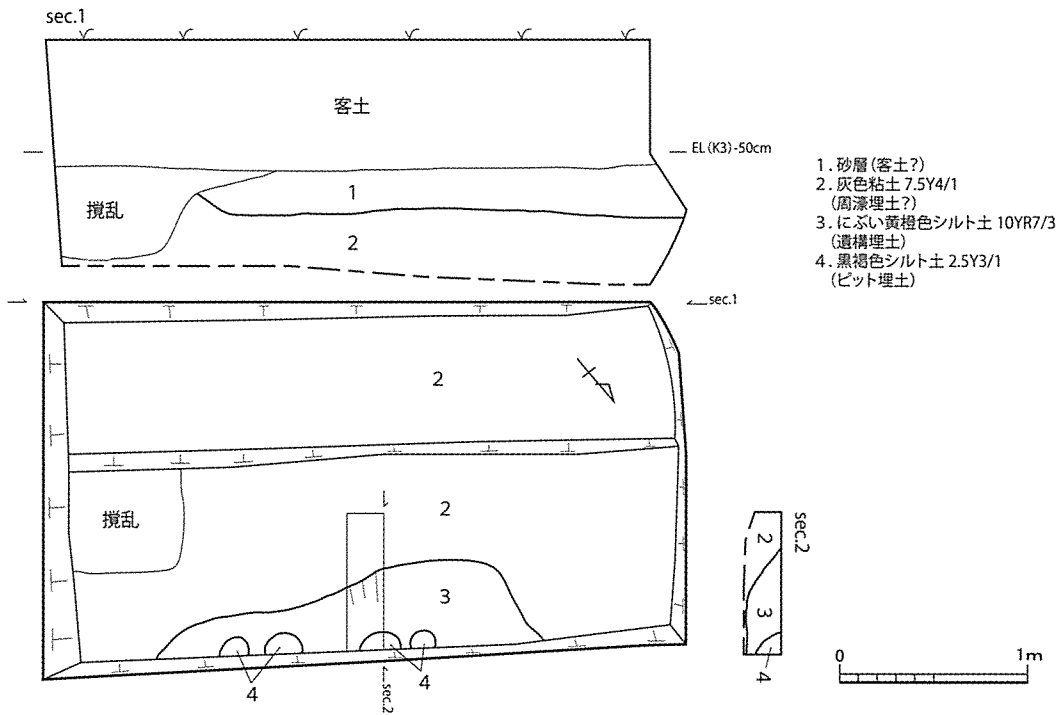
第41図版 1 宿寺山古墳と調査地 全景



第42図版 2 トレンチ掘削状況



第48図 周溝推定図 (S=1/600)



第49図 トレンチ実測図 (S=1/40)

大文字遺跡地内の個人住宅造成にともなう立会調査

所在地 総社市南溝手446-1ほか

調査期間 平成29 (2017) 年2月13・15日

調査概要

調査地は、昨年度に確認調査を実施した個人住宅地の南側に接する。先の調査では微高地の土層と異なる砂系の強い土層で、遺構は土坑が1基、出土した遺物もわずかであった。調査結果より、微高地の中心は北東側で、南側は旧河道に向かう低位部と推測した(註)。

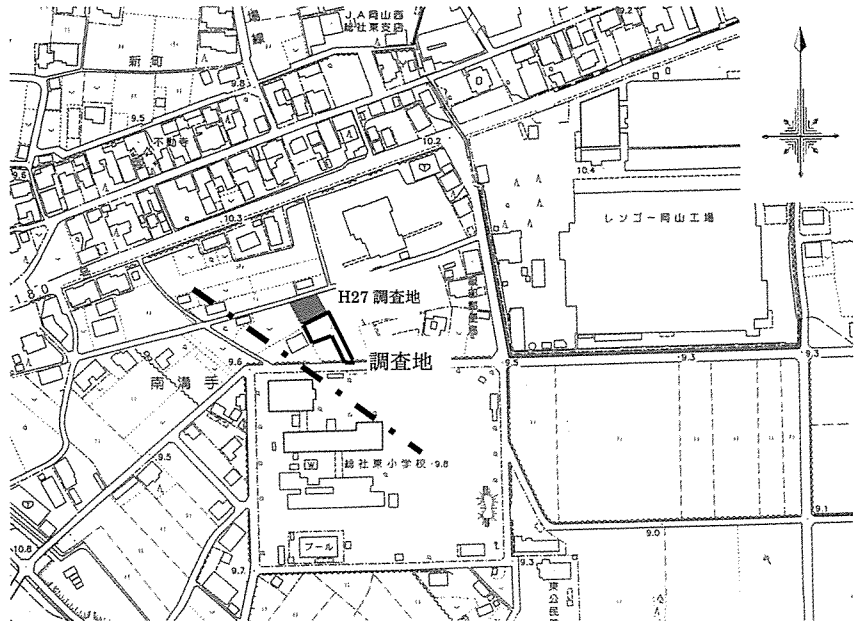
この点から今回の開発の対応は立会調査とした。

東側の擁壁は、現地面より50~60cmの掘削となり、掘削底面で土層の相違と3か所の土器集中部を確認することができた。

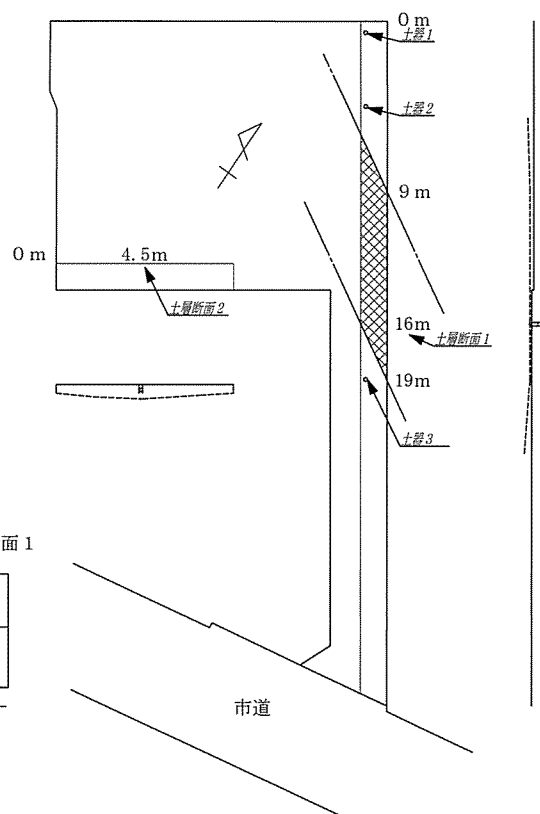
16m地点で土層断面図を作成した。東擁壁のほぼ中央部にあたる。耕土の下に3層の土層を確認した。5層が礫層で基盤層と判断し、4層もかなりの礫が混入している。この4層は9~19mの範囲でのみ検出され、北西から南東方向に広がり、北東側と南西側へは下降している。

4層が下降する範囲では3層の堆積が認められ、北東側で2か所、南西側で1か所の土器集中部を検出した。いずれも弥生土器で、弥生時代中期終わりの土器である。

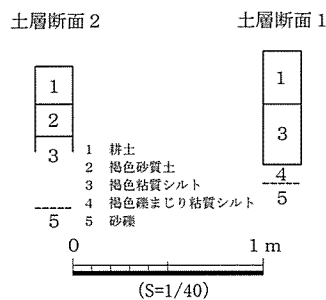
南側の擁壁では土層断面2を作成した。5層の礫層は断面1より13cm低い位置で確認された。この基盤層が南西に向



第50図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第52図 調査地位置図 (S=1/400)



第51図 土層模式図

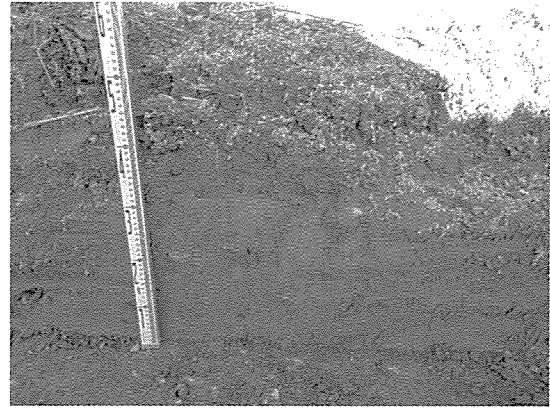
かって下降していることから3層も同様に下降しており、その上に2層の堆積層が新たに確認できた。東側の擁壁では存在していないことから削平されたと考えられる。

遺物は弥生土器である。弥生時代中期終わりのほかに、後期はじめの土器も出土している。

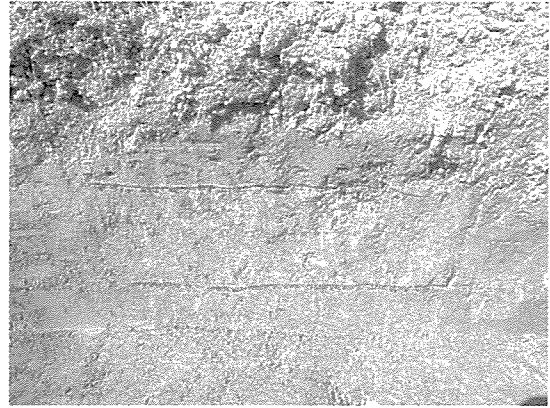
昨年度の立会・確認調査の検討から旧河道の境界線を推定した（第50図の一点破線）。この境界線のすぐ東側はシルト層で、距離を開けるほどに微高地の土層へと移る。

今回の調査地においても礫層の北東と南西では同

一の3層であるものの、南西側ではより砂系が強くなっていた。この境界線の位置関係から微高地の中心は想定どおり、北東に存在するものと考えている。 (前角)



第43図版 左：調査状況（南から） 右：土層断面1（南から）



第44図版 左：調査状況（東から） 右：土層断面2（南から）

註 「個人住宅造成に伴う大文字遺跡の確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報26』2017年3月

事務所併用住宅建設に伴う荒神ヶ市遺跡の確認調査

所在地 総社市駅前二丁目16-104

調査期間 平成29年2月28日

調査経緯

総社市街地内の宅地において事務所併用住宅の建設が計画されました。過去に計画地の南方約60m地点で行われた試掘調査において、耕土面下30cm程のレベルで遺構・遺物が検出されていたため^{註1}、計画地でも事前に確認調査を実施しました。

調査概要

地盤改良杭の影響を受ける建物予定地の範囲内に、トレンチを2箇所設定して調査しました。西側のT-1及び東側のT-2ともに、厚い客土マサ土の下に、耕作土、旧水田層とその下位にマンガン沈殿層、その直下が基盤層という堆積でした。基盤層において、遺構の平・断面検出を試みましたが、土器細片が少量混じるのみで明確な遺構は検出されませんでした。そのため、建物予定地において、遺構が存在しないか、存在しても密度は低いことが想定されました。

過去の調査においては、調査地から北西方向、南西方向に伸びる細長い微高地上に集落が展開し、また、集落の中心地は調査地からみて東側になることが想定されています^{註1}。今回の調査結果から、当時想定されたとおり、少なくとも今回の調査地周辺（北側）に向かっては、遺構密度が低くなっていくことが考えられます。

(村田)

註1 前角和夫「共同住宅建設に伴う試掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』12 2003年

3. 発掘調査の概要

集合住宅建設に伴う発掘調査

遺跡名 真壁遺跡

所在地 総社市中央五丁目11番103号

調査期間 2017年3月1日～3月10日

調査面積 約350㎡

調査概要

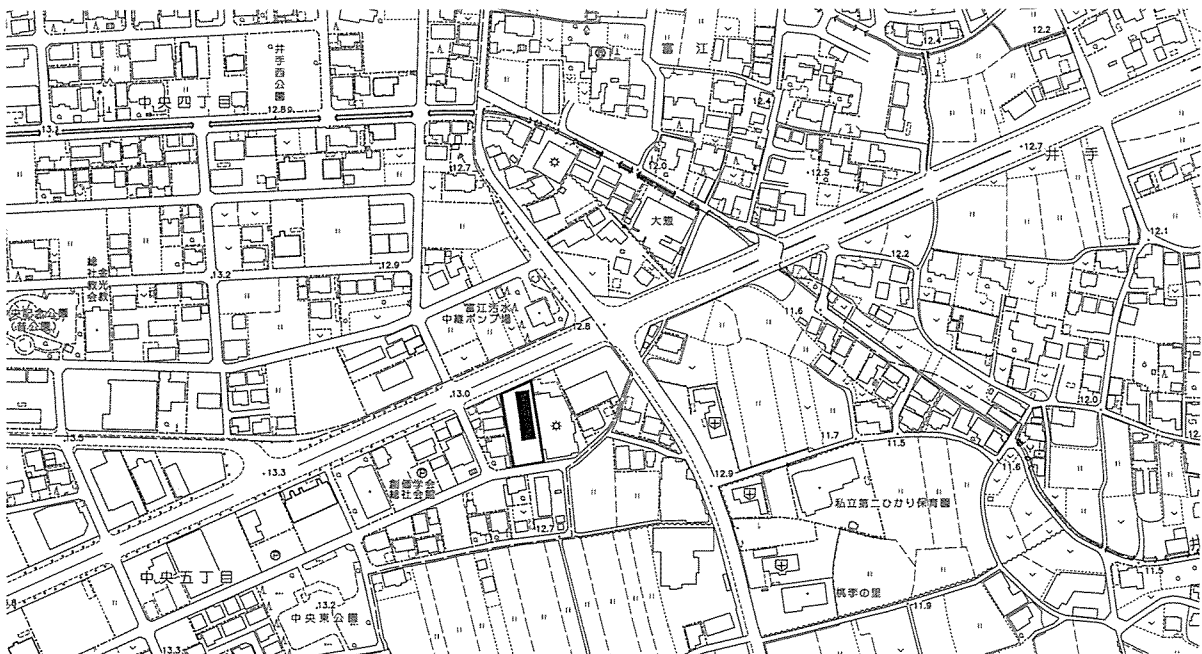
真壁遺跡は、1974年度からの県南広域都市計画事業として始められた中央土地区画整理事業に伴って遺跡が確認され、1980年から1982年まで発掘調査が実施されました。その結果、縄文時代の初めごろから弥生時代～古墳時代を通じて古代・中世までの長期間にわたる遺構の存続が確認されています。この時の調査で、今回の計画地のすぐ北側は集落内と推定され、溝や住居址・柱穴などが検出されています。

今回の調査は、当該地に集合住宅の建設が計画されたため、試掘調査を実施したところ微高地と遺構の存在が確認されたため、発掘調査を実施しました。

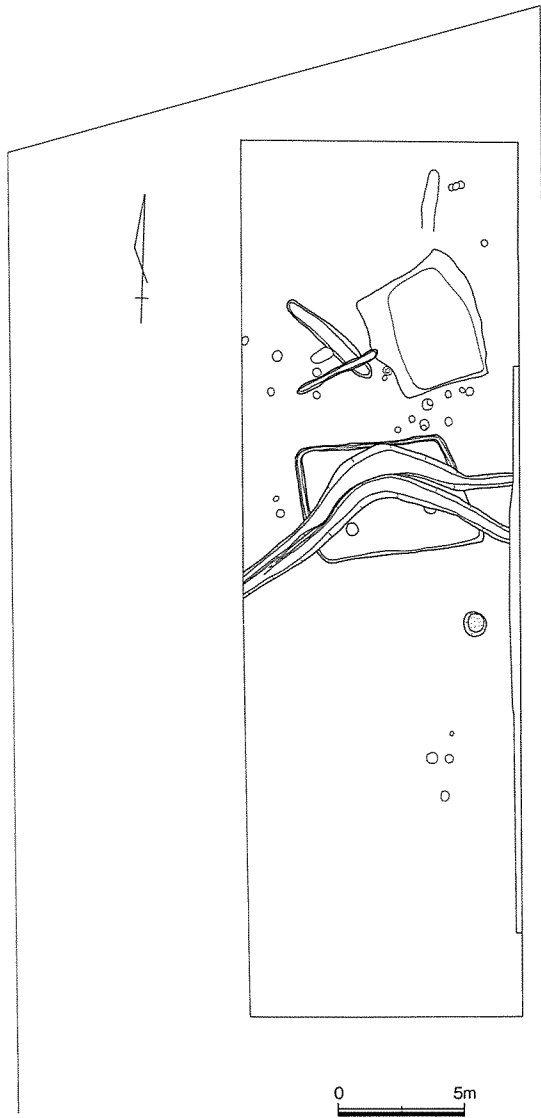
発掘調査の結果、溝2・方形の住居址1・時期不明の溝状遺構・焼土塊1・柱穴多数が検出されました。このうち溝1と溝2は切り合うように流れたのち分離しています。いずれも古墳時代初頭のものと考えられます。住居址は、出土した遺物や、住居址を切る溝の存在から古墳時代前期末～中期のものと考えられます。柱穴は建物を構成していると考えられますが、範囲が狭いこともあり、建物の特定にはいたっていません。焼土塊は内面が熱を受けて硬化しており、床面に炭化物が堆積していたことから炭を焼くために使われていた炭窯と推定されます。出土した須恵器から古墳時代後期のものと考えられます。

以上の調査結果から、今回の調査地は真壁遺跡内の安定した微高地上に営まれた集落の一角であった事が判明しました。

(高橋)



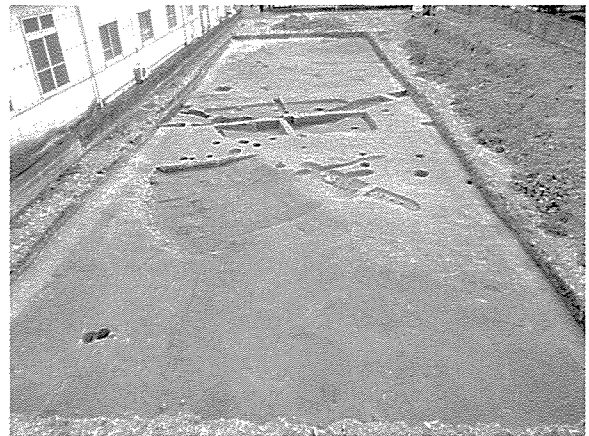
第53図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第54図 遺構配置図 (S=1/300)



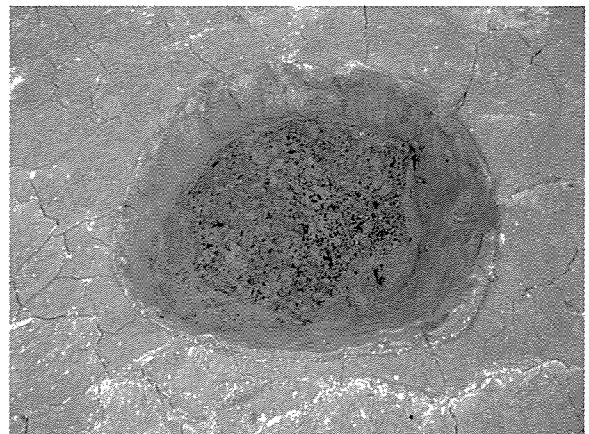
第45図版 調査前 (北から)



第46図版 遺構完掘状況 (北から)



第47図版 住居址完掘状況 (南から)



第48図版 焼土壌 (製炭窯) 完掘 (西から)

土砂採取事業にともなう狩谷遺跡群の発掘調査2

調査地 総社市久代2219番ほか

調査日 平成28（2016）年4月18日～平成29（2017）年1月20日

調査にいたる経緯

狩谷遺跡群は総社市西部，新本川流域北岸の丘陵地上に立地している。

平成14年度には県営ほ場整備事業にともなって南に派生する低丘陵の先端部西側斜面で弥生時代・古墳時代・古代～中世にわたる集落遺跡の発掘調査を実施した（註1）。平成22年度には土砂採取事業が計画され，確認調査を実施するとともに進入路および当面の土砂採取を可能にするための発掘調査等を実施し，新たに尾根線上で弥生時代の集落遺跡と古墳群の存在を確認した（註2）。そして本格的な事業の開始にあわせるため，平成24年度には本調査地より南に派生する丘陵上において平成22年度に確認した弥生集落と古墳群の発掘調査を実施した（註3）。

そして，事業範囲の拡大にともなって今回の調査が実施されることになった。

平成22年度の調査で確認できた古墳は4基であったが，平成24年度の調査では古墳を3基，新たに土壙墓群5基を調査し，多量の玉類と青銅製品や鉄製器が副葬されていたほか，弥生時代の集落も調査した（註3）。

今回の調査地は，これまでの低丘陵より高く，標高90～100mの丘陵上に位置する。

周知遺跡は存在しておらず，平成22年度の確認調査で4基の古墳以外にも連なった古墳の存在を報告しているが，平成24年度に調査した古墳は3基で，比高差のほとんどない低丘陵上に立地しており，これより以北は急傾斜地になっている。さらに南北方向の低丘陵から，東西方向の尾根線へと変わることからも，連続する古墳の選地はできなかったものと考えている。



第55図 調査地位置図 (S=1/10,000)



第49図版 調査地近景（南から）

伐採前・後の踏査で古墳状の高まりや周溝状の堀切を確認したものの、確信は持てなかった。しかし、特殊器台を含む弥生土器片を採集したことや、伐採の片付けで尾根線上に石材を認めたことなどから、弥生時代の墳墓群、箱式石棺、古墳、横穴式石室墳の存在が予想できた。

4号墳 急傾斜地となっているものの、わずかに東側からの谷状地形を認めることができ、西側で短く南へ張り出す地形となっている。この谷の進行方向にあわせて山頂に向かう山道が残り、わずかな張り出しに沿っては幅広の窪み、さらに張り出しの前面には浅い窪みが確認できた。急傾斜地であり、山崩れの可能性もあったが、横穴式石室墳とした直観が第一にあった。

調査開始において前側の窪みの奥に石材の一部が露出していることを確認した。調査の結果、天井石を1枚残していた横穴式石室墳になることが分かった。

奥壁は1石、側石は2石を基本とし、面を整えた大型石材を用いている。玄室の床面は石敷きで、羨道部の床面は土床とする。

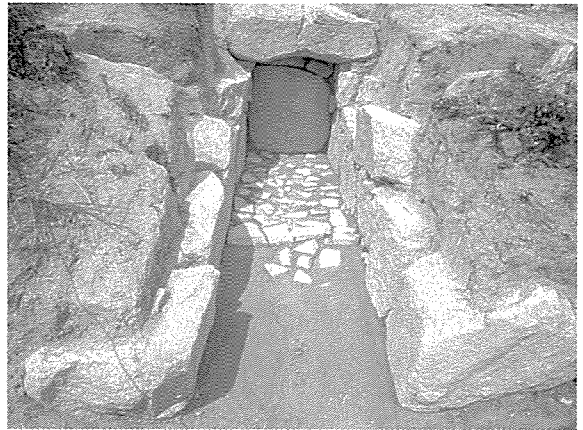
南面東側には外護列石を築き、墳形は周溝や墳端の形状より方墳になる。

遺物は中世の再利用などによって鉄釘以外の副葬品はごくわずかであったが、畿内産土師器が出土したことから、終末期の横穴式石室墳と考えている。

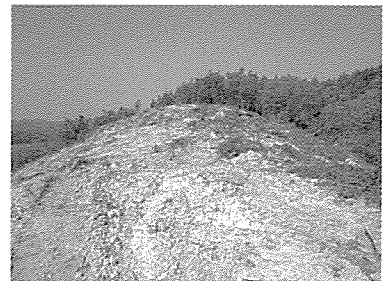
5号墳 瘦せた尾根線上に立地し、西側では丘陵切断の堀切を確認した。しかし、東側においては明瞭な周溝を確認することができず、わずかな段を観察し



第50図版 4号墳調査前（東から）



第51図版 4号墳の石室（南から）



第52図版 5号墳調査前 左：(南から) 右：(東から)



第53図版 5号墳調査後（南から）

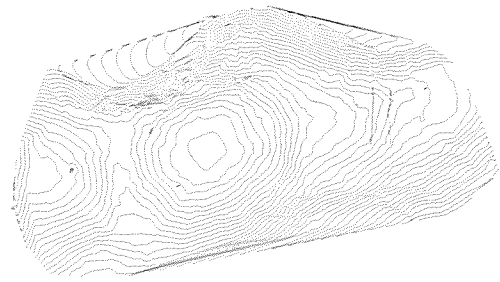
たのみである。この段の位置は東の墳端より約10 mの距離があり、この間が低く方形にとらえられたことから帆立貝式古墳の可能性があった。

しかし、調査の結果、東側にも周溝が認められ、当初の段は新たに発見された6号墳の周溝となることが確認できた。

古墳は、東西約18m、南北約15mの楕円形となる円墳である。

墳丘の高さは、西側盛土端から約0.8m、東周溝底から約1.8m、東側盛土端から約0.7m、西周溝底から約2 mを測る。

主体部は箱式石棺で、現況の墳頂から-0.4mの位置に蓋石が置かれ、盗掘痕跡も確認できなかったことから、未盗掘であった。墓壙は約2.3×約1.3mの楕円形で、6枚の蓋石で石棺を築く。埋葬方位は東西で、平面形態は長方形でなく、胴張りになる舟形に近い。側石や小口も東側が幅広く、西側が狭い。東側が頭位となる。内法で約1.8×0.37～0.2m、高さ約0.3mを測る。石棺内には赤色顔料が明瞭に残存していた。



第56図 5・6号墳 地形測量図
(未補正, S=1/1,000)



第54図版 5号墳 主体部(西から) 左:蓋石状況 中:石棺内の状況 右:蓋石除去後

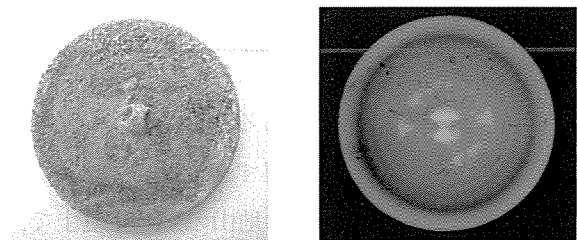
石棺内への土砂流入はほとんどなかった。人骨の残存状況はあまりよくなかったが、頭骨の半分と大腿骨の一部が残っていた。

副葬品は、頭部に小型仿製鏡と曲がり刀子、腰部に針状の鉄製品がそれぞれ1点ずつ納められていた。

鏡は、レントゲン撮影から二神二獣鏡である。

なお、埋葬主体は墳丘の中心位置になく、北西に片寄って築かれている。墳丘盛土の観察より、最初の埋葬にあわせて約9 mの墳丘を築き、その後、次の埋葬を行うために南東方向へ墳丘を広げたものと考えた。次の埋葬主体として土壙墓を検出しているが、副葬品はなく、掘り込みや埋土も墳丘盛土に酷似することから誤認として埋葬を行った痕跡がなかった可能性も考えられる。

墳丘も含めて土器は出土していない。古墳の築



第55図版 出土鏡



第56図版 6号墳 掘り上がり(東から)

造は5世紀前半と考えている。

6号墳 伐採後の片付けによって、尾根頂部で石材の一部が露出した。5号墳東側の段のすぐ東である。5号墳の調査前に確認した段は6号墳の周溝になることも分かった。

直径約6mの円墳であるが、墳丘の残りは悪く、墳丘盛土はわずか10cmに過ぎなかった。

埋葬主体は箱式石棺で、方位は南北である。蓋石は4枚であるが、1枚は動かされていた。側石も1枚が内側に倒れ、北の小口石も少し動いていた。

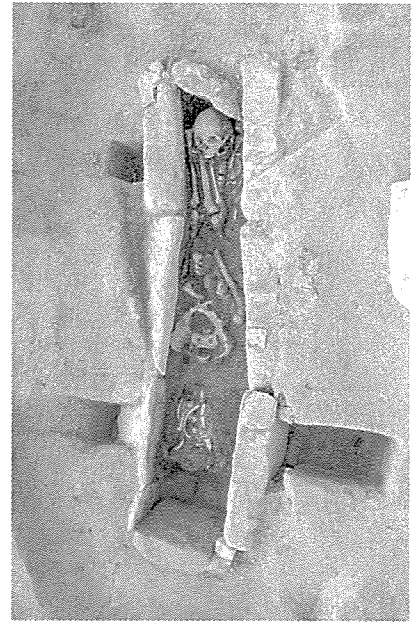
棺内には保存状態の良い人骨が残っていた。しかも、内法が約1.6m×約0.35m、高さ約0.25mと小形にもかかわらず2体の埋葬を行っていた。最初の埋葬では頭位を北に置き、続く埋葬では南に置いていた。いずれも残りは良好であったが、東南端の側石が棺内に倒れ込んだため、この範囲での残存状況は悪かった。しかし、南頭位の人骨の頸椎から頭蓋骨がまったく残っていなかった。頭部を切断した遺体を埋葬したものと考えている。

遺物の出土はなかったが、5世紀後半ごろの築造と推測している。

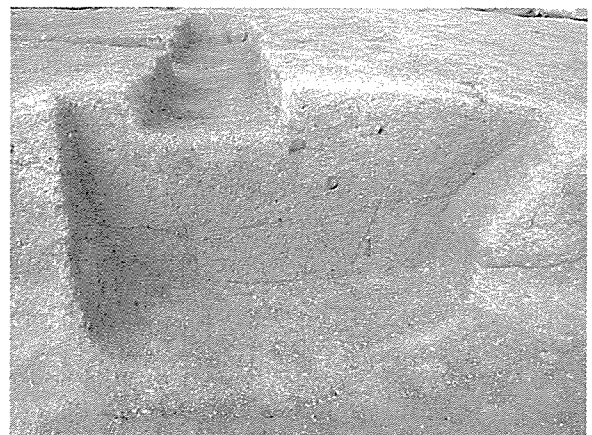
狩谷遺跡 遺跡は分布調査等により、特殊器台を含む弥生土器や土師器が採集され、その立地から墳墓の存在が類推でき、また掘削断面においても土壙墓の痕跡が確認できた。

調査の結果、調査区の西端部で土壙墓群が検出された。土壙墓は長さ約2.4～0.8m、幅約1.0～0.5m、深さ約0.7～0.25mの隅丸長方形で、その規模から大人用と子ども用が認められる。また、南北に方位をとるものと、東西に方位をとるものがある。また、棺痕跡をもつものも確認でき、一對の枕石を置いているものが多かった。

遺構にともなって出土した遺物はほとんどなく、土器棺に使用した土師器を除いては、包含層あるいは堆積土からの出土である。埋葬後、すぐに尾根部の土砂流出がはじまったと判断でき、南側斜面の裾部近くまで土器を採集することができた。とくに土壙墓群から南側の斜面地で、特殊器台を採集しており、その出土層位は地山のマサ土直上で、その上に1m以上の斜面堆積土があった。

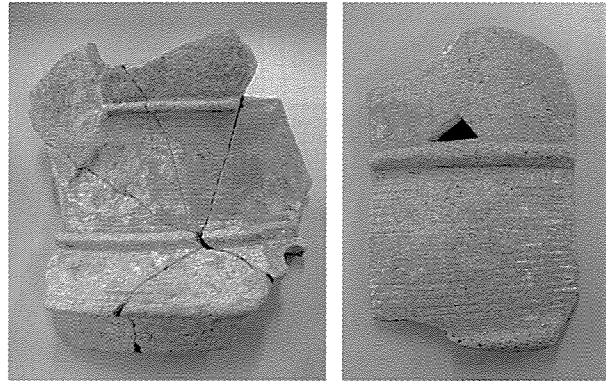


第57図版 6号墳 人骨(南から)



第58図版 狩谷遺跡 土壙墓群 左：(西から) 右：土層断面(南から)

まとめ 拡張された土砂採取範囲内からは、古墳が3基と墳墓群の存在が確認できた。比高差のある尾根上にあったことから、弥生時代終末から古墳時代初頭の墳墓群、続いて古墳時代中期前半の円墳、中期後半の低墳丘の箱式石棺墳、古墳時代終末期の横穴式石室墳と、継続的ではないものの、長期にわたって墓域としていたことが判明した。



第59図版 狩谷遺跡 表採遺物

特殊器台が出土したものの、今回の調査範囲において墳墓は検出できていない。尾根線が西側に向かって登っており、墳頂部も認められることから今回の調査地の西側丘陵上に存在すると考えている。 (前角)

註1 「山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(7)」『総社市埋蔵文化財調査報告書13』2004年

註2 「土砂採取事業に伴う確認調査」『総社市埋蔵文化財調査報告書21』2012年

註3 「狩谷遺跡・狩谷古墳群発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査報告書24』2014年

総社小学校新校舎建設に伴う発掘調査

遺跡名 諸上遺跡

所在地 総社市総社三丁目13-1

調査期間 2016年7月21日～8月24日

調査面積 約900㎡

調査概要

総社小学校の校舎が老朽化と、耐震基準を満たさないため建て替えが必要となったが、校舎は現在も使用中のため、現在の運動場にまず校舎を新築した後に現在の校舎を撤去する計画となった。総社小学校では、1998年度に今回の調査地の北東のプール建設の際に発掘調査が実施されている。その時の発掘調査では、13世紀末葉～14世紀前半と考えられる土壙・柱穴のほか奈良時代と推定される大溝・溝が検出されている。

発掘調査は夏休み期間中を利用し、校舎予定地の西半分の調査を行った。校庭に敷いている真砂土を除去した直下から遺構検出面になっており、柱穴・溝・火葬墓等が検出された。なかでも地鎮と推定される土師器・須恵器を埋納した柱穴や、長頸壺を使用した火葬骨臓器は特筆される（第60図版）。またほぼ完形の鉄刀も出土している（第61図版）。

以上の調査結果から、今回の調査地は真壁遺跡内の安定した微高地上に営まれた集落の一角であった事が判明した。（高橋）



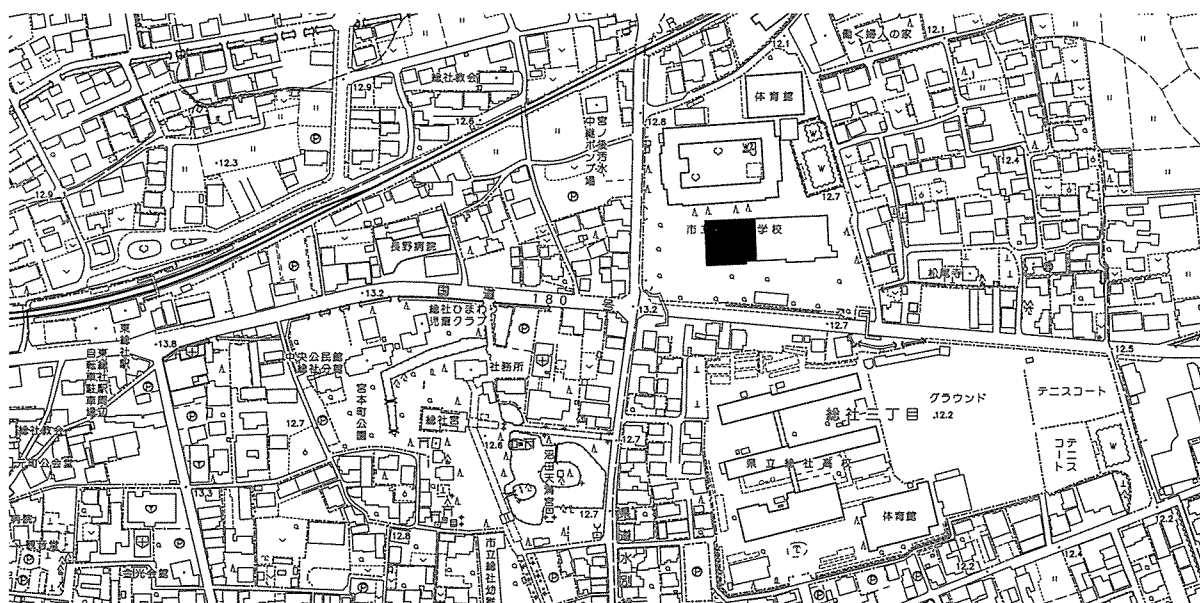
第60図版 火葬墓検出状況



第61図版 鉄刀出土状況



第62図版 遺構完掘状況



第57図 調査地位置図 (S=1/5,000)

4. 史跡整備事業の概要

平成28（2016）年度 鬼城山環境整備事業

整備内容

昨年度は、鬼城山ビジターセンターが開館して10年目を迎え、展示内容の大幅な変更を行った。これは開館以後に行われた岡山県教育委員会による城内の発掘調査の成果などを反映させたものであり、展示パネル修正のほか、新たに4枚の解説パネルを増設した。とくに「その後の鬼ノ城」とする項目を追加し、時間的空間的に視野を広げて深く鬼ノ城を理解していただけるように考えた。そして次の10年後に向け、さらなる調査研究を進めるべく基礎調査である分布調査を開始した。

今年度は、第3期環境整備事業の3年目に位置づけているが、平成12年度に策定した『史跡鬼城山（鬼ノ城）環境整備基本計画書』において想定し得なかった事業内容である復元版築土塁の修復について早急に検討・対処すべき状況になっていた。これは平成27・28年度に連続して復元版築土塁のき損が確認され、今後より加速度的に進むものと予測されたからでもある。さらに、第3期事業は第2期の整備未完了となる事業も引き継いで行うものの、主たる事業は学習施設や休養施設などであった。しかし、今後の整備事業として版築土塁の修復や、既存整備施設の維持管理・整備後の課題解決、あるいは整備・活用に反映させるためのさらなる調査研究が重要と考えたことから、円滑に第3期環境整備事業を進めるにあたり、基本計画書の改訂が必要であると判断した。

そこで、第2次基本計画書の策定を今年度の整備事業としたものである。

第2次基本計画書

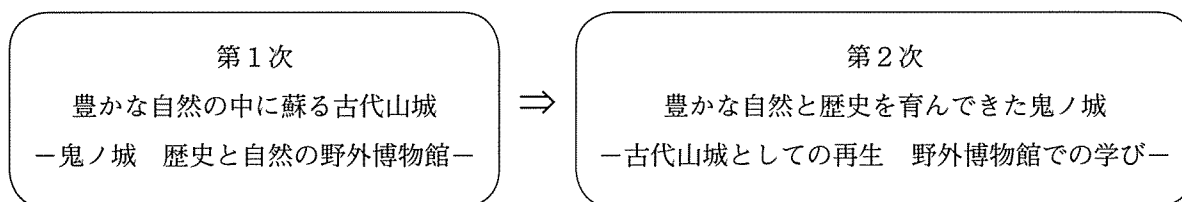
史跡鬼城山の環境整備は、平成12年度策定の基本計画書（以下、第1次基本計画書という。）において進められている。第1期が平成22年度まで、第2期が平成25年度までとし、引き続き第3期事業を実施している。第3期事業も基本的には第1次基本計画書にもとづいているものであるが、前述したように改訂を行うものである。よって、その基本理念・基本方針は継承するものの、さらに発展させたものとして位置づけをしなおし、新たな項目を追加している。

第2次基本計画書では、とくに、「史跡鬼城山の本質的価値」として、下記のようにまとめた。

史跡鬼城山、7世紀後半の東アジア情勢を語るうえで欠かすことのできない、重要な政治的・軍事的施設であり、わが国を代表する史跡として位置づけることができる。

史跡鬼城山は、規模壮大で強固な古代山城であり、保存状態もきわめて良好で、考古学、歴史学、建築学、土木工学など、学術的にも貴重な歴史的文化遺産である。

さらに基本理念についても、下記のように機能強化して、よりよい形で未来へ橋渡しすることを示した。



詳細については、それぞれの基本計画書に委ねるものの、それぞれの目次を以下に掲載し、変更となった点についてまとめておく。

第1次基本計画書 目次

- 序 計画立案の背景と計画の枠組
 - (1) 計画立案の背景
 - (2) 計画の枠組
- 1 鬼城山をとりまく環境
 - (1) 位置
 - (2) 自然環境
 - (3) 社会環境
 - (4) 歴史的環境
 - (5) 上位関連計画にみる総社市のまちづくりの方向
- 2 鬼城山の概要
 - (1) 史跡指定状況
 - (2) 鬼城山の概要
 - (3) 鬼城山及び周辺の現況
- 3 鬼城山の保存整備に向けて
 - (1) 鬼城山の位置づけ
 - (2) 鬼城山の位置づけからみた整備の方向性
 - (3) 整備に向けての課題と検討
- 4 鬼城山保存整備計画
 - (1) 基本理念
 - (2) 基本方針
 - (3) 地区区分と地区別整備方針
 - (4) 基盤整備計画
 - (5) 遺構保存整備計画
 - (6) 動線計画
 - (7) 活用上必要な施設整備計画
 - (8) 修景計画
 - (9) 活用計画
- 5 事業実施に向けて
 - (1) 事業年次計画
 - (2) 事業費概算
 - (3) 事業実施において配慮すべき事項

第2次基本計画書 目次

- 第1部 史跡の概要と「第1次基本計画書」の策定
 - 第1章 史跡の概要
 - 1 史跡鬼城山の概要
 - 2 史跡の指定
 - 3 史跡の指定区域
 - 第2章 「第1次基本計画書」策定にいたる経緯と目的
 - 1 計画策定の経緯
 - 2 計画策定の目的
 - 第3章 「第1次基本計画書」の成果と課題
 - 1 環境整備事業の成果と課題
 - 2 版築土塁の施工
 - 3 版築土塁のき損
- 第2部 「第2次基本計画書」の策定
 - 第1章 「第2次基本計画書」策定にいたる経緯と目的
 - 1 計画策定の経緯
 - 2 計画策定の目的
 - 第2章 保存整備の基本理念と基本方針
 - 1 史跡鬼城山の本質的価値
 - 2 基本理念
 - 3 基本方針
 - 第3章 計画の対象地区と事業期間
 - 1 地区区分と地区別整備方針
 - 2 事業期間
 - 3 野外博物館構想
 - 第4章 整備事業計画
 - 1 版築土塁の再修復整備
 - 2 版築土塁以外の再修復整備
 - 3 第3期環境整備事業と新たな整備事業
 - 第5章 維持管理計画
 - 1 高石垣の保存管理
 - 2 通常管理の強化
 - 第6章 調査研究計画
 - 1 城外の関連遺跡の調査
 - 2 城内調査
 - 3 城外調査
 - 第7章 年次計画と事業費概算
 - 1 年次計画
 - 2 事業費概算

第2次基本計画書においては、第1部で史跡の概要と第1次基本計画書の経緯・目的、そして第1・2期整備事業の成果と課題をまとめた。とくに版築土塁の施工と平成16年度の崩落・平成19年度の再修復、さらに平成24年度の剝落や平成27・28年度のき損の状況についてまとめている。

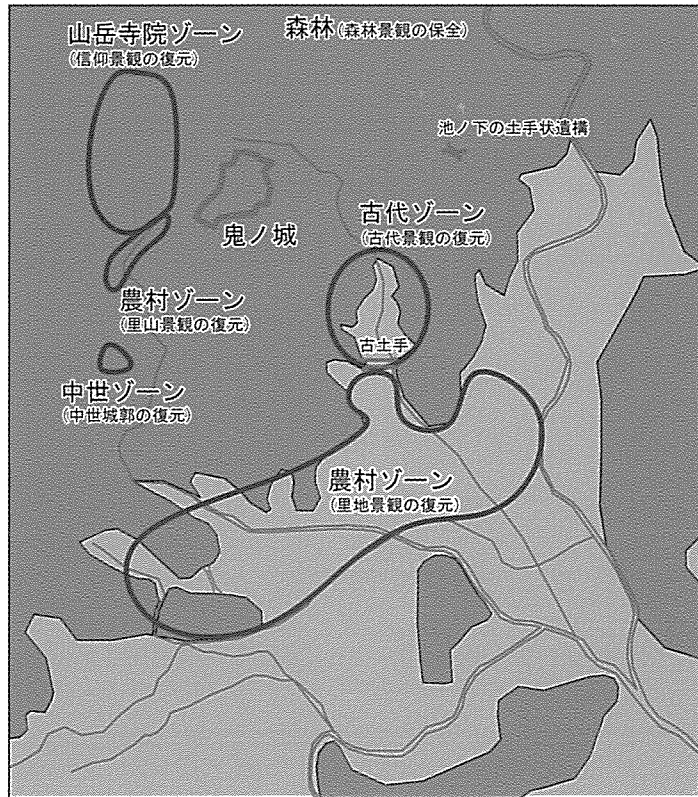
第2部は、第2次基本計画策定の経緯と目的、史跡鬼城山の本質的価値と、継承発展させた基本理念・基本方針を前段とし、より充実・強化させた目標を掲げ、鬼ノ城を含めた一帯を地域野外博物館とする構想について検討した。後段は、史跡鬼城山の保存と活用のために、整備事業・保存管理・調査研究が重要であると位置づけ、それぞれの計画についてまとめた。

整備事業では版築土塁の再整備が主要事業となるが、土塁以外の再整備も必要であり、関連施設・関連遺跡地区を追加設定して、周辺の整備も含めた視野を提示した。

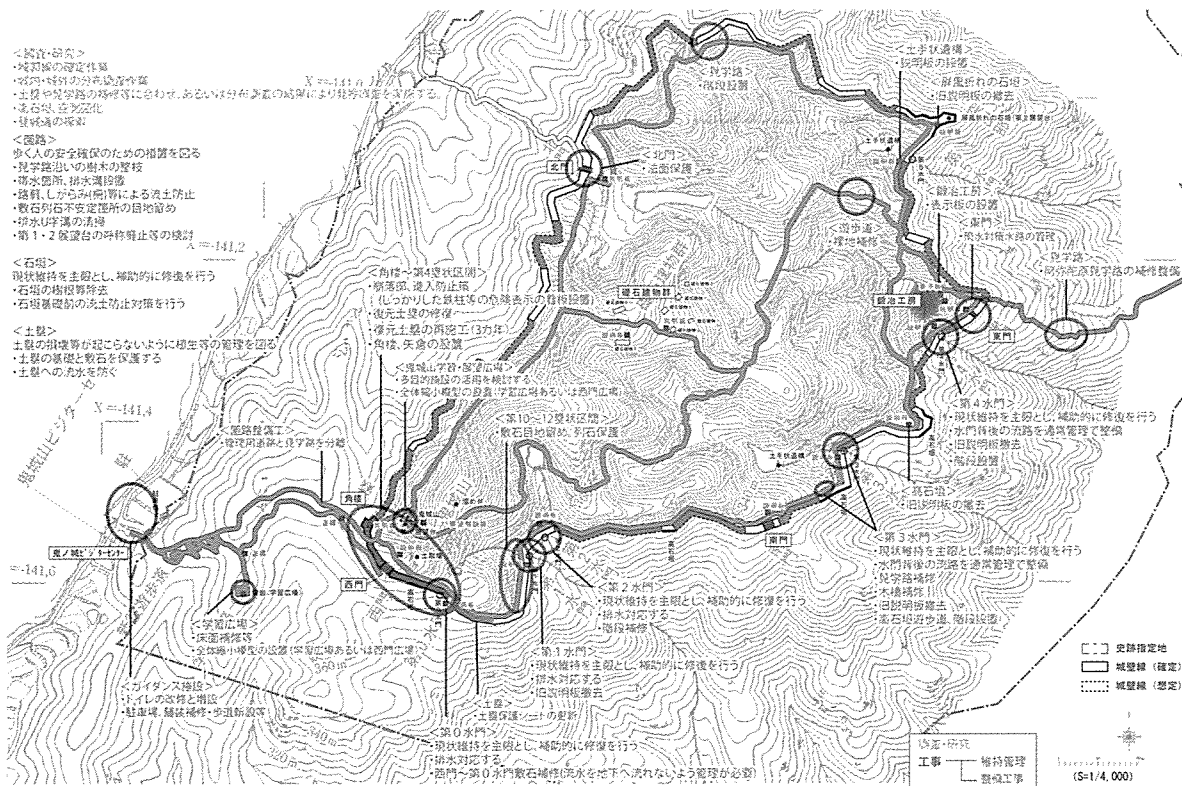
保存管理では高石垣の管理を重要課題とし、年間5万人を越える来訪者の快適な環境空間づくりや通常管理の強化と体制づくりを進めることとした。

調査研究では城内調査を進めつつ、城外の関連遺跡の調査を重点的に実施することとした。

また、「その後の鬼ノ城」として時間的空間的に示されるように、一帯の地域において里地里山の再生が生態系の維持回復以上に、自然環境の保全や史跡地の保護保存に寄与するものであり、積極的に関与していく必要があるものと位置づけた。(前角)



第58図 地域野外博物館構想図



第59図 第3期環境整備事業図

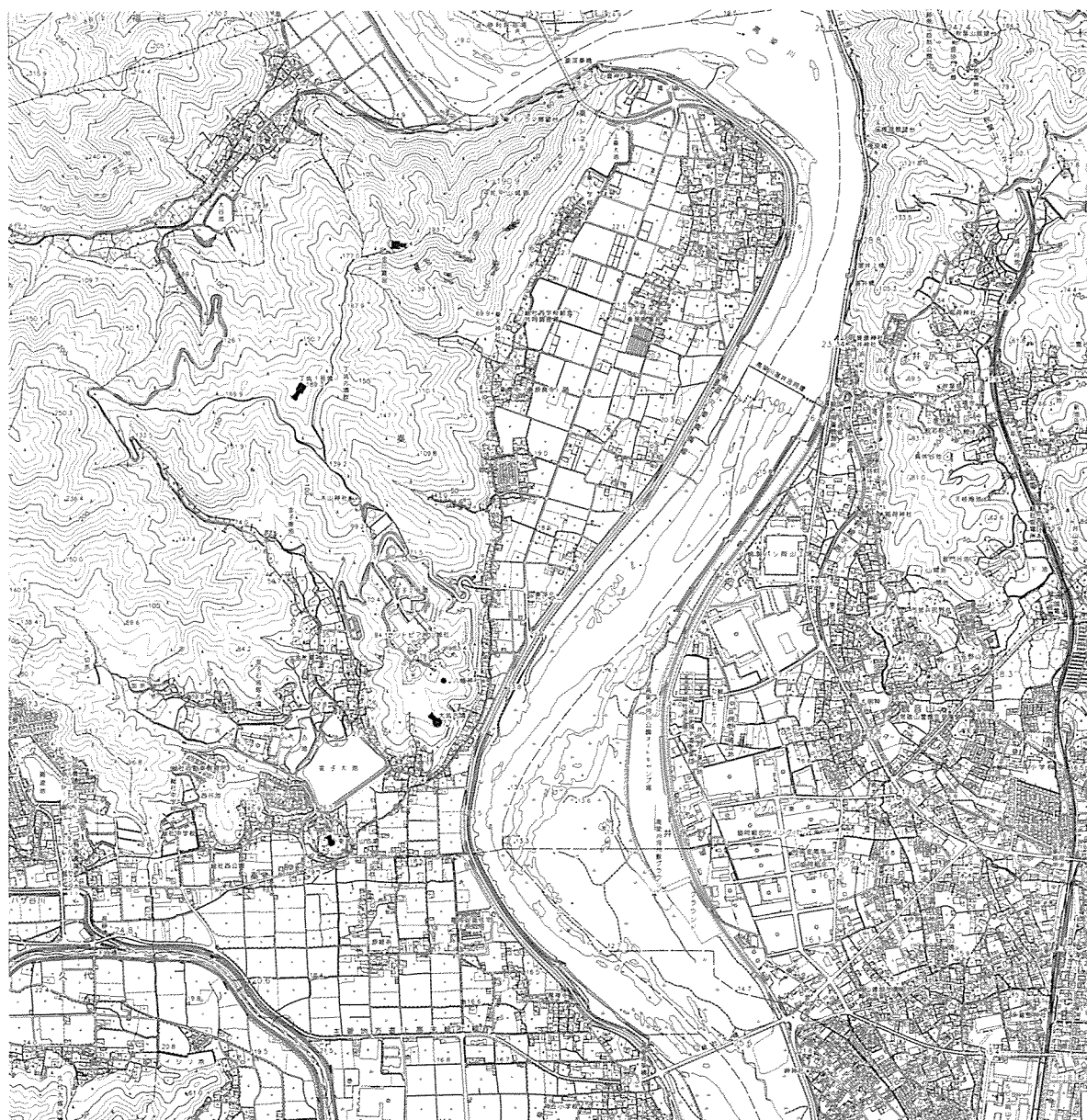
5. 付 載

秦茶臼山古墳表採の埴輪について

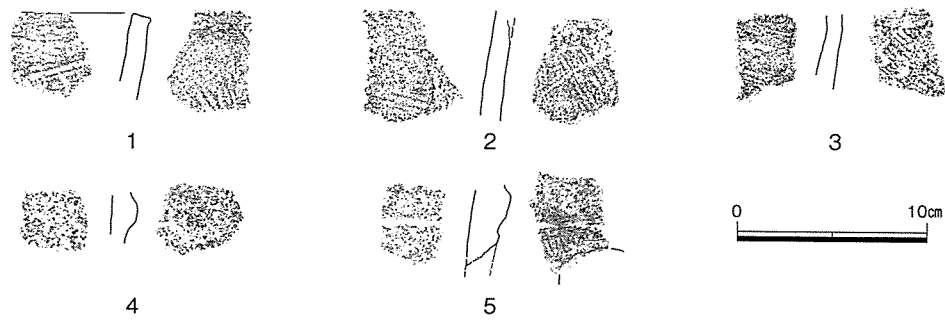
秦茶臼山古墳は、高梁川右岸の総社市秦字山崎に所在する。高梁川に面した秦大塚古墳や秦上沼古墳が築かれた丘陵から谷を挟んだ西の丘陵に築造された前方後円墳である。

高梁川に面して東西に延びる丘陵には近年発見された秦茶臼嶽古墳や当初前方後円墳として扱われていた一丁塚1号墳などの前方後方墳が築造され、さらに下方の南端付近には、前方後円墳：秦大塚古墳が築かれている。秦大塚古墳の上方には、総社市で唯一の三角縁神獣鏡を出土した秦上沼古墳が知られる。秦上沼古墳は、後世破壊されたため円墳とされているが墳形は定かでない。これらの首長墳は、いずれも古墳時代前期の所産であり、茶臼嶽古墳、一丁塚1号墳、そして秦大塚古墳の順で築造されている。

その後、この丘陵上には中期以降の首長墳は認められない。



第60図 秦茶臼山古墳位置図と周辺の首長墳 (S=1/25,000)



第61図 秦茶臼山古墳 表面採集埴輪 (S=1/4)

秦大塚古墳から谷を挟んで南西の丘陵先端に築かれた秦茶臼山古墳は、墓地によって墳丘を大きく破壊されており、墳形から時期を特定することは困難である。前期古墳という指摘もあるが、草原孝典が表採した埴輪は、少量ではあるが川西編年のV期に属するものであった(草原2009)。

昨年度、文化課職員：高橋進一と村田晋の両名が、秦茶臼山古墳の南東部で埴輪を採集した。表採した埴輪は、表面がやや荒れてはいるものの口縁部やタガの部分が残存しており、時期が特定できる良好な資料であった。前期古墳という指摘もある中で、秦茶臼山古墳の時期をさらに確実なものにするためにここに報告する。

表採された埴輪(第61図)は、後円部やタガが残存していた。同一個体片と思われる埴輪片がほとんどで、他の個体は1点のみである。

1は円筒埴輪の口縁部である。外面は粗い右下がりのナナメハケが認められ、口縁部はヨコナデを施す。内面は、工具による不定方向のナデがみられる。2は、器表が荒れ調整は不明瞭であるが、残存部の下端付近に粗い右下がりのナナメハケが施されている。内面は工具によるナデが認められる。なお、外面には弧を描いたと推定される線刻がみられる。3は外面上部にタガの下端をヨコナデしたと思われる痕跡があり、その下方は粗い右下がりのナナメハケが認められる。内面は工具によるナデである。4はタガが残存しており、一部は薄く剥落しているものの、幅がやや広く、低いタガが認められる。内外面の調整は不明である。1～4は同一個体と考えられ、胎土には長石・石英粒を含み、0.5mm以上のものがほとんどで2～3mmのものが目立つ。色調は、内外面共に橙(5YR6/8)色を呈する。5は、円筒埴輪のタガ付近の破片である。一部が薄く剥落しているが、タガは低く幅広である。タガの下端には強いヨコナデが認められ、その下方はややナナメの粗いハケメが認められる。内面の調整は不明である。胎土には0.5mm以上の長石・石英粒を含み、2～3mmのものが目立つ。色調は、外面が橙(7.5YR7/6)、内面がにぶい黄橙(10YR7/4)である。

以上、低く幅広いタガの特徴や、粗いナナメのハケメから、これらの埴輪は川西編年のV式に相当するもので、その中でも新しい傾向をもつ。草原が指摘したように、秦茶臼山古墳の築造時期は新しく位置付けられ、6世紀代に入る可能性も高い。(平井典子)

参考文献

川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会

草原孝典2009「古墳時代前期における首長の存在形態—岡山平野における古墳の築成状況から」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第1号

報 告 書 抄 録

ふりがな	そうじゃしまいぞうぶんかざいちょうさねんぼう
書名	総社市埋蔵文化財調査年報27
副書名	
巻次	
シリーズ名	総社市埋蔵文化財調査年報
シリーズ番号	27
編著者名	前角和夫, 高橋進一, 村田 晋, 平井典子
編集機関	岡山県総社市教育委員会
所在地	〒719-1192 総社市中央一丁目1番1号 TEL 0866-92-8363
発行年月日	2018 (平成30) 年3月31日

総社市埋蔵文化財調査年報 27

平成30(2018)年3月31日印刷
平成30(2018)年3月31日発行

編集発行 岡山県総社市教育委員会
総社市中央一丁目1番1号

印刷 サンコー印刷株式会社
総社市真壁871-2

